昭和36年9月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第9号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊 キリスト



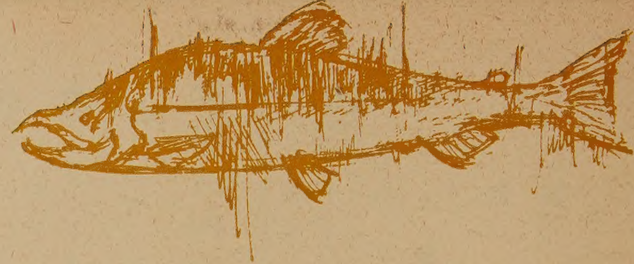
9

密林に聖書を説く　シュバイツアー

内なる平和と外なる平和　李 儲文

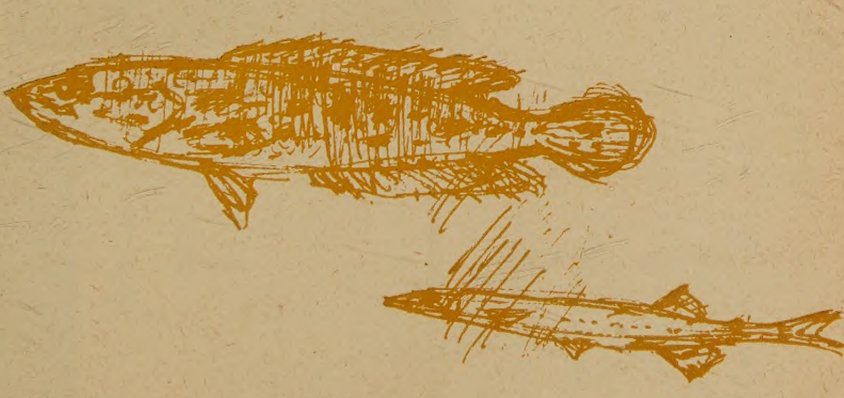
生蕃伝道がみのるまで　井上伊之助

伝道説教 なぜ生きているのか　菅 円吉



表紙・藤城清治　カット・山中春雄

9月号・目次



聖書のさしえ (9)

辻　成史





3

4



中世の写本挿絵の特質をより良く理解するために、今回はひとつ具体的な比較を試みたい。最初に掲げたのは、中世写本芸術の中でもとくに高名な、ドイツのライッヘナウ派の作品（980 年）である。一目みてわかるように上半には十字架降下、下半には埋葬が描かれている。この作品を第３、第４図の同主題のレンブラントの作品と比べてみよう。第３図は 1642 年、第４図は 1653 年ごろで、それぞれ十字架降下と埋葬をエッチング（腐蝕銅版画）で描いている。このおよそ６世紀のへだたりを持つ二種の作品のいずれが芸術的にすぐれているかを論ずるのはむだなことである。前者は、中世美術史上でももっともすぐれた作例の一つとして、しばしばひかれる写本から出ているし、またレンブラントの作品も、彼の円熟期のけっ作に数えられるものだからである。しかし正直のところをいうならば、わたしたち 20 世紀の日本人の目にとっては、レンブラントの作品のほうが、少なくとも**自然**に見えはしないだろうか。悲しみに沈んだ人々の動き、垂れ下がる布衣、墓のある園の自然は見事に流動する線で捕えられている。一見するならば、前者中世の作品はいかにも素朴・幼稚である。埋葬の墓は奇妙にいびつである。背景などはほとんどない。ただ２本の、舞台の大道具のようなねじれた木が立っているだけであり、作者はここが園であることを示すために、わざわざ HORTUS（庭）と、文字でもって書きそえている。**見えるままの自然**を写すという点では、やはりレンブラントがすぐれていることを認めないわけにはいかない。しかし、この２種の作品から受ける感動はどうであろうか。この自然主義という点からは、劣るライッヘナウ派の作品は、しかし、なんと力強いリアリティーを備えていることであろう。描かれた二つの光景はもはや**自然の中で**起こっている出来事ではない。それはわたしたちの魂を通して常に現前する**超自然的出来事**である。深く心をすまして見るときは、ここに書きこまれた HORTUS という文字までが、万金の重みをもって心に迫るのを覚えるであろう。



２・ドロゴンの典礼書（９世紀中葉）の初頭文字装飾。このＤの中には天使による復活の告知と、復活後マグダラのマリヤにあらわれたキリストが描き込まれている。美しい植物文様を鑑賞しよう。

月刊 キリスト・9月号
巻頭随想

涼風の吹き起こるところ

高瀬 恒徳

一九二八年というと、今から三〇数年も昔のことである。わたしは郵船・鹿島丸で欧州からの帰路にあった。船がスエズ運河にはいると、両岸の砂漠の燃えるような熱気のほてりを受けてたまらなく暑い。

「やりきれないネ」「こりゃたまらん」。――われわれはマストの日陰に立って、ちっとも風のない暑さをつぶやいていた。と、たまたまそばを通りかかった船長が言った「涼しい所へご案内しましょうか」一同はとっさに「待っていました」とばかり船長について行った。

船長は幾つかの階段を下りて行った。屹水線をさらにさらに下りて行った。しかし、ちっとも涼しくもならないばかりか、にわかに暑くなってきた。そして行き当った所は汽関室で全裸の人夫が仁王さまのようになって石炭をくべていた。その汽関室は二百度近くであるという。

船長の話によると「二百度近い暑さに堪えるためには、ただ体がじょうぶだというだけではだめです。暑さを暑いと思わない人でなくては勤まらないのです」するとだれかが「つまり暑さに無感覚な人なんですな」と言うと船長は「いいえ、暑くない人なんかありません。暑さを感じない人とわたしの言ったのは、落ちついた、あせらない人、つまり心の平らかな心のきれいな人ですね」

甲板に上ってみると、船はやはりスエズの運河を通っていた。しかし、いままでとは打って変わってそこには涼風が満ちていた。

わたしは船長のことばを反芻した。石炭の真赤な焔を全身に浴びて仁王さまのように突立っていた英雄を思い出した。そして彼の犠牲によって、この大きな船が進行していることに気がついた。――落ちついた、あせらない、心の平らかな、きれいな人！

わたしは快川和尚のことばを思い出した――「心灯を滅却すれば火もまた涼し」。暑さというのは外界の気温だけのことではない。心の問題なのである。堪えがたい暑さというのは、欲望に駆られてあせっている人の心にある。他人をうらやみ、憎み、他人を圧倒しようと悶えている人の心にある。また、罪を犯して、悩み苦しむ人の心にある。シェクスピヤの書いたマクベス夫人は、王を殺したとき、血が手についた。その血糊を洗っても洗っても血の悪臭がとれない。そして暑苦しい幾夜を眠れずにすごしている。警察に追われている殺人犯などにとっては、この夏は、さぞ蒸し暑いことであろう。

しかし、それとは反対にダビテ王の書いた、詩篇五一篇などをよむと、人生いっさいの苦悶や暑熱をにわかに洗い落として、心からな涼しさにひたる秘訣がある。それは、どんな大罪を犯した人でも、心のどん底から罪を懺悔し、その罪が赦された瞬間、あたかも沛然たる雷雨がすべてを洗い去って、一新された爽やかさ、涼しさが心に満つるという秘義である。

教会は罪の赦しの機関である。われわれが悔改めて神に帰る門として洗礼のサクラメントがある。日々にキリストとともに歩み、キ



世界宗教者平和会議　7月25日から4日間、京都で仏教・キリスト教・大本教らの世界の宗教者が平和のためになにをなすべきかを討議し、京都アピールを発表した。西からはアメリカ、カナダ、西独、オーストラリヤなど、東からはソヴィエト、中国、東独、チェコ、ブルガリヤなどの宗教者代表が集まり、総数250名であった。

スラム街にセツルメント　7月15日、東京都足立区に、キリスト教の隣人愛をモットーにする本木愛隣館が、開所した。石原憲治氏、種田あいさん、滝沢吉五郎さんとみのり会の人々などが力を合わせてできたもの。



扱った第一章から第六章までは、全くユーモアに満ちている。有能であるばかりでなく魅力に満ちた人物である。このことは伝道と牧会の上でたいせつなことである。主に深く愛せられているもの、余裕の心はユーモアをたたえる。
（日本基督教団宣教研究所主事）

平和を思う

泉 園子

五年前のことでございます。わたしの母校京都平安女学院を明治時代に卒業した友が、明治会を作り、はじめて京都、東京合同の親睦会を熱海温泉で開きました。なにぶん六五才以上のおばあさんたちばかりで汽車、旅館も閑散のときを選び、二月七日、八日に定まり、東京が当番で万事準備いたし、当日の天候を心配いたしましたが、幸いに好天気に恵まれ経費もなるべく安くと考え某寮で開きました。当日京都より一五名、東京を合わせ三四名、その中には卒業以来はじめてお会いするかたが相当あり、中には三〇年、四〇年、五〇年ぶり、旧姓を名乗ってもなかなか思い出せません。ただただ喜ぶばかり、そのうちお話しするとようやくはっきり思い出し、「まあ、あなただったの、おたがい元気でいたおかげね」とかたく手を握り、うれしさ、懐しさ、うれし涙の美しい光景でございました。学生時代聖書をともに学び、讃美歌を楽しく歌った若い日の友と、いま何十年ぶりに相つどいおたがいの年齢から申せば、人生の旅路も天国に近づいた友と老いを忘れ少女時代にかえりともに語り祈り讃美の時を与えられ、楽しい楽しい三日間を夢のように過ごしました。寮の女中さんが「このようなおばあさんの会で、皆さまのようにほがらかに明るく英語の歌を輪唱されまた楽しいゲームにはしゃぎ、若い人たちも顔まけです」と評されたほどでございました。けれども、その中には家庭的に恵まれぬかたがあり、ことにお嫁さんといろいろな点が平和でないお話を伺い、わたしたちも明治、大正時代、嫁としておしゅうとめさんに仕えた経験から、現在のお若いかたが老人にたいし、もっともっと理解していただきたいと語りあったのでございます。

数年前中国へまいりました時、撫順の老人ホームを訪ねました。一生を働いて来た人たちが年をとり、身寄りもない場合、政府の温かい配慮で彼らは幸福な余生を送ることができ、日当たりの良いへや、庭には美しい花が色とりどりに咲きみだれ、平和な日常生活をなさっていました。今の中国は子供をたいせつに老人をもたいせつにいたします。ひとりの老人が若い時にうたったという歌をきかせてくれました。うたい終るとわたしたちの拍手に顔を赤らめました。若い日の思い出がそうさせたのでしょう、ほんとに美しい一こまでした。

昨今日本の現状は皆さまもご存じのように、毎日の新聞に悲しい出来事が繰り返えし報道され、胸をいためるばかりです。もっともっと明るい国作りこそわたしたちの責任であり、義務であり、わたしども力を合わせ神を敬い、謙遜な精神を深め聖書にしるされてあります『平和を創り出す人たちは幸いである』とよばれるよう努力をいたさねばなりません。『天には栄え地には平和あれ』この聖書のおことばに聞き、まず自分の心が平和であるか、隣人との交わりは平和であるかを確かめ、身近かな小さいことから平和に進んでいかねばと努力しております。去る七月二五、二六、二七、二八日の四日間京都市でこのたびはじめて世界宗教者平和会議が開かれました。各宗教者が、心を一つにして全人類平和のため、この会議は行なわれたのでございます。わたしもいたりませんながらも、この会議の末席に列なり平和を創り出すための努力をいたしたのでございます。
（泉屋クッキーズ会長）

リストの生命を受けるための聖書が備えられている。

心の悩み苦しみこそ、人生のあらゆる暑熱のもとである。しかし、心から罪を懺悔する人にとっては、神はその罪を決定的にお赦しになる。罪の赦しについて、聖書が教えているところはこうである。神は仰せられる「もはや、彼らの罪と、彼らの不法とを思い出すことはしない」（ヘブル一〇・一七）と。

ここには、もはや、苦悶のかげもない。朝に夕に罪赦され、神を愛し人を愛し、よき奉仕に日を送っている者にとって、暑熱はすでに暑熱ではない。冷房装置もいらなければ、扇風機もいらない。涼風はおのずから心のうちから吹き起こって、あたり一面にみちあふれるであろう。天の使が『水晶のように輝いているいのちの水の川を見せ』てくれるとは、こうした人に対してであろう。

（日本聖公会主教）

「ある種子は百倍に」

—フロンテア宣教師　ノッス博士伝—

原　良三

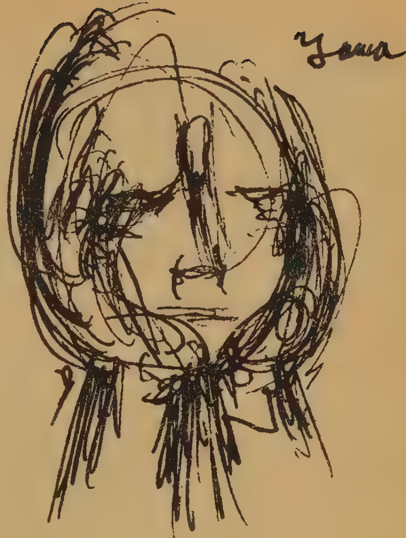
東北は日本の石地である。ただに産業的にみてそうであるばかりでなく、思想的に精神的にもそうである。政治意識の未開発の状況に対応して保守系の地盤が半永久的な安全率をもって形成されている。正に日本にとって課題としてのブロックである。

その石地と取り組み、「東北は日本のスコットランドである」と言って、生涯をこれに賭けたのはノッス博士である。この東北は日本のスコットランドだということばは博士の創案ではないということだが、よしんばそれが東北伝道の立案者押川方義のことばであったにもせよ、ノッス博士の東北宣教上のすべての発想はこのことばにかかっているように思われる。彼はこのことばの実践者であったのである。その意味は、現在、東北は開発低段階の地方であるが、それに対して実に大きな責任と希望とを感じてその評価を惜しまなかった点は、宣教師としてその識見卓抜であったと言わねばならない。日本宣教の課題として本式に東北伝道の問題と取組み、東北地方の社会と家族の構造、ならびに日本人の精神構造の歴史的・現実的な把握に対して当時の宣教師として最高級の認識をもっていた。そうした点から、日本の仏教・神道・儒教などの教義的な把握と、それに基づく習俗の分析は実に鋭いと言わねばならない。一口に言えば、伝道の対象としての日本の社会と人間の把握という点において有能であったということになる。この書の「ノッスの語録」一四七ページ以下を読んでみていただきたい。武士道と儒教と仏教と日本人一般の習性についての彼の観察は、今日においてもりっぱに通用する妥当性をもっている。日本人のメンタリティーに全く無関心で、またその根拠についての知識なしにこの国で伝道しようということは全く冒険であり、無理である。このようなことは現在の日本で行なわれているのではないかとの懸念から、この書の出版は有意義だと考えられるのである。宣教師のかたがたの日本における宣教のアプローチに対して一つの重要な資料となるであろう。日本の教会および牧師・信徒にとっては、組織的な伝道計画とはどういうことであるかを教える人である。生涯を全く東北の伝道にかけて、あらゆる状況のうちで、その戦術を練った。東北学院長シュネーダー博士は「ノッス博士はおそらく、日本で産みの苦しみをした外国人宣教師のうち、最たる人物である」（一四二ページ）と述べている。

最後に記しておきたいことは、ノッス博士という人物は博識の人、信仰の人であったとともに、人間として実に興味ある人物だということである。彼の生涯を取り

ところで死んだらどうなるのでしょうか。死んだら肉体はなくなるが、霊魂は残っているのか、あるいはなにもなくなるのか。そんなことは考えたってわからない。なぜ生きているのかということは、けっきょくなぜ死ぬのかということなのだが、死とはいったいなにかということは全くわからない。しかしそのまったくわからない闇がおそかれ早かれやって来る。人生には初めと終りとに鉄のカーテンがかかっている。わからない闇がある。人間はそのカーテンとカーテンとの中間で、中ぶらりんになって生きている。どこから来てどこへ行くかがわからないで歩いている。ここからして不安という気持ちが起こって来る。どこから来てどこへ行くというようなことをいくら考えてもわからないのだから、そんなことを問題にするのはやぼだ。とにかく今われわれが生きて行く目さきのことを考えていくよりほかに仕方がないではないか、というわけでわれわれのおかれてある事情の中でできるだけ自分にとって都合のよいような生活をするように設計をする。学生ならば、とにかく卒業して就職するということに全力を集中して勉強する。就職できて、相当のサラリーをもらうようになったら、よい相手を見つけて結婚をする。結婚すると子供ができる。そしていままで自分が親をいじめた罰に今度は自分が子供にいじめられる。そうこうしているうちに年をとって死んでしまう。かりにりっぱな社会的地位を得たり、あるいは相当の財産をつくったりすると、世の中というものはうるさいもので、ほっておいてくれたらよさそうなものに、金ができると、その銭をなんとかかんとか言って使わせるように、まわりからしむけに来る。社会的地位ができると、それを利用しようとして、あの手この手でいろいろのことをたのみにくるが、うっかりそれにのるとたいへんなことに引っかかる。地位ができ、銭ができるにしたがって心配ごとがふえる。地位や銭がなくても困るし、あっても困る。そうして死はおそかれ早かれ必ず最後にやって来る。地位があり、銭があれば死はこわくないというわけにはいかない。

それではいったい、人生とはどういうものなのでしょうか。なんのため生きているのかわからないから、ただ目さきのことをできるだけじょうずにやっていくだけだというのでは、これはけっきょく絶望である。なにか目さきのことで自分の全部をうちこんでやっていくことのできるものがあるときには、なんだか生き甲斐があるようだが、しかし最後にはどっちみち死がふって来る。したがって、その生き甲斐は、死の来る時までのこと。しかも死はいつ来るかもわからない。今夜来るかもしれない。そしてそれで全部おしまい、というのなら、なんとはかないものでしょう。とにかく最後のことはわからない。だから目さきのことだけやって行くというのがだいたいすべての人がやっていることではないでしょうか。しかしそれではほんとうのところは絶望、体裁のいい絶望である。なんのため生まれてきたのか、なんのため死ぬのかわからないで生きている。心の中にわからないもの、闇がいつも残っている。こんなわからないしかもつらい人生を自分が生きようとしたのでなく、だれかによって生かしめられて余儀なく生きていかねばならぬ。だから人間の心の奥底にはいつも不平と不満がある。こういうように死に対する恐怖と不安、そしてわからぬ人生を生きねばならぬ不平と不満、が人間の心の奥底にいつもわだかまっている。しかし、そういうことに気を奪われていては不愉快であり、なにもできなくなるから、つとめてそれを忘れようとし、そして、目さきのことでもっと愉快なこと、楽しいことに注意を集中す



伝道説教

なぜ生きているのか

菅円吉

人間はなんのためにこの世に生まれてくるのでしょうか。われわれは別に自分で生まれようと思って生まれたのではない。気がついてみると、だれかによって生み出されている。そしてなんのために生きるのかがわからずに生きている。なんのために生まれてきて、なんのために生きるのかなどということは考えてもわからない。ただ一つわかっていることは、われわれ人間はおそかれ早かれ死ぬということである。死なない人間はない。そうすると、人間は死ぬために生きているのではなかろうか。若い人などは死などということは考えない。われわれは日日成長発達しつつあると思っているが、よく考えてみれば、若い人をも含めて人間はことごとく一日一日お墓に近づきつつあるというのがほんとうではないでしょうか。しかし死は遠いさきのことでない。老人になると人は死のことを考え出すが、若い人は死はまだまだ遠いさきのことだと思うかもしれないが、そんなことはない。死はいつやって来るかわからない。東京などではタクシーがビュービュー飛ばしているが、街の一方の側から向こう側へ横切ろうとするたびにわれわれは毎日、生死の巷を徘徊する。いやタクシーに乗るたびに、死が目の前にぶらさがって来る。統計によると、老人になってから死ぬ人の数よりも、生まれてすぐ死ぬ人の数のほうが多いということである。そうすると、若い人がいちばんたくさん死んでいることになる。だから若い人だって、死は遠いさきのこと、老人だけの考えることで、自分のことでないなどと考えるのは全くの認識不足である。

ト教でも「神を信ずる」というので、いま言ったところの神仏を「信ずる」というときの「信ずる」と同じ働きだと考えられているが、これは非常なまちがいである。キリスト教でも同じ「信ずる」ということばを使っているが、その意味が違っているのである。だから、聖書を読むときに非常に注意しないと、聖書においては、われわれが普通用いることばが使われているが、そのことばの意味はわれわれが普通そのことばで理解している意味とはまったく違っている。「信ずる」とか「信仰」とかいう場合でもそうで、キリスト教で「信ずる」という意味は「聞いて従う」という意味である。ロマ書一〇章一七節には、『信仰は聞くことによるのである』と書いてある。この世には考えることによってはわからないことがたくさんある。他人の心もそう、死もそう、神もそうである。人生問題、宗教問題はみなそうである。つまり考えること、知識、学問には限界がある。学問が進歩すれば、なんでもわかると思っている人が多いが、これはまちがいである。どんなに学問が進歩しても、この世にはわからないものがたくさんある。そして、そういうものは学問すなわち「考える働き」によらないで、「信ずる働き」によらねばならぬ。その信ずるということは、聖書によれば「聞く」ということにほかならない。

人間はなぜこの世に生まれてくるのか、なんのために生きているのか、いや生きることは死んで行くことだから、人間はなぜ死ぬのか、そして死んだらどうなるのか、こういう重大な問題の解決は、学問すなわち「考える働き」によってはできない。これは信仰によらなければならぬ。つまり「信ずる働き」すなわち「聞く働き」によらねばならぬ。どういうように聞くのだろうか。前述したように、われわれはだれかによってこの世に生み出されたのであって、この世はわたしが生まれてくる以前に、ちゃんと存在していた。この世はわたしが造ったものでない。だれかがすでに造ってある。その中へわたしは投げ出されたのである。この世がわたしの造ったものなら、この世の意味はわたしにわかるが、わたしの造ったものでない、だれかほかのひとの造ったものであるところのこの世の意味は、ちょうどわたしが、他人が心の中でなにを考えているかを考えて知ろうとしているときのようなもので、ああだろうこうだろうと想像はできても、ほんとうのことはわからない。ほんとうのことは他人がその心を打ち明けてくれるのを聞いてわかる以外にはわかり方はない。それとまったく同じで、この世や人生の意味がわかる――すなわちなぜこの世に生まれてきたかということがわかる――ためには、この世を造ったひとが、こういう目的でこの世を造ったのだと語ってくれなくては、永久に人間には人生の意味については暗中模索をつづけるほかはない。この世の造り主すなわち神が、自分はこの世をこういう目的で造り、人間をこういう目的でこの世に両親を通じて生み出すのだと、神が語り、打ち明けてくれるという出来事が起こらなければ、人間にはこの世と人生の意味は永久にわからない。ところで天地の造り主なる神が、人間にわかるように、イエスという人間の言行を通してこの世の意味を人間に語ってくれたという出来事が、歴史の上において起こったというのが、聖書の伝えるニュースである。そのニュースを聞いて、われわれもイエスを通して神の言葉、神の心の打ち明けを聞くことがキリスト教の信仰なのである。

（立教大学名誉教授）

る。けれどもあのフロイトが言うように、死に対する恐怖と不安や心の奥底の不平と不満とは、これを人間は一時は忘れているようでも、人間の心の中からはなくならない。それは一種の複合観念（コンプレックス）となって潜在意識の中へもぐりこむ。だから意識の中にはないから人間は忘れているようでも、意識の世界よりも潜在意識のほうがはるかに大きくて、そして知らず知らずの間に人間の行動を左右する。人間が怒りっぽいのは、なにか不平不満が心の奥底にあるからである。家庭がうまくいかないと、家族中の人がゆううつになり、不愉快になり、けんかしやすくなる。そういう不愉快な気持ちは気持ちだけですまない。人間の肉体的行動の上にまで影響を与える。病気になったり、あるいは事故を起こしたりする。自動車事故を調べてみると、運転手が朝、家を出る前に夫婦げんかをしたというようなときには、車のハンドルを切り損ねることが多い。歩行者にしても、家を出る前に親子げんかをしたときなどは、道で自動車をよけるときの動作がスムーズにいかないで、つまずいてころびやすい。とにかく人間をいちばん不幸にし気持ちを不愉快にしている根源は、前述した死に対する恐怖と不安、ならびに生きている意味がわからないことからくる心の奥底の不平と不満である。人間は心の底に解けない闇を持ちながら生きている。これが人間をいちばん不幸にしているのである。ところでこういう問題は、人間はいくら考えても、考えるという仕方では解決できない。人命は自分で経験しないことは考えることはできない。たとえば死は経験できない。だから死は考えられない。それでは死は全然わからないのでしょうか。

　ここで信仰ということが必要になってくる。いったい、人間は普通にはものごとがわかるのは考える働きにのみよると思っている。わからないのは考え足りないからで、徹底して考えれば必ずわかると思っている。だから人生問題のこととか、人生の目的とか、死とかあるいはまた宗教のこと、すなわち神というようなことについても考えてわかろうとする。しかし今も言ったように、こういう諸問は、考えることのできない問題である。なんでも考えればわかるというのはまったく独断である。もしこの世の中に、考えることによってわからないものがあったら、どうしますか。前述したように、死は考えられない。もっと手近な例は、他人の心である。他人が心の中でなにを考えているかということは、わたしは外からその他人を見て考えているのでは、「こんなことを考えているのだろう」「あんなことを考えているのだろう」という想像、空想しかできない。その『だろう』がほんとうかどうかは、わたしが自分で考えているだけでは、どうしても決することはできない。それなら、ほんとうのことを知る方法はないのか。ある。しかし、それは考える働きによるのでなくて、その他人に心の中を打ち明けてもらえばよい。わたしはその打ち明けを聞いて、はじめて他人が心の中でなにを考えているのかということについて最後的なことを知る。これは『だろう』でなくて『だ』である。その他人の打ち明けに対して、わたしは、そんな「理屈はない」と言って反駁することはできない。他人がこうだと言えば、それが最後である。

　こういう知り方は、考えて知るのでなくして、他人が語って来るのを聞いて知るのである。この聞いて知る知り方がキリスト教で言う「信仰」とか「信ずる」とかということである。普通には「神仏を信ずる」と言って、仏を信ずるのも、神を信ずるのも同じ「信じる」という人間の働きだと理解され、キリス

かし、あなたの御思いは光です。あなたがわたしどもに与えたもうたものは実りをもたらす種であり、豊かな収穫です。そして、それらのものをあなたの穀倉にもたらすのは、あなたの恵みです。アーメン。

自由

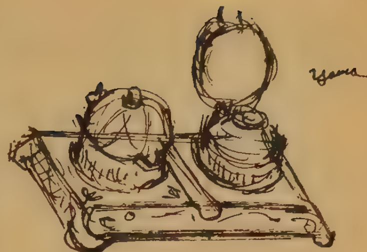
われは卑しきにおる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも飢うることにも富むことにも乏しきことにも、いっさいの秘訣を得たり。われを強くしたもう者によりて、すべてのことをなし得るなり。　（ピリピ書四・一二、一三）

内的な生活を妨げられず、神の道から逸脱もせずに、すべてのことをなし得るということ。乏しきにおり、富におることができるということ。それは、すばらしい自由である。だれがそのような自由を欲しないであろうか。乏しさは、その激しい苦痛でわれわれの力を奪うから、われわれはそれを恐れる。また、過剰はわれわれの空想を刺戟し、われわれの貪欲に火をつけ、われわれをどれいにする欲求の重荷を与えるから、それを恐れる。パウロが持っていたような自由は、われわれ自身の肉体に対しても、またわれわれが自分のさまざまな欲求のために従属する人々に対しても、われわれに毅然とした態度を与える。

パウロ以外のさまざまな人も、別の方法でではあるが、やはりそのような自由を得ようとして努力した。すなわち、生命の自然的な根拠から離れるために、自分のからだを虐待するという方法である。しかし、そのような方法で、彼らはすべてのことをなし得るという自由には達しなかった。飢うることだけでなく、飽くことも過剰な状態であることもできるというような自由には達しなかった。彼らは生命をすり減らすことによって自由を得ようとしたのであるから、その得たものは、非常な損失によってあがなったものであった。

パウロは、なにか修道院の規則のようなもので自分を訓練することによってその自由を得たのでもなければ、なにか一つの組織の中に自分の生活を押し込むことによってその自由を得たのでもなかった。どのような状態においてもその全能の恵みをもって彼のもとにいました主。その主からは、どのような乏しさも彼を引き離すことはなく、どのような過剰も彼を誘い去ることはなかったのである。パウロは、キリストにおいて、自分の魂の最も深い願いを満たされ、われわれの本質の最も深い根抵から生まれる飢えから自由にされたゆえに、なんの苦痛もなしに飢えの中にいることができた。キリストが彼の中にその魂を豊かに満たす愛をよびおこしたもうたゆえに、どのような過剰も彼を混乱させたり堕落させたりはしなかったのである。

わたしは山に向かって眼をあげます。そこから助けがわたしに来るのです。わたしを苦しめ悩ますものから自由になるために必要な助けは、崇高な高みから、わたしのもとに降って来るのです。わたしがあなたに眼をあげると、わたしを恐れさせ誘い引き寄せ魅惑するものは、その力を失います。主よ、あなたはわたしの力であり、わたしの宝です。わたしの魂はあなたを求めます。それはあなたがわたしを自由にしてくださるからです。アーメン。



＜思いと祈り＞

シュラッター
井上良雄訳

毒麦

天国は良き種を畑にまく人のごとし。人々の眠れる間に、仇きたりて麦の中に毒麦をまきて去りぬ。
（マタイ伝一三・二四、二五）

イエスだけが種をまきたもう畑が、なぜないのであろうか。イエスのものである畑に、なぜ麦の間に毒麦が生えるのであろうか。すべての者がただイエスにだけ属して他の主人はなんの力も持っていないというようなキリスト者の交わりが、なぜないのであろうか。そこではキリスト教的なことだけがおこって、他の悪いことはおこらないというようなキリスト者の生活が、なぜないのであろうか。イエスが与えたもうものだけでなく別の手がわたしの中にまいたたくさんのものを、なぜわたしは自分の中に持っているのであろうか。

このイエスのたとえは、敵の力というものを、われわれに思い出させる。このたとえを聞くことによって、われわれは、われわれすべての者を妨げるサタンの力がどのように強いかということを、知らされる。どのように強く闇の力が神の国に逆らっているかということを、知らされる。しかし、この答えは、次のような新しい問いをよびおこす。イエスは、そのような敵に対して屈服したもうのであろうか。彼はその畑を守ることができないのであろうか。――すなわち、われわれは、神の恵みがそこに示されたときにはじめて、自分の身におこったことを理解するのである。

しかし、イエスは、われわれに、次のように語りたもう。そこではわれわれの失敗がおこりえないというような教会はなく、わたしがそこに属するということによって、わたしの救いを保証してくれるというようなキリスト者の交わりもない。しかし、そのような事実こそ、明かに恵みの秩序である。そのことによって、教会を信ずるということは、わたしには不可能なこととなる。しかし、もしわたしが自分の中にただ神聖なものだけを発見するとしたならば、どのようなことになるであろうか。その場合には、わたしは自分自身を信じて、自分の所有物が与えてくれるささえ以外のささえを必要としないであろう。しかし、自分の中に上から来たものと下から来たものを持っていることによって、わたしは、そのような状態から守られている。イエスがその畑をサタンの侵害から守りたまわないことによって、彼はわれわれに、絶えず新しい体験として、次のような事実を示したもう。「汝の力によっては、汝には何ごともできない。教会の力によっても、何ごともできない。教会は、そのあるがままの姿であるべきである。わたしが汝の楯であり、汝の城である。わたしを信ぜよ」――そのように、彼は語りたもう。

聖なる御神よ。わたしが信じ得るのはわたしではなく、ただあなただけです。わたしはよろめきつまずきます。しかし、あなたはわたしを立たせてくださいます。わたしの思いは乱れます。し

多くははじめて耳にするこの人たちに伝えられているのです。たまたま、このとき、なにやら叱責の声が、礼拝の厳粛な雰囲気をこわすこともまれではありません。

説教は、単純でなければなりません。わたしの聴衆はアダムとイブや、イスラエルの父祖たち、預言者たちについて、また、救世主や使徒たちについてなにも知らないのです。わたしは、神のことばが、この人たちに「時間」を超えて語りかけたもうままにしています。「メシア」(救世主)ということばを用いますとき、わたしは、「神がおつかわしになった万人の王」であるというふうに説明します。とりわけ、わたしは、部族の聴衆に向かって福音を説く人々が、共通して陥りがちな「律法を説く」という誘惑を避けるように努めています。うそをついたり、盗みをしたり、不道徳なことが第二の天性となっている人々に、十誡を引用しないで、キリストの福音に対する心がまえをさせることはむずかしいことです。

わたしは、神と和解することへの憧憬の念を人々に目ざますように努めています。不安なやすらぎのない心とおだやかな平和な心との相異について語りますと、聞き手の中で、最も荒っぽい人でさえ、それがどういう意味であるかを理解します。そうして、わたしが、「イエスさまは、神との平和をもたらすおかたです」と、説明しますと、彼らはよく悟ります。

彼らにわかってもらうためには、わたしは、具体的に話さなければなりません。こうして、たとえば、「自分に対するきょうだいの罪を七たび赦すだけで十分ですか?」というイエスに対するあのペテロの問いかけは、一般的な命題のままに残しておくことはできません。わたしは、彼らの生活を通していくつかの実例を引いて、それを明らかにしなければなりません。最近、わたしは次のように彼らに話しました。——

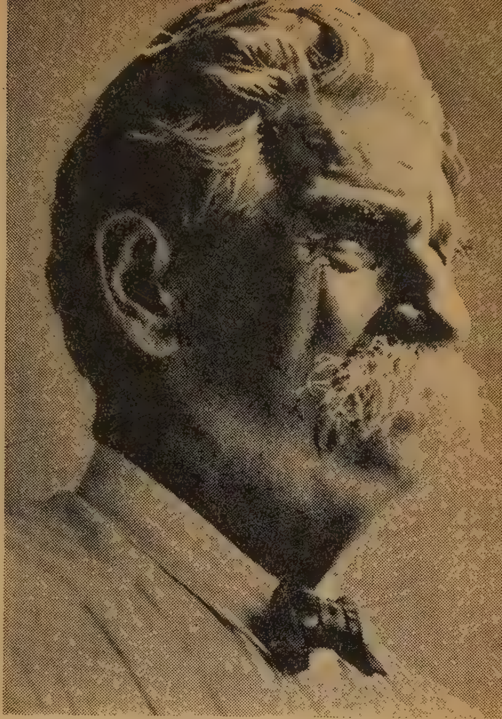
朝、起きがけに、たちが悪いやつだと評判の人が、やって来て、あなたを侮辱します。

イエスが、おまえの敵を赦しなさいとおっしゃっていますから、あなたは、じっとこらえて黙っています。のちほど、その隣人のやぎが、あなたの昼食のバナナを食べてしまいます。なぐり込みをしかけないで、あなたはただ彼に向かって、「あなたのやぎが、やったんですから、あなたが、そのバナナの弁償をするのは当然でしょう」と申します。しかし先方が、その申し出を拒めば、あなたは、「神さまは、わたしの農園にこんなにもたわわにバナナを生らしているのだから、これっぽちのバナナのために揉める必要なんかないのだ」と思って、静かに立ち去ります。

さらにしばらくして、あなたのバナナを一〇ブッシェル分持って自分のといっしょに、市場に売りに行ってきた男が、九ブッシェル分だけの代金をあなたに渡します。「このうそつきめ!」と、あわや、あなたは、彼を面罵

密林に聖書を説く

アルバート・シュバイツァー
小林　基　訳



フランス領赤道アフリカのランバレネにあるわたしの伝道所で、わたしは、日曜日ごとに福音を説きます。文明社会に住んでいるキリスト者にとっては、この説教はちょっと風変わりに思えるかもしれません。

わたしの会衆の多くはキリスト教について皆目知らないのです。この人たちは、深い奥地からやって来た渡り鳥のような働き人たちです。まもなく彼らは、適当な女性を得て、結婚するために故郷へ帰って行きます。

彼らが、キリストの福音のいくばくかを携えて帰るとしましたら、わたしは、一粒の種子を蒔いたことになります。

徐々にわたしの患者たちや、その付添人たちが姿を見せ、病棟と山の斜面の間にある木陰に腰をおろします。わたしは、移動式オルガンを弾きます。集会では、皆でいっしょに歌うことはできません。というのは、会衆はたいてい、自分の部族にだけ通じる異なった六つの方言を話す部族民の寄り合い世帯だからです。

ふたりの通訳が、わたしのことばをくり返して言います。わたしは、聴衆が静かに坐っていることを要求しません。彼らは、火をおこしたり、自分たちの食事を料理したり、子供たちのからだを洗い、また、髪をすいてやったり魚釣りの網を繕ったりしています。神のことばが

れて、あなたは、一本の木のかげに身をかくし、「この侵入者が帰って来たら、そいつの魚を一匹残らずふんだくって、その地区の頭のところへ、ひっぱっていってやろう」と、もくろんでいます。ところが、そうやって待ち伏せしているうちに、あなたの内心の声がささやきはじめます。「もしも、わたしたちが、わたしたちのきょうだいをゆるさなければ、かみさまは、わたしたちのつみをおゆるしになれないのだよ」というイエスさまのおことばが、くりかえし、くりかえし、聞こえてくるのです。

イエスは、ふたたび、あなたの心の勝利者となりたまいます。夕暮れに、その男が、とうとうもどってきますと、あなたは、木の陰からつと歩み出て彼に言います。「主なるイエスさまの求めで、あなたを無罪放免します」と。あなたは「魚をこっちによこせ」などとは言いません。しかし、彼は、あなたがけんかをしかけなかったので、まったくたまげてしまって、きっとあなたに魚をくれるでしょう。

さて、首尾よく七たびきょうだいを赦したのですから、あなたは満ち足りた誇らかな気分で家に帰ります。しかし、ひょっとして、ほんとうにその日、主イエスが、あなたの村を尋ね、あなたが、おほめのことばをいただけるかと思って、いそいそとイエスさまのみ前に進み出るならば、イエスさまは、ペテロにおっしゃったと同じようにあなたにも、「七たびでは十分でない」とおっしゃるでしょう。「神さまが、おまえの多くの罪をお赦しになれるには、おまえは、もう七たび、さらに七たび、ふたたび、七たび、そのまた何倍も赦さなければならない」と、おっしゃるでしょう。

わたしは、会衆の顔、顔、顔、をじっと見まわします。すると、彼らが、どんなに感動しているかがわかります。しばしば、わたしは、話を中止して、わたしの語ることが彼らの心にしっくりするかどうかをたずねます。彼らは「ほんとうに、あなたの言われるとおりです」と、ややもすると一斉に大声で答えます。

説教がすみますと、わたしは、彼らに両手を組ませ、それから短い即席の祈りを非常にゆっくりと唱えます。祈りの終りのアーメンを唱えてからも、長いこと彼らの頭は、両手の上にたれています。静かな音楽が、ふたたび鳴りはじめますと、彼らはからだをまっすぐにおこします。最後の調べが消えてゆくまで、一同は身動きもしないで、そのまま残っています。わたしが別れを告げますと、人々はおもむろに腰を上げはじめます。彼らは、生ける神のことばを抱いて去って行くのです。

（訳者・東海大学・明治学院大学講師）

（オリオン・プレス特約）



しようとします。しかしながら、ここで神が赦したまわなければならないあなた自身のひそかなうそ、いつわりが、どんなに多くあるかをあなたは、きっと思いおこすでしょう。そこで、あなたは、おだやかに自分の小屋へと退きます。

あなたが、火をおこそうとすると、あなたは、きのう森から採ってきた薪を、だれかが少し取って行ったことに気づきます。今一度、あなたは心を寛大にし、盗人を見つけだして、お頭のもとへそいつをしょっぴいて行くことをさし控えます。

午後になって、あなたが、野良へ働きに出かけようとすると、どこのどいつか、あなたの切味のよい山刀を持ち去って、その代わりに一目瞭然、使い古したのこぎり歯のようななまくら刀を置いていってしまいます。そのとき、またあなたは考えます。「もう四たび、赦したんだもん、五度目だって赦せるともさ」と。不愉快な出来事が、次から次に続いておこった日でしたが、あなたはまるで最高に調子よくいった一日のように幸福感を覚えます。

いったい、どうしてでしょう？　それは、あなたの心が、キリストのみこころに従った喜びにあふれているからです。

夕方になって、あなたは、魚釣りに行きたいと思います。ところが、あなたの懐中電燈が、なくなっているのです。むらむらと怒りが湧いてくるのをどうしようもありません。「きょうは、もう十分容赦してやったんだ」と、心の中で思います。でも、今度もまた、主なるイエスは、あなたの心の支配者となりたまいます。人から借りた懐中電燈を手にして、あなたは、河岸へと下りて行きます。

「あれ、ぼくのボートが、消えてしまっている」と、あなたは、そこで愕然とします。どこの馬の骨か、それに乗って、魚釣りに去ってしまったのです。怒りにから

ろは、今のような学校がなく、正則英語学校とか大成学館とかで、学んだわけです。昼間は、東京中央郵便局で働きました。

二〇才の時、下宿しておった家の息子がクリスチャンで、その人にさそわれて、今、武藤健先生が牧師をしておられる本郷中央教会――当時、『キリスト教大辞典』を執筆しておられた高木壬太郎先生が牧師でしたが――にまいりました。そのころ、日本でただ一つのパイプオルガンがあって、カナダの宣教師ヌーツさんの伝道説教をききました。今でも覚えていますが、夏の夕方でした。

その後、高木先生は、青山学院長になられ、平岩愃保先生が牧師になられました。教会へは時々行っておりましたが、なかなか信仰が進まず、熱心ではありませんでした。はたちでしたから、わからなかったんでしょう。

明治三六年(一九〇三年)、中田重治先生のやっておられた、神田淡路町の中央福音伝道館へ通いはじめました。渡辺善太のいう「こぎたない伝道館」です。そこで、信仰をたたきこまれて、洗礼を中田先生から受けました。単純でしたが、熱心でした。そのころ、神田のＹＭＣＡで、内村鑑三先生の講演「聖書の真髄」をきいて、強い感銘を受けました。「聖書の真髄はキリストである」というお話で、今でも忘れません。それから、ずっと、内村先生の個人雑誌『聖書の研究』を愛読し、また個人的にも親しくしていただいて、お話をうけたまわったりしました。

こうしたなかで、信仰が進んで、伝道者になる決心ができてきました。明治三八年九月はじめ、中田重治先生、笹尾鉄三郎先生のおられた聖書学院に入学しました。二四才の時です。中田先生は、中田羽後さんのおとうさんで、ホーリネスの指導者、笹尾先生は、じつに信仰の徹底した人で、中田先生の女房役でした。同じころ、聖書学院には、車田秋次、米田豊、野辺地天馬、山崎鷲夫などがいました。

そして、翌三九年、父の死に出会うわけです。父は、三八年、郷里で破産したのを回復しようと、ひとりで台湾へ渡りました。わたしが学校を卒業したら、帰ってきたいと言っていました。そして、向こうの賀田組製脳会社という樟脳をつくる会社へつとめていたんです。ところが、三九年七月三一日、花蓮港近くのウィリーという蕃地で、生蕃に殺されました。その通知をうけとったのは、八月一五日、午後でした。大宮の氷川公園で開かれていた修養会に出ていたのですが、友だちが、赤インキで書いたハガキをもってきてくれたのです。郷里の本籍地へ会社から知らせがあったのを、当時一四だった弟が、電報をうつことも知らないもので、ハガキに書いてきたのです。修養会には一〇〇人あまり来ていましたが、聖句を引いてくれたり、祈ってくれたりする人が、ぞくぞく出てきて、まるで、わたしのための祈り会のようになりました。

当時の、わたしの心境を、大正一四年に書いた『生蕃記』のなかで、こういうふうにのべています。

「わたしは、人を離れて、ただひとり松原にかくれ、終日、父の死について考えた。キリストは『なんじの敵を愛せよ』と教えられ、ご自身を十字架につけた敵のため祈りたもうた。また、ある時、弟子たちに向かって、『二羽の雀は一銭にて売るにあらずや、しかるになんじらの父の許しなくば、その一羽も地に落つることなからん。なんじらの頭の毛までみな数えらる。このゆえにおそるな。なんじらは、多くの雀よりもすぐるるなり』と言われた。人間の生死、宇宙の出来事、一として、神の聖旨(みむね)によらぬはない。父の死も聖旨の中にあることも信ずる。自分は愚かであって、今、それを知ることができぬ。されど後日か



＜わが信仰の生涯＞

生蕃伝道がみのるまで

（台湾山地伝道の父）

井上伊之助

キリスト者となるまで

編集部　キリスト者になるまでのことを、まず、おうかがいしたいと思います。

井上　明治一五年（一八八二年）九月、月足らずの八月子として生まれました。そのため、からだが弱く、うちは農家だったんですが、労働ができませんでした。そこで高等小学を出てから、村の医者の事務の手伝いをしたり、村役場へつとめたり、税務署で働いたりしました。この税務署のあった中村町で、通りすがりに、はじめて宣教師の路傍説教をききましたが、それっきりでした。

一九才の時、青雲の志をいだいて、東京に出ました。それから七年間、今でいうアルバイト学生の生活がつづいたわけです。そのこ

って、国を固めようとしていたんですね。蕃人にも、伊勢神宮のお札を売りつけ、大麻や祠を神棚にまつっておがましたりしていました。日本に忠実な国民を、そうしてつくろうと思っていたんです。キリスト教の伝道については、「文明の宗教は、蕃地には早すぎる」という口実をもって、禁じていたんです。しかし、蕃人の思想のほうが神道より進んでいました。彼らは、自然主義的な汎神論で、偶像はきらいなんです。ですから、終戦後、キリスト教がどんどんはいったんですね。

蕃地にはいったころ

編集部　蕃地での生活について、うかがわせてください。

井上　明治四四年（一九一一年）の一二月二一日、使丁に荷物をもたせて、樹杞林からブロワンへ行きました。使丁は、台湾にいる中国人で、帝制時代から移住してきた、福建人と広東人が多いようでした。途中、内湾発電所、尖石を通りました。発電所は帰順した蕃人、つまり、日本政府の命令に従った蕃人地帯と未帰順蕃人地帯との境界線の鉄条網に電気を送っているのです。しかし、未帰順蕃人は、その鉄条網にふれると死ぬことをよく知っていて、竹槍で鉄条網をつきあげておいて、はいってくるので、境界線に近くなると、警戒のため、発砲しながら進むのです。ちょうど、その日の二、三日前にも、蕃害があったとの話でした。たそがれ近くなって、奥深い山が、ますますぶきみに見えてきたころ、数名の警官に迎えられ、ようやく、ブロワンに着きました。

翌日、さっそく、帰順蕃人をつかまえて、蕃語をならいました。ランプがピーラオ、光るものという意味です。茶ワンがピヤト、子供がラッケ、着物がルックシ、木がカオネクなどです。一日も早く、蕃語を覚えて、自由に話しができるようになり、伝道したいと思ったからでした。

二、三日後に迎えたクリスマスの日、ひとりで祈りながら、詩のようなものをつくりました。

　馬槽に生まれたまいし君をしのび
　　感謝に満つる蕃界の小屋
　さわがしき戦のうわさ聞きつつも
　　平和の君を祝ううれしさ
　荒れはてし馬槽のごときわが霊に
　　今日やどりませわが君イエス
　あわれなる生蕃を愛する真ごころを
　　いや増したまえ愛の主よ

「さわがしき戦」は、生蕃討伐のまっさい中で、森林に砲声がとどろいていたからです。

あけて、正月の三日に、父の殺された時、いっしょだった伊東さんから、当時の模様をききました。蕃人が、襲来してきたのは、じつにくだらないことからでした。つまり、日本が台湾をおさめるようになって、山林は、日本政府のものになったのですが、蕃人は、先祖伝来の自分の山だと思っている。そこで、製脳会社は、いくらかの賠償金を彼らにはらっていたのです。賀田組は、ある時、蕃人の甲乙両社に二五円ずつ渡す五〇円を、全部甲に渡し、乙にも分けるように言ったのに、ことばの通じなかったせいか、甲は甲だけにもらったものと思い、乙に渡さなかった。乙の蕃社からは、会社へとくそくがきたが、会社は、甲からもらえといい、甲は、全部各人に渡してしまったから、乙へ渡せないという。乙は、怒って、そのほかの感情のもつれもあって、二五名の人を殺した。父は、事務所の裏手に倒れており、首がないので、はじめは、だれかわからなかった。死体をかたずけたのは、二日後であったので、はや、うじがわいていたとか……。老いた父を、台湾まで働きに行かせねばならなかった親不幸を、つくづく感じさせられました。とともに、「父の仇をとる」と、そのころは言っていたのですが、父を殺した敵である生蕃を、ほんとうにイエスのように愛しうるように、彼らがイエスの愛を知るようにと祈ったのでした。しかし、

ならずこれを悟りうるであろう。神の愛と恵みとは永遠に変わらぬことを信じ、悲しみの中にも慰めあり、失望の中にも希望をもって進もう。今日から毎日、生蕃のために祈ろう。どうか一日も早く彼らに福音が伝えられ、善良な民となるように祈ろうと決心したのであった。」

生蕃伝道を志す

編集部　そこで、生蕃伝道の決心をされたわけですか。

井上　台湾へ行って伝道したいとは思っていましたが、すぐ実行する気にはなっていませんでした。ひとつには、神学生時代、宣教師からサポートを受けていたので、二、三年は、義務として、指定のところで伝道しなければならなかったわけです。翌四〇年七月、神学校を出たわたしは、千葉県の佐倉へ赴任しました。四一年には、結婚しました。中田重治先生が、家内の兄と親しく、先生のおすすめがあって、先生の司式で結婚しました。四二年、長男が生まれて、献と名づけました。中田先生は、「イサク」とつけろとおっしゃったんですが……。

矢内原（忠雄）さんは、子供に「伊作」とつけてますね。

編集部　そうすると、台湾へ渡られたのは、具体的には、どういうことから……。

井上　四二年の夏、太平洋の荒波がうちよせてくる犬吠岬で、徹夜で、祈っておった時、「わが羊を飼え」というみ声を聞いて、それが、かねてから祈り求めていた蕃人伝道であることに気づいたのです。妻子もありますし、台湾へ行く、なんの保障もありませんから、躊躇しましたが、やはり、すべて献げて、み旨に服従する決意をかためました。宣教師に話して、了解をもとめると、「それでは、きょうから関係をたつ」と言われ、妻も、わたしの台湾行の決心を承知して結婚したので、なっとくしてくれ、四二年の暮れもおしせまった三〇日、佐倉を去って、東京へ出ました。

そのころの人間は、男でも、女でも、信仰にはいると、いのちがけでした。今の若い人のように、世わたりがじょうずじゃないんですね。いわば、生一本でした。

東京へ帰ってからも、なかなか、台湾行きのめどがたたない。とにかく一文もないんですから。郵便局へ行って糊口をしのいだり、ルンペン生活です。教団へ行ってたのんでも、「蕃人伝道は悪いことではないが、海に石を投げるようなものだ」と言われる。ようやく、中田先生の紹介で、伊豆の諏訪さんというお医者さんのうちで、医者のけいこをする機会を与えられた。リビングストン、ハドソン・テイラーをはじめ、宣教師は、はじめ、医者として、伝道をはじめていますからね。伊豆を出てからも、苦しい生活がつづき、メソジストの本多先生から、北海道へ行かぬかというお話がありましたが、「ニネベへ行くべきなのにタルシシへ行ってはならぬ」と告げられ、辞退しました。

明治四四年になって、バックストンさんのやっていた日本伝道隊のウィルクスという宣教師がお金を出してくれました。バックストンさんは、イギリスへ帰っていましたが、同情してくれていたんです。当時の金で二五円でした。神戸から台湾まで一〇円くらいでしたら、妻子の生活費をのこすとなにもないくらいでしたが、とにかく台湾へ行くことにしました。まったく無鉄砲で、冒険でした。

一〇月一六日の朝、基隆へ着き、数日して台北へ行きました。台湾総督内田朝吉氏に、東京であって依頼しておいたので、大津蕃務総長が会ってくれ、蕃地へはいるよう骨おってくれることになりました。

一二月二〇日に、「蕃地事務を嘱託す、樹杞林支庁カラパイ療養所勤務を命ず」という辞令をもらえました。ひじょうにうれしくて、すぐ樹杞林へ発ちました。

しかし、「伝道は、許さない」というのです。けっきょく、当時の日本の政府は、神道をも

ですから、もらったら必ず、マッチとか、塩とかをおかえしにやりました。塩は、日本政府が、収入のない蕃人のために、物々交換所を警官立会いで開いていて、そこで、鹿の皮などと交換できるようになっていました。

わたしがいた当時も、蕃害は絶えずありました。未帰順蕃人ばかりでなく、帰順蕃人も、首狩りをしました。

しかし、わたしは、さいわい、難を受けることもなく、ある時は、蕃人の家へとめてもらいました。その時など、日本人がとまるのはめずらしいというので、付近の老若男女が集まってきて、夜ふけまで、いろいろな話をしてゆきました。

かわいそうだった妻子

編集部　奥さんや、お子さんがたいへんでらしたでしょう。

井上　薄給で、離れていては、暮しがたたないので、妻子をよんだのですが、妻は、日本を発つ前に病気をしていたり、長旅で疲れたせいか、来てから、すぐ病気になり、担架でかつがれて入院をしました。けれども、さいわい、同じ道を歩いて帰ってきました。

はじめて、山へはいる時、子供を、使丁の一人に背負ってもらおうとしたのですが、人相が悪い見知らぬ人なので、子供が泣いて承知せず、困ってしまい、妻が背負って歩いたのです。あとで妻に聞くと、途中で蕃人に殺されたら、子供と別々では、かわいそうだから、死ねば自分の背中の上でいっしょにと思ったと言ってました。

子供を樹杞林の学校へ入れた時も、かわいそうでした。七才の子を寄宿舎にいれるのですから、じつに心配でした。寄宿舎に入れたあくる朝、旅館まで子供が泣きながら連れてこられた。町の中を、父をさがして「おとうさん、おとうさん」と呼びながら歩いていたとのことでした。わざと大きな声で叱りつけて、寄宿舎へおいてきましたが、自分もいっしょに泣いてやりたい気持ちでした。

長女ルツの生まれた時も、たいへんでした。産婆のいない山の中でお産をするのは危ないと思いましたが、一三万蕃人には、産婆はなく、難産の場合、近所のひとが世話をするだけであることを思い、彼らの友となるには、やはり、彼らと同じ原始的な生活をすべきだと妻に話し、妻も賛成したので、産気づいた夜なかに、湯をわかすやら、部屋をかたずけるやら、たいへんでした。わたしが、へその緒を切っているところへ駐在所の奥さんがみえて、手伝ってもらい、ようやく産湯をつかわせたようなことでした。

ついに伝道は許されず

編集部　その間、伝道は、おできにならなかったのですか。

井上　日曜学校のようにして、子供に聖書の話をしてやるほかは、おおやけには伝道できませんでした。また、学問がないので、むずかしいことは、話してもわかってくれませんでした。けっきょく、無言の伝道ですね。治療や、日ごろの行ないを通しての伝道です。シュヴァイツァーも、はじめは、そうした伝道をしたようですね。

それでも、支庁長から、「新聞、雑誌の報ずるところによれば、伝道のため来ているそうだが、官庁につとめていて伝道をしてはならない。ことに、蕃人の伝道は許されないから、今後、そのようなことのないように」と注意されました。しかし、ちょうど、そのころ、台湾日々新聞に、下村長官が談話を発表していました。それは、「台湾における物質の進歩はめざましいが、精神面は、ほとんどなおざりにしている。日本人井上伊之助は、カラパイ蕃界にあって、刻苦、キリスト教伝道に専念している。このような人物はめずらしい。将来、一層精神的方面教育の普及、原住民との和合が急務である」というのでした。

内村先生は、「御無事生蕃人を相手に御働

日本人の資本家というものは、どうも、蕃人などにたいするあつかいとか、使っている人のあつかいとか、そういうところが、わかっていませんね。物価の安い時ですから――二円五〇銭で米三斗買えましたから、二五円は大金ですけど、そのために人間が二五人殺されたんですからね。

蕃人の生活の中で――カラパイ

編集部　蕃人は、首をとるために人を殺すのですか。

井上　必ずしも、そうではないんです。首をとるのは、首狩りを一度もしていない青年は結婚ができないんです。「いくじなし」というわけで、「ヒタイの青いやつ」、つまり青二才といわれるわけです。首狩りをすると、ヒタイに入れずみをするんですが、入れずみをしていないと女にもばかにされる。しかたなく首狩りをするんです。こういう習慣は、南方の蛮族によくありますね。日本も、昔、敵の首をとってくるのが、武士の手柄になりましたね。日本人も南方民族なんでしょう。

首だけとってきて、脳みそをとり出して、骸骨へ酒を入れて、竹の筒を酒杯にして、飲むんです。それで、死んだ人の霊をとむらうんです。「成仏しろ」というんです。酒は、日本人と同じで、なにかといえば飲むんです。陸稲も少しありますが、もったいないので、おもに、粟酒（あわ）です。

主食は、米ではなくて、わたしのいた北部タイカル族は、粟、サツマ芋です。南方は里芋をよくたべます。陸稲もたいてたべますが、おいしくないんです。石を三つ立てて、平たいなべで、フタもろくにしないで煮るんです。煮えておればいいというわけで、料理の知識がないんですね。副食は、もっぱら、塩と菜っぱです。そのほか、鹿とかいのししをとってきて食べます。また、魚は、川に毒を入れて殺して食べます。毒はフィリピンや台湾にある魚藤という植物で、それを叩いてその汁を流すんです。すると魚が酔っぱらって、浮いてくる。この魚藤は、消毒薬にもなるんです。

蛮人といっしょに、たびたび、食事をしましたが、酒をすすめられるのには困りました。飲まないと、「わたしは敵じゃないから、飲んでくれ」というんです。彼らは、敵のところでは飲まない習慣があるんです。で、ちょっと指をつけて、酒をなめる。「わたしも敵じゃない」という。それから、「わたしは、たくさん飲むと病気になる。わたしが病気になると、きみたちの治療ができなくなって、わたしも、きみたちも困るから」というと、なっとくして、「そのとおりだ」というんです。言ってきかせると、道理にかなうことなら、よく聞き入れてくれます。

彼らには、ことばだけあって、文字がないので、ぜんぶ聞き覚えです。苦労して、半年から一年くらいで、だいたい通じるようになりました。ふつうの会話ですね。薬ののみ方、一日に三回のめとか、傷をしたら水につけてはいかんとか、そういうことを説明できるようになりました。

カラパイにはいってから半年後に、内地から妻子を呼びよせました。それからしばらくして療養所が落成し、手製のお菓子と汁粉でお祝いをしました。「左手のきく人」には、お気の毒でしたが、わたしの主義でしたから。

それから、七年あまり、診療をつづけました。正規の医者ではありませんでしたが、独学をみとめてくれて、許してくれたわけです。昭和四年、正式の開業医の試験にパスしましたが、それまでは黙認です。

蕃人は、医者がないところですから、ひじょうに喜んでくれました。マラリヤが多く、手当ができず、死ぬ者が多かったのです。医薬品は、台湾総督府が出してくれたので、無料で治療をしました。おかげで、喜ばれて、お礼に、いもとかバナナとか、もちとか、多少、裕福な連中がもってきてくれました。貧乏な人からは、もらいませんでした。しかし、彼らは、「ただもらっちゃいかん」という考え

台湾にのこる」といって、ことわりました。パン屋をやったり、私立学校へつとめたりして、生活をしました。『生蕃記』を書いたのも、このころです。それから終戦まで二四年間、台湾にいましたが、最後まで伝道は許されませんでした。それでも、白毛社で医者をしたり――この時は台北からラジオ放送をしたため、首になりました。嘱託ごときが放送するとは、なまいきだというのです。それから、病院につとめたり、バイバラ蕃地の医務嘱託になったり、コレッパ社で蕃人医療をしたり、ブヌン族のナイワンボ社、ナヌカバン社にも行きました。その間、矢内原さん、政池仁さん、石川光哉さんなどが来てくれました。また、たびたび、巡回伝道をする機会を与えられました。東海岸では、ある中国人が、タイヤル族と結婚して、その妻君が、中国人の教会へ行き信者になった。その人が、青年を二、三人導いた。タンスイにカナダの宣教師が開いた中国人のための神学校があり、そこへ、四〇才くらいのおばさんが行ったりして、二人の原地人の牧師ができたんです。東海岸のほうは、官庁もあまり干渉せず、わたしのことにはげまされたといって、台湾人教会も、蕃地伝道をするようになったのです。

　けっきょく、わたしは、思うような伝道ができなかったわけですが、「信仰によりすべてのこと働きて益となる」という聖書のことばは、ほんとうです。すべてが、神さまのご計画だったと堅く信じています。わたしは、ただスタートを切らされたにすぎない。一つの捨て石です。神さまは、多くの、ほかの人をもちいてくださいました。まったく、聖霊のお働きというほかありません。敗戦後、リバイバル的な救霊がおこって、今では、生蕃人口一五万のうち、四〇%、六万以上が入信しています。この結果は、ありがたいことです。

　昭和二〇年、わたしは、リュックサック一つ、行李一つ、ふとん包一つをもって帰ってきました。けれども、その後、いくつも蕃地の伝道者(蕃人出身も多いです)から手紙をもらっています。その一つをご紹介しましょう。

　「小生は、神のみ心によって、先生のあとつぎのような感じがします。タイモワンもライサもナスパスも世を去りましたが、彼らの子供は信仰を得ました。先生！　私は今カラパイで先生の後つぎとして霊の医師となり、毎週一二の山地教会を巡回しております。…尖石の神社地には一人の神社信仰者もなく、今はいたる所に竹造りの教会が建っています。あの好きな酒と煙草とをやめ、すべての迷信をすてることが洗礼の条件となっています。先生は父上の仇を愛で報いようとされましたが、日本政府はキリスト教に無理解で、先生がカラパイに血と涙でまいた種は、今にいたって花が咲きました。私は先生の後継人としてつくしたいと思います。カラパイの弱き者のために熱烈に代禱してください。」

　(井上伊之助先生の現住所は大阪府和泉市幸町八坂八二七愛隣園です。)

きのよし大喜びに存じ候　伝道成功の秘決はただ一つ忍耐にこれあり候　ただ働きて主が収穫を与えたもうを待つのみにこれあり候　決して決して御失望なきよう望み候　時いたれば主は必ず豊熟を賜うべく候　ただ福音の種をまくまでにこれあり候（マルコ伝四章二六―二九節）」とお手紙をくださってはげましてくださいました。

矢内原さんも、『植民及植民政策』のなかで、「生蕃にたいする伝道を許可しないとは、総督府の何たる矛盾！　無理解！」と書いておられます。

伝道の許可については、日基の植村先生も心配してくださり、神学社の大谷先生が台北に来られた時、伝道許可願いを出してくださいました。時の下村長官をはじめ、多くの同情者もあったのですが、警保局長が「政策上支障があるので、尚早と認める」とのことで、不許可になりました。

その時のことを日記に次のように書いています。

「入山以来、満五ヵ年、幾多の困苦に伝道許可という喜悦の日を楽しみに忍び来り、このたびこそは大いなる希望をもって期待しておったのに、不許可と聞いた時の失望落胆。過去の辛苦、計画のすべてが水泡に帰したように感じた。しかしながら、心を静めて熟考すれば、これは、自分の至誠、努力の足りないためであるかも知れぬ。わたしの忍耐と貞心とを試みたもう神の御摂理であろう。さらに、さらに、志望を新たに進まねばならぬ」。

大正六年（一九一七年）、眼病、マラリヤ、十二指腸虫病などを併発しまして、台北病院に入院しました。長くなったのを理由に、新竹州から辞職をもとめられました。そのころ、父の首をはねたタロコ蕃人も、ついに帰順したことは、大きな喜びでした。七月に帰日して、九大で治療を受けました。その福岡へ、内村先生は、手紙をくださり、慰めと励ましとを与えてくださいました。

「またまた御病気の由、承り御同情に耐えず候　ただし、これが多年蕃人にたいする苦心の結果と見れば敢て悲しむべきにこれなく候　われらこの世にありてキリストとともに苦しむは、これ以上の幸福これなく候　今より充分の御休養を望み候　十年休んで一年善く働くを得ばそれにて事足り申し候……唯終りまで主キリストの福音を説きたきものに、これあり候」

竹づくりの教会ができるまで

編集部　ご病気をなおされて、またも、苦労にこりずに、台湾へいらしたのですね。

井上　三年ばかり、種子島で、伝道をしました。大正一一年、「デンドウノミチアリコイマルオクルカガワトヨヒコモキテイル」という電報を台湾の友人からもらいました。神戸へ行き、賀川さんに会うと、彼は、わたしが、まえに神戸で伝道をした時、新川にいて、わたしの話を聞いていたんですね。『死線を越えて』の印税がはいるから、一〇年計画で、生蕃伝道をしようと言うんです。まず、マタイ伝のタイヤル語訳を出版し、蕃人の青年を教育して、牧師にしようというのです。そこで、家族を賀川さんにあずけて、台湾へわたりました。ところが、賀川さんが、川崎のストライキをやったあとだったので、わたしも、警察のブラック・リストに入れられていて、蕃界へはいることを許可してくれないんです。いま、共産主義を恐れるように、社会主義を恐れていたんですよ。賀川さんの援助も一年で切れて、賀川さんは、「日本へ帰って伝道しろ」という。けれども、わたしは「生涯の使命が生蕃伝道だから、神さまをたよりにして、

キリスト者は、自分たちの体験から、世界の平和を守るためには、必ず、戦争勢力に反対しなければならないと確信しています。京都の平和会議で、わたしは、キリスト者たちから「口で平和をとなえるのでなく、平和のための具体的な目標や行動をともなわなければならない」というお話をうかがいました。わたしたちキリスト者は、罪の力にたいして反対しなければなりません。マルチン・ルターの「神はわがやぐら」にも、そのことはうたわれています。

つぎに、京都でも指摘されましたように、現在の戦争勢力は、帝国主義、植民地主義であることを、わたしたち中国のキリスト者は、よく知っています。現代の歴史、わたしたちの直面している現実は、戦争の根源が、帝国主義、植民地主義であることを教えてくれます。わたしたち中国のキリスト者は、とくにキリスト教を利用して行なわれる戦争活動に反対します。

たとえば、広島に原爆を投下した張本人であるアメリカ大統領トルーマンは、自分ではキリスト者であるといっています。しかも、この人は原爆投下の決意をしたことを、いささかも、後悔していないといっています。彼は、バプテスト教会員であり、わたしも、バプテスト教会に属しています。けれども、中国のバプテスト教会は、トルーマンがバプテスト教会員であることを認めません。

さいごに、わたしたちの経験から、世界の平和を守るためには、一致団結しなければならないと申しあげます。わたしたち自身の力は、小さくても、団結すれば大きな力を発揮できます。

わたしたちの中にも、「平和は、わたしたちキリスト者の間にあるだけで十分である」という考え方の人もいます。しかし、それでは、いけないのです。戦争が起こるときには宗教をこえ、イデオロギーをこえて、やってくるのです。

世界の平和を守るためには、各国の宗教者が結束しなければなりません。それが、世界の人々にたいする責任です。

わたしたちキリスト者は、一致団結して、世界の平和のために、戦おうではありませんか。わたしたちが、団結さえすれば、必ず、平和は守れます。主のお助けが、ありますよう祈ります。

（八月五日、東京ＹＷＣＡにおける講演）

（世界宗教者平和会議については、次号でご報告いたします。）　（文責在記者）

中国教会の歴史的理解

中国の教会を知るには、まず従来の中国、従来の中国教会を理解すべきです。ここ一〇〇年来、新中国が成立するまで、中国は、帝国主義国の侵略と圧迫に苦しめられてきました。もっとも不幸なことは、伝道もまた、帝国主義の侵略に利用されたということです。その事実は無数にあります。

たとえば、アメリカの宣教師パーカーは、アメリカによる台湾の占領を主張しました。また、ウィリアムスは、外国が、中国に強制した、最初の不平等条約の起草者でした。近代において、中国解放戦争の最中に、アメリカ政府の代弁者として、キリスト者であり、中国人民を愛しているといい、中国通を自称しているスチュアード大使が赴任してきて、想像できないほど中国にたいして、悪を行ないました。

しかし、中国は、正常でない状態を変えました。中国には、中国のキリスト教が、なければなりません。そこで、わたしたちは、自治、自養、自伝を目的とする三自愛国運動をはじめたのです。まず、教会が、自主独立をはかり、外国の勢力を追放しました。自分たち独自の教会をもちました。信者は、自分たちの手で、教会を養い育てることになりました。ここにこそ、神にのみより頼み、神を信仰するための良い条件が生まれました。教会は清潔な、貴い教会になれました。はじめて



内なる平和と外なる平和

（世界宗教者平和会議 中国キリスト者代表）李儲文（り ちょう ぶん）

平和を守るために

一九四九年に来日した時、わたしは、日本人民が、アメリカ占領下で、多くの困苦をなめて、生活しているのを見ました。これにたいして、中国のキリスト者は、深く同情することができます。というのは、中国の人民も帝国主義による戦争に、苦しんできたからです。

身をもって、戦争の禍害や苦悩を経験したものこそ、もっとも、戦争を憎み、平和を愛するのではないでしょうか。過去数年来、世界各地において、平和を求める呼び声が、ますます高まりつつあります。世界各国のキリスト者は、ますます平和を守る希望にもえ、行動しはじめています。

わたしたち中国のキリスト者代表は、京都で開かれた世界宗教者平和会議に出席いたしました。わたしたちは、日本の宗教者、仏教、キリスト教、大本教のかたがたが、平和にたいして、なされたご努力に敬意を表するとともに、世界宗教者平和会議で、決議された京都宣言を全面的に支持します。

わたしたち中国のキリスト者は、革命以後憲法の保障する信教の自由のもとに、自治、自養、自伝という、自分たちの手による宗教活動をする自由をえました。自主独立を獲得した中国のキリスト者は、各国のキリスト者および人民と、友交的な交わりを望み、世界のキリスト者の団結と交流、世界平和の維持に、聖なる責任を感じています。

ここで、わたしは、中国のキリスト者の体験から、世界の平和を守るために、三つのことが、重要だと申しあげましょう。

一つは、京都の世界宗教者平和会議でも確認されましたが、「内なる心の平和は、必ず外なる世界の平和と結びつけねばならない」ということです。

主イエス・キリストは、「わたしは、平安をあなたがたに残して行く……。わたしが与える平安は、世が与えるようなものとは異なる」（ヨハネ一四・二七）と言われました。主イエスは、わたしたちに、内なる心の平和をくださったのです。ともに、イエスは、「平和をつくり出す人たちは、幸いである」とおっしゃいました。わたしたちに内なる心の平和を与えてくださるとともに、外なる世界の平和をつくり出すことがしあわせであると教えてくださったのです。

それを、今日において、具体的に述べれば世界の平和を守ることだと思います。中国の

読 者 の 証 し

この子を抱いて嘆かず

—小児マヒの子の母として—

川口芳子

わたしは一男一女の子供（そのふたりともが脳性小児マヒ）の母として、神さまのお恵みにささえられ、自分がほんとうに幸福者である自覚を持たせていただいて日々を感謝し、喜びのうちに送らせていただいております。長女正子は生後一年八ヵ月にもなるのにものも言えなければ歩くこともできず、これはおかしいと診察していただいた結果、思いもかけぬ脳性小児マヒと知り、前途に暗い不安を抱きつつも医学のみを頼みとして、四年の間電気とマッサージに通い、多少は手足の運動障害、言語障害は残りましたが、やっと幼稚園へお願いして入園させていただいたとき（昭和二九年）長男正一郎を恵まれました。今度こそは丈夫な子供をと願い、妊娠中はとくに健康に留意し、お産も設備を誇る大病院で正常分娩であったのに、元気で生まれた子が、生後三日目に突然高熱を出し、五、六日も熱が引かず、診断の結果は出産時の脳内出血に起因せる重度の脳性小児マヒとわかり、手足の運動障害はもちろんのこと、言語障害、知能障害、いやこれらすべては障害というよりも無能力といっても過言ではないくらいただお乳を飲むことだけ知っている不治永患児、名のようにいまの医学では全くいやされる道の断たれた子だったのです。食物を嚙むことも知らぬ七才の赤ん坊である長女の経験で親の苦しみはかなりなめてまいりましたが、今度の男の子の場合は脳に大きな障害があるため安眠ができなく、睡眠不足の不快で目の覚めている間中きげんが悪く、その上毎年のように冬になると猛烈なけいれん（ひきつけによく似ているが意識はわりにはっきりしている）が起こり二ヵ月ぐらいは夜も日も眠ることを知らぬ子となり、注射も薬もほとんど効を奏さず、苦しむ子供を手をつかねて見ているばかりで、全く施すすべもありません。ただ信心、加持、祈禱の御利益にすがるより道がなく、人より進められる信心の方法はその対象が何さまであろうと、片っ端からすがりつく思いで新興宗教の遍歴をはじめました。けれどもどこへ行っても口をそろえて先祖の因縁だとかいって因果応報を解かれ、ご先祖さまを祭りなさいと言われるので、いっさいを言われる通りにしたにもかかわらず、いやされるどころか、かえって失望は増し悲しみは深まり、いっそのことあの出産時の脳出血のとき死んでくれていたら、こんな苦しい思いをせずにすんだものを、あなたはこの母を苦しめるために生きているのかと、子供の生をのろうようになり、日増しに肉体だけは成長してくるのがたまらなく重荷に感じられました。（いったい子の成長を喜ばぬ親がどこにございましょうか）。そのころ正太郎に二度目のけいれんが起こり、また一ヵ月半生死の線をさまよいました。このけいれんが生涯つきまとって離れないのであろうか、不具の子という不幸の上にこの小さい体になおもこの苦しみを与えられようとは、いったい神や仏はどこにいますのであろうか、この子になんの罪があるというのでしょうか、先祖がど

主体的な伝道がなされたのです。外国勢力からの独立により、神にのみより頼み、人民に近ずくことができたのです。

中国における自由について

自由ということばには、さまざまの概念があります。たとえば、一九四六年、中国を訪問したT女史は、香港に行き、植民地的な社会を見、ここには、自由がないと言いました。ある人々は、中国を訪問した帰途、香港にたちより、香港にこそ、ほんとうの自由があり、中国には、自由がないと言いました。植民地における自由という規準で、中国をはかる人は、決して、中国の現状に満足しないでしょう。

以前、中国の学生には、自由がありませんでした。わたしは、昆明で、ある教会の責任をもっていましたが、ある晩、二〇〇〇人の学生が、自由と民主主義を守る集会を開きました。外国の勢力に利用されている軍隊は、彼らに発砲しました。発砲する自由をもっていると叫んで、そうしたのです。その日は、日曜日で、わたしたちは、夜の礼拝をしていました。発砲のため、暗い闇の中で、礼拝を守りました。その時、受けた深い印象は、忘れられません。会衆の中の一人の学生が、その時言ったのです。「必ず暗い夜があけて、明るい朝が来る。」

新しい中国の成立により、広大な自由がもたらされました。中国人民にとって、はじめて、一つの政府が——人民の利益を代表する政府ができたのです。中国人民の支持する、熱愛する政府があるということ、政府が、すべてのことを六億五千万人民の利益のために行なっているということ、このことは、喜びでなくてなんでありましょう。新しい国の建設にむかって、中国人民は一致団結しています。しかも、わたしたちには、わたしたちの教会には、批判する自由、信教の自由、言論の自由、出版の自由があるのです。

整風運動については誤り伝えられているようですが、これは、自由に意見を発表することのできる民主的な運動です。批判の自由はつねに、わたしたちのものであるからです。一九五七年には、ごく少数のアメリカ帝国主義への追随者、アメリカ的個人主義者が、中国の政府、指導者たちにたいして、悪意にみちた攻撃を行なっていたことが発見されたのです。わたしたちは、広範な論争を展開した上、悪意にみちた主張を論破しました。それは中国人民にとって良いことでした。

外国のごく少数の人たちは、中国が乱れてくれればよい、昔のようになればよいと考えているようです。その人たちが、悪意にみちた攻撃をしてくるのです。

今後の交流の基本的態度

したがって、今後の交流には、まず、次のような基本的な態度が必要です。すなわち、事実を、真理を尊重する心です。それと、中国を、長年にわたり混乱と貧困のままにおいておくか、それとも、経済文化の建設を急速にやったほうがよいかという問題、中国の河に外国の艦船をうかべ、外国の軍事基地をおいておいたほうがいいか、それとも、自分たちが自分たちの国土の主人公になったほうがいいかという問題、そのような問題に、善意をもって答えるということです。

中国のキリスト者は、まずなによりも、中国の現実を知ってもらい、ともに真理を探求する中で、世界のキリスト者と手を結び、国際間の緊張を緩和し、世界の平和のために、貢献できると思っているのです。

（八月四日、山の上ホテルにおける懇談会での発言要旨、文責在記者）

（李氏は、中国三自愛国運動の秘書長。教会の牧師。解放前、ジュネーブで、世界YMCAの主事。今回、世界宗教者平和会議と日中キリスト者交流協会の招きで来日されました。）



疑ってみなければ承知できないほど、わたしを、かたくなにしていました。なかなか信じようとせぬばかりか、かえって「わたしは救われる必要はありません、子供が救われればいいんです、わたしの苦しみはみな子供からきているんですから」と反発するありさまです。魂の救いということを全く知らないわたしでございました。けれども河野さんは、わたしがどんなに無理を言おうと決して怒らずおだやかに低姿勢でさとしてくださり、あるいは讃美歌をうたってくださり、三日に一度は必ずお訪ねくださいました。この河野さんがご自分のお嬢さまの病気を通しての信仰体験を話してくださったときは、ふとわたしの魂にふれるものをはじめて感じました。讃美歌に「みくにへ行くと思いつつもしたしき者をあとになし馴れしこの世を立ち去る時、名残りを惜しまぬ人やはある。ああ祈りせん、祈りにまさる慰めはなし」というのがありますが、それは一〇年病床生活をされつつもなお、ご自身の病気平癒よりご両親の救われることを祈りつつ召されたお嬢さんの祈りでした。「ああ祈りせん祈りにまさる慰めはなし」このことばをすぐ覚えこんだわたしでございますが、またむらむらと反発しました。祈りがはたしてそれほど慰めであろうか、きっとお嬢さんは長い闘病生活で他に慰められる道がなかったのだろう。わたしには健康もあるし、映画でも、お芝居でも、テレビでも、まだまだ慰められるものがたくさんある……。

　けれども、このわたしの目先の思いがペチャンコにされることが起こりました。その日の夜中、なおも、けいれんで苦しむ子を抱いてその痛みにたえかねて、もう神にも仏にも頼らないはずであったわたしが、ふと昼間の河野さんのことばを思い出しました。〝ああ祈りせん、祈りにまさる慰めはなし〟そうだもう一度だけ祈ろう、今夜はキリストに祈ろう……。わたしの慰めであったはずの映画もお芝居も、この真夜中の苦しみになんの役にたちましょう。ここに生まれてはじめてキリストに祈りを捧げました。「キリストさまどうぞこの子に安らかな眠りを与えてください」、キリストさまと呼びかけるのもなんだか恥ずかしく、遠い遠いよそのおかたに呼びかけているような気がしました。

　それから、どれほど時が経ったのでしょうか、ふと気がついてみると、窓の光が明るいのです。夜の明けるのを知らずに過ごしたことは、このけいれんがはじまってよりないことです。瞬間わたしの体の疲労が心地よく快復していることを感じました。わたしは眠っていたのか、子供を抱いたまま、そして子供はまだ眠っている。奇蹟が起こった…時計を見て驚きました。わたしは六時間も眠っていたのです。その上まだ子供は眠り続けています。祈りが聞き入れられたと思いました。早くキリストさまにお礼を言わねばと、あわててうろたえて狭いへやをぐるぐる歩き回ったことを覚えています。何度も何度も感謝の祈りを捧げました。

　さめざめと泣きつつ板の間に坐りこんで、頭を床につけて立つことを知りませんでした。神はやっぱりいましたもうた、長年探し求めていた神が。キリストは神であると無条件で信じました(十字架も復活も知らずに)。やがて起きて来た主人と長女にさっそく話し

うであろうと、この子だけになんの関わりがあるのでしょうか、世の中には七人も八人も子供に恵まれ、みな健康に育っている人もあるというのに。だれかわたしに得心のいくまで、このなぞを解決してほしいと思いました。それとも運命なんて単なる偶然にすぎないのではなかろうか、わたしの足もとをはっているありのように、いまわたしの手でひねりつぶされたこの小さな生命、おまえだってここにはって来なければ死をみなかったであろうに、もがいてみたところでどうすることもできない、ただ悪い星の下に生まれ合わせただけのことだ。この子もきっと同じことだ。こんな悪い運命のもとに産み落としたのは母であるわたしだ――このように子にわびる気持ちは、次第にこの手でこの悪い生命を取り去ることが、せめてこの子にわたしの与え得る最上の幸いであると思うようになり、また残される長女の幸いでもあると断定するようになりました。もう信仰も祈ることもできなくなりました。それからは常に死を見つめつつ、その具体的方法、あとに残される長女の処置などをこまごまと研究し、時期を待っていました。

　お正月の三ヵ日は、日ごろ多忙な主人も会社が休みなので、この子の行く末をゆっくり相談しようと、けいれんする子を主人の前に見てもらって、意中を聞いてみましたが、苦しむ子供を見ながら、お酒を飲んで本気に相談にも乗ってくれない無関心、無責任さに(主人も苦しかったでしょうけれど)、わたしは、一度に絶望の渕に沈められ、もうがまんできなくなりました。このうえ、この子を一日生き長らえさすことは、それだけ苦しみも多く増し加わるだけだ、前途は真暗だ。早く始末をつけねばと、苦しむ子供に「いまにらくにしてあげますよ。もう少しのしんぼうですよ」と言ってきかせました。死がいっさいの苦しみを解決してくれるものとばかり思いこんでいたわたしは、この決意ができてからは、苦しむ子供を抱いても以前ほどの痛みを覚えませんでした。もう二、三日でこの苦しみから逃れられるという、むしろ安らぎに似たものさえ感じました。正月二日、長女あての長い遺言状を書き、かたみの品を包んで、最後に長女の顔を一目見てからと、その夜実家に帰りました。せめて長女にだけは、お正月をさせてやりたいと、ちょうど冬休みなので実家にあずけていたのです。ところが死ぬなぞとは口に出さなくても、わたしのそぶりがおかしいとみて、母に厳しく問いつめられ、とうとう決意のほどを話しましたら、母は涙ながらに、「決して早まってはいけない、おまえには、もうひとり正子というたいせつな子があるのだから、いよいよというときはこのおばあちゃんがいつでも正一郎といっしょに死んであげるから。わたしはもう老い先きの短かいはっておいてもやがて死ぬ身だから、絶対におまえは早まってはいけない」とこんこんといって聞かされ、その母のめっきり白髪の増えた、かさの小さくなった姿を見たとき、わたしはなんという親不孝者であろうと泣きくずれました。この母を死なせるようなことがあったら、それこそたいへんです。わたしはやはりたえていかねばならない。生きる限り続くであろうこの苦悩と、一生消え去ることのない暗い運命と戦いつつ、生命あるかぎり、少しでもこの子の幸を願って努力しようと決心しました。もう神にも仏にもだれにも頼るまい、いっしょうけんめい歯を食いしばって、自分の心の力で自分をささえていこう、しっかりするのだ、強くなれ、そう自分に言って聞かせました。お金がむしょうにほしいと思ったのもこのころでした。

　そのころわたしにキリストの福音が伝えられたのです。三四年正月、日ごろ宅へ卵を運んでくださる河野さんというキリスト者のかたより、一言、二言聖書のことばを聞かされました。けれども過去の経験は、すべてまず

奇蹟のよう。こんなによく眠るにもかかわらず軽いけいれんがどうしても止まらないのが不思議でなりません。そのころ教会よりは、たびたびお誘いいただいて、礼拝に出席することを進められました。礼拝の意義も聖徒の交わりも知らぬわたしは、過去の新興宗教の苦しい経験から、教会出席は献金に通じると誤解したのでした。そして自分勝手な理くつをつけていました。なにも教会ばかりが信仰の場所ではあるまいに、重病人や、足の不自由な人は、信仰ができないのか、そんな人こそいっそう信仰が必要な人ではあるまいか。わたしには、このけいれんしている子供がいる、この子を置いてどうして教会へなぞ行ってられましょうと。なんという自分中心な、神の恵をあふるるばかりいただきながら、なおその神を無視するわたしでございました。けれど、神はこんな傲慢なわたしをなおかえりみつづけられ、またしてもみわざをなしたまい、わたしをして全く文句なしに教会へ導いてくださいました。

それは二月末の聖日、河野さんが突然訪ねてくださいまして、今夜夕礼拝に行きませんかと、お誘いくださいました。こうなれば河野さんに対して義理にでも行かねばなるまいと、気は進まぬまま、河野さんに連れられてはじめて教会の門をくぐりました。お説教は奇蹟のお話でした。奇蹟を通して神を知り、はじめて教会へ行って奇蹟のお話を伺い、お説教の内容はまるでわたしのことを、そのまま語られているようで驚き恐れました。翌朝(月曜日)目を覚ましてさらに驚きました。きのうまでのあのけいれんが、すっかりいやされていたのです。わたしは神の招きを、教会をぬきにして信仰のありえないことをはじめて知らされました。涙ながらに自分のかたくなを神に許しを乞い、すっかり打ち砕かれて改めて心から感謝の祈りを捧げたのでした。この日を限り、昨年以来苦しみ続けたけいれんが完全にいやされ、子供の顔に、一家の者に久しぶりに忘れられていた笑いが見られるようになりました。それからきょうまで一年十ヵ月ほとんど毎日安眠をいただいています。夜には眠る、健康な者にとってはまことにあたりまえのことでございましょう。けれども生まれて六年間も、ほとんど夜を十分眠ることを知らぬ子にとっては、誠にこの上なき恵でございます。かつてのわたしの最高の願い(手足は不自由でけっこう、せめて夜だけ十分眠れれば、どんなにしあわせでしょう)が毎日かなえられ、なお日々抱いていなければ泣き続けた子が、夜、安眠できるがために、昼もおのずときげんが良く、また毎冬のように襲った恐ろしいけいれんも、去年はとうとう忘れたような静かな冬を過ごさせていただき、わたしどもには全くことばの限りをつくして感謝しても、足りない思いです。讃美歌に〝わが喜び、わが望み、わが命の主よ、昼たたえ、夜うたいて、なお足らぬをおもう〟とありますが、誠に神はこよなきくすしきみわざを、この手足の動かぬ、もの言う口を持たぬ子の上に現わし続けてくださいまして、その母なるわたしを救いに入らしめ、わたしのみならず、母も長女もと、親、子、孫、三代にわたり、一度に神に帰らしてくださいました。「幸なるかな、悲しむ者、その人は慰められん」(マタイ福音書五、四)。一生消え去ることのない苦悩と断定していたわたしに、こんなに早くこの喜びの生活が用意されていようとは。かつてのたえがたきを、喜びをもってたえさせていただき、わたしの悩みはいつのまにか神の祝福の中にあげられていることを知り、実に感謝でございます。神はわたしをして、もはや、過去のような、不具の子ほどかわいいというゆがめられた愛ではなく、神さまから育てなさいと与えられた使命に、感謝と喜びをもって従い、神にお仕えする心で愛し育てていくことができますので、おむつ一つ取りかえるにも、つぶやきを感謝に代えていただきました。

(大阪昭和教会員)

て聞かせました。ふたりとも驚いて「なんと、キリストは良く効くね」（誠に恐れ多いことばながら）と言って親子三人でまた祈りました。

子供はとうとうお昼前まで眠らせていただきました。わたしはとどこおっていた家事も手につかず、うれし涙にひたすら祈り続けました。有頂天の喜びです。子供は都合十時間ほども眠っています。過去二回のけいれんではせいぜい五時間も一息に眠れば、それを境に止まるのが常でした。それで河野さんに祈りの聞かれたことを話したら、たいへん喜んでくださって、正しい祈り方を教えられ、祈ってくださいました。まもなく聖書をいただきました。飛びつく思いで子供を抱いたままむさぼり読みました。胸はずませて読んでいる目が懸命に探し求めていることに自分ながら気がつきました。数年来悩み苦しんだなぞの解決を求めて、ヨハネ福音書九章を読みました。＜イエスが道を通っておられるとき、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、「先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか。」イエスは答えられた、「本人が罪を犯したものでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現われるためである＞

イエスさまは親の罪にあらずとおっしゃってくださった。「正ちゃん、おかあさんは、もうあんたにあやまらなくてもよくなりましたよ」ほのぼのとした安らぎを与えられました。「ただ＜神のみわざが、彼の上に現われるためである＞がどうしてもわかりません。夜となく、昼となく、盲目と小児マヒとを置き替えて、何度となく繰り返して読みました。

いっぽうけいれんはまた依然として激しく続いても、もはや疑いも解けて、ただ信ずるのみでした。夜ごとにけいれんは続き祈りも続きました。もう聞き入れられなくても、疑いません。終日子供を抱いたままで聖書を読んで祈る日々が続きました。そして、ここに三度目のすばらしい奇蹟が与えられました。子供は効かぬとは言いながらも、連日睡眠薬服用の副作用で咽喉から気管にかけて痰がたまりゴロゴロ、ゼイゼイとても苦しそうで、咽喉に指を入れて取ってやることもできず（けいれんのため、歯をしっかりと食いしばっている）せきをしなさいと言ってみても、ことばは通じないし、いまにも窒息しそうに、苦しみもだえ、唇や顔下半分は色がありません。ああかわいそうに、どうしよう、わたしの力では、どうしてやることもできない、代わってやれるものならと、わたし自身が痰で苦しんでいるように体に激しい痛みを覚えて、ハッとしたとき、自分が祈っていたことに気がつきました。それから五分も経ったでしょうか、突然激しい叫び声を聞いて、わたしはびっくりして飛び上がりました。わたしは、それが子供のせきばらいであったことに気がつくまで、しばらく時間がかかりました。全く異様なせきばらい一つ、子供は痰が切れて胸が楽になったのか、スヤスヤ眠りについたのです。この不思議なせきばらい、大きなけたたましいせき一つ。神、またしても祈りに答えられ、ご自身御腕を振われてごじきじきにこの子の苦しみをぬぐいたもうたことを知り、ここに「彼の上に神の業の現われん為なり」のみことばが解けかけたような気がしました。

この三度の祈りに答えられた奇蹟を見て、もはや疑うすべもなく、心には次第に喜びが満ちあふれ、ひたすら主の聖名を讃美しました。二月にはいってからは、次第に夜中も、三時間から五時間ぐらいは眠れるようになりけいれんも少しずつ軽くなってきました。二月半ばごろ、牧師先生のご訪問を受け祈ってくださいました。もちろんその夜は八時間も眠りました。二月下旬ごろは、毎夜七時間ぐらい眠るようになり、この子にとっては、生まれてはじめての経験でした。まるで毎日が

夏休み



夏休みがくると、学校に行っている青少年たちは、時間でしばられる学校生活から一応解放される。夏休みのことを「夏生活」とよぶ先生もいるが、戦後の新教育では、正課の授業時間以外の生活指導が重んぜられている。そこで、解放された時間の使い方、その指導のしかたが問題となってくる。

六・三制の民主教育が実施されて十数年を経た今日、どのような問題があるのだろうか。心理学的な調査によると、たとえば、男女平等の考え方などは学童にも非常に高い賛成点が得られるが、奉仕・犠牲・愛国心のような徳目となると、ヨーロッパの児童に比べてずっと低い得点しか出てこない。

戦後日本の民主主義は、「権利の主張」の面が強く現われているように見受けられる。日本人が解放され、とくに、婦人、労働者、児童が解放されたので、ある意味では当然とも言えようが、真の民主主義には「義務の遂行」が伴なわなければ片手落ちである。日本社会をむしばむ入学試験、われ先に好餌をねらう「就職」、大学を卒業して社会に出ては、個人としてのいわゆる「小市民的幸福」を追求する家庭生活。総じて、個人主義、しかも利己主義的傾向が風潮としてみられる。自分だけ幸せになればよい――それも個人の享楽主義的傾向が一般に見られる。

マス・コミ、とくにテレビの影響か。レジャー・ブームの波に乗って、どのチャンネルも四六時中ジャズ・ソングや歌謡曲を飽くことなく流し続ける。文化的、教育的標準からの番組編成でなく、商業主義に放置されているところに問題がある。

このような時代のムードの中に置かれている青少年にとっては、なにを選択し、いかに決断し行動するかが問われてくる。滔々と押し寄せる俗悪文化財の渦の中にあっては、なにを選択するかということは、なにを棄てるかという問題である。中学一年生の少年にとって、一二才の夏休みは、生涯にただ一度しかない決定的なものである。夏休みこそは、家庭にとっても、教会やキリスト教主義学校にとっても、かけがえのないキリスト教教育の絶好のチャンスである。

家庭においては、父母、兄弟とのだんらんの中にあっての、とくに躾け教育のプランが考えられるべきであるし、教会やキリスト教主義学校にとっては、教会学校、青年会など、また学校のそれぞれの年令層に応じての修養会がくふうされるべきである。

臨海学校や林間学校は、日ごろ味わうことのできない自然との接触、日常の学校生活ではできない集団としての訓練の場である。キリスト教の自然観を体得し、キリスト教教育による団体訓練を受けるたいせつな機会である。前述した、個人としての自己充実のみを強く追求する傾向のいちじるしい今日、集団としての規律や公徳心、奉仕などの精神を養う団体訓練は、青少年時代にぜひとも必要である。少年時代の林間学校や臨海学校の経験は、生涯忘れることのできない思い出として少年の心に刻みつけられるであろう。わたしもその経験をもつひとりである。

戦後日本の民主主義は上から与えられたものであり、いわばあだ花であり、根無し草である。地盤がなかったのである。民主主義の背後にキリスト教があることは言うまでもない。道徳教育がお手上げであるのも地盤がないからにほかならない。今日、日本の民主教育、道徳教育にはキリスト教が大いに発言をしなければならない。ここにも、キリスト教教育の果たすべき大きな役割がある。夏休みの問題を考えるに当たっても、ここに思い至らざるを得ない。

（小林公一・青山学院大学教授）

モダン・ジャズ



わたしは小さな会堂でマイクをつかって説教している。親ゆずりで大きな声がでないからでもあるが、獅子吼するのがきらいだからである。べつにアナウンサーや、ビリ・グレアムのように聴衆に抵抗を感じさせずに話を聞かせようという魂胆があってのことではない。マイクを通したところで悪声は悪声である。歌手というものは発声法を勉強し信じがたいほどの声量をもって美しい声でうたうものだと考えられてきたが、ジャズの世界ではルイ・アームストロングのようなハスキー・ボイスが聴衆に共感をよぶのだからおもしろい。声量がたりなければ、マイクに声をのせればよいのである。作曲家の意志を重んじ、譜面に忠実であるよりも、演奏者が自由にアドリブをきかすところにジャズの妙味がある。オーソドックスな音楽の世界がジャズを異端視するのはわかるが、しかしクラシック音楽の世界をゆすぶっているのはジャズだけではない。シェーンベルクやメシヤン、ウエベルンのような現代音楽家群の登場によって音楽の世界は急変しつつある。さらに数学的に計算機をつかって、トランジスターで創造されてくる音の世界が、将来どんな音楽性を産みだしてくるか見当もつかないことである。

わたしがジャズに興味をひかれるようになったのは、クラシック音楽だけでは、わたしの内側にある要求を満足させてくれなったからである。フルシチョフさんのようにモダン・アートを解さないおかたはジャズも、現代音楽もおわかりになりますまい。わたしはクラシックな音楽が好きだが、クラシックなもので現代をうたいつくすことは不可能なことだ。人間失格、人間性の喪失、非人間化、自己疎外、孤独の群集、市場価値的人間、敗北の時代、下降の時代といったような現代の不安と危機をベートーベンの「運命」でききとろうとすることは、ちょっと無理ではなかろうか。原子力時代の意識が、現代音楽を通じ、モダン・アートに表現され、アバン・ギャルドな生花となり、横山泰三のクールな漫画になって戯化されているとすれば、ジャズが現代人をとらえているわけもわかろうというものである。ミシシッピーの河口ニューオルリンズの町に強烈にファンキーな体臭を発散しながら発生したジャズが、二十世紀のアメリカ史の中を流れて、戦後モダン・ジャズとよばれる時代に到達した。一九四七、八年ごろ、喧騒なビ・バップの時代を経て、ジャズはアメリカ西部の白人ジャズメンたちによってウエスト・コースト・ジャズとよばれる時代を出現した。ビ・バップの喧騒さに比較して、ジャズはクールになり、純音楽に近ずき、クラシック音楽の要素を多分に取り入れ、構成上十二階音の現代音楽に接近し、映画音楽を通して、広く大衆に、知識人に、クラシック音楽愛好家の中に浸透していった。さらに現在ジャズは東部の黒人たちによって、アドリブをきかしたファンキーなイースト・コースト・ジャズに本来の姿を求めつつ発展している。ジャズの解放性とアドリブのきく自由、ニグロの根強い解放の叫び、素朴な信仰と明るさ、独特のリズムと高度に発達してきた音楽性が、現代をジャズってくれるかぎり、わたしはモダン・ジャズを楽しんでいく。ジャズは現代の、そして世界の音楽だ。もっともジャズ、現代音楽、クラシックなんでも好きだといっても音楽性の稀薄なものはお断り。

さて『月刊キリスト』の読者の何パーセントのかたがたが、モダン・ジャズを楽しんでいらっしゃることだろう。

（かみ良康・十貫坂教会牧師）

戦火の傷は残れども

――沖縄に生きるある母の姿――



この明るい太陽の下

沖縄――と言えば、その細長い島を北部と南部の二つに分けて、北部よりは開けているその南部ほぼ中央の海岸にある沖縄最大の首府那覇（なは）、ここのにぎやかな港湾を、貨物船や小船や、荷物や人などをかきわけて、やたらゴタゴタした家並や、ナショナル製品や日本映画の看板などを見ながら、たどりつくのが国際中央通り。いわば、那覇市のメイン・ストリートだ。しかし、ビルや高層建築が林立しているというのではない。シネマスコープの映画館や、喫茶店や小さな百貨店が少し並んでいて、ほかの場所よりは車の往きかいが多く、人が少し多く歩いている程度――首府の盛り場がこうなら、さぞいなかはさびしいのだろうなとふと思う。

その中央通りで待つことしばし、やってきたバスに乗りこむ。このあたりの人が、ふつう銀バスとよんでいる、なるほど銀色の車体をしたバスである。どこを向いても――車内の乗客も、窓外を歩く人も――みな一様に亜熱帯特有の明るい太陽を浴びて、じつに静かにすわったり歩いたりしている。風景もまた同じ。とり立てて変わりばえはしない。ただ音もなく降りしきる陽光、この明るい太陽はどこまで続くのだろう。

セブン・ティーン



聖書はルカ二章末尾の短章をのぞいて、イエスの少青年の時代については、沈黙する。その五二節の記述は、少年サムエルについての旧約のそれ（サムエル上二・二六）と酷似して、類型的でさえあり、概して、聖書は成人向きである。箴言の童蒙訓も、おじさま、おばさま族のおせっかいとして、現代のセブン・ティーンには拒否されかねない。

英語アサシン（暗殺者の意）は、その語源の示すように、麻薬を用いるものをいう。たまたま山口とか小森とかいう、いわば麻薬によわされた例外者が一七才であったという偶然から、セブン・ティーンをセンセーショナルに取り上げたジャーナリズム――本誌にしたって例外じゃない――は、おっちょこちょいさ。対症療法にさえなりゃしない。こう毒づくのがセブン・ティーンの心理です。

すでに一世紀も前のことだ。ロングフェローは『わが失なわれた青春』という詩の中で、ラプランドの古い唄の一節をそのままに、幾度となく、くりかえしている。

―少年の意志は風の意志だ―

イエスはいいことを言ってるぜ。「風は思いのままに吹く。あなたはその音をきくが、それがどこからきて、どこへ行くかはしらない。」（ヨハネ三・八）ざまあみろ。成人ってやつは、おっちょこちょいの上に、まぬけときてらあ。ぞっとするような、セブン・ティーンのわらいである。

ある人は、十代の一般的特性として、観念性と逆説性との二つをあげた。そこから責任の拒否が生まれる。成人は、拒否はしない。回避する。逃避する。ご同様、ずいのずいまでずるいですからね。この二つの特性に、正しい方向指示――それが教育ではありませんか――を与えるとき、彼らは社会変革の原動力となる。したがって成人がそれぞれを無下に攻撃し、抑圧しようとすれば、成人には、成人がすがりついている既存秩序を維持しようとする下心が働いているんだなと彼らは感づくのだ。そこに彼らの不信が生まれる。現代のハイ・ティーンはがめつい。がめつい彼らは成人のみにくい、虚飾でおおわれたがめつさを鋭くみぬいて、これに反発する。

わたしはセブン・ティーンのご乱行を、道学者流には、うれえない。個人としての成人の説得力には限界がある。有能、無能をとわず、このことが、わからない人間は、にせものです。アメリカの心理学者ラスウエルは『精神病理学と政治』の中で、おそろしいことを言っています。テロリスト（山口、小森など）の人格における一般的モティベーションを、その父性憎悪にさかのぼらせるのです。

わたしはセブン・ティーンのご乱行が、いつしか彼らのうちにそだてて行く反社会性をうれえる。そして、ラスウエル流に言えば、セブン・ティーンの反社会性が、とりすましたおじさま、おばさま族に対する彼らのいわれある不信、反感、憎悪をモティベーションとして、新しい国づくりをぶちこわすのが心配だし、残念でなりません。

セブン・ティーンの分析もよし カルテを書くもまたよし。それが成人の思い上がった自慰に通じていなければ。自慰ってやつは、はかなくも、淋しいもんです。その自慰を封じこむもの――これは成人にも、セブン・ティーンにも絶対に必要です――はないんでしょうか。みえすいた、あらわでない愛情をわれわれ成人のうちにかきたてるものは。それは、神への答責から生まれてくるはずなんですが。

（原田昂・明治学院高校教諭）

から三年ばかり、名古屋の歩兵工廠につとめたときぐらいのものだ。そして、一九のときにはもう島へ呼びもどされて、村の青年と結婚した。それというのも、新川さんの母親が病身で、早いところ長女を片づけてというつもりだった。もちろん親同志の了解で、新川さんが村へもどったときは、すでに自分の婚約者としてその青年を紹介されたというわけだ。

こうして、家にも両親にも従順な妻として、一九才の新川さんは家庭の人となる。



（一面のキビ畑）

だが、この人の人間としての歩みはそれからだった。

新婚生活も、やがて一年半というときだった。新川さんの夫であるAさんが召集されて出兵した。長女初枝ちゃんが生まれて四ヵ月目だった。留守を姑と守る新川さんに、しかし戦争の非情な力はえんりょなくのしかかってきた。

一九年三月、島をとり囲んだ米軍の大艦隊から、はげしい艦砲射撃がはじまった。それは間断なく村人をおそったから、もう家屋がありながらそこで暮すことのできない生活―壕生活よりほかはなかった。親族同志が、先祖の遺骨を持ち寄って、同じ穴のなかで暮す生活だ。ネズミのように昼間は隠れ、夜になって食物をあさる――そのありさまを、新川さんは沖縄弁そのままでこう言う。

「とにかく歩けないかんねえ、夜、照明弾の間迫うてね、いも取りだ、もう取れるだけのいも、ちょっとの間に取るんだ、そいでもドンドン弾ァ落ちきるんね。ちょうど、村は盆地みたいになってんしかね、陣地があったから、艦砲もひどくてね」

それは文字通り〝鉄の暴風〟だった。沖縄のうちで、最大量の弾丸がこのあたりにたたきこまれた。山も畑も、完全に形を変えてしまった。それでも米軍の物量には際限がなかった。

やがて、日本軍の敗走がはじまった。連日村を通って行く彼らは、口々に「逃げるならいまのうちだ」と言った。引きずられるように貧しい家財をかついで逃げ出す家があちこちにあらわれはじめた。それさえ、男はほとんど兵隊に出ているから、逃げるのは女や子供ばかりだった。

新川さんも、姑と親族とともに、ついに壕生活に別れをつげた。足の続くかぎりの逃走である。それも、米軍の上陸を予想して、日本軍がめくら滅法にしかけた地雷におびえながらだ。新川さんの胸のなかで、小さな初枝ちゃんがひしと抱きついていた。この母と子の必死の姿をあざ笑うかのように、艦砲弾はえんりょなく炸裂した。

地獄の体験

ここまでは、いわば序曲だ。新川さんを心の底からゆさぶるできごとは、これからあとのことだった。

新川さんはじめ、親族の女子供七、八人が、疲れと恐怖に打ちのめされながら、とある小さな山あいの竹ヤブに逃げこんだときだった。艦砲弾はもう文字通りの雨あられとなって、土砂は四方からかぶさってきた。道を選んで逃げるどころではなかった。足の向くまま、竹ヤブをかき分けて進んだ。だが、竹ヤブの奥には、先に砲撃でやられて死んだ女、子供、老人の死体が、数かぎりなく横たわっていた。

目をそむけるようにしてさらに奥にはいった。新川さんは、行く手の木の根元に妙なも

行くことおよそ六キロ、那覇からの自動車道路が大きく右へ出ると、それからがもう西原村、とにかく広い村だ。うねうねと野原が続いたりゆるやかな丘が続いたり、それが一面のキビ畠だ。

「あ、トウモロコシ、しかし実がなってないな……」

ふとつぶやいたら、

「あれはサトウキビでして……」

麦ワラのカンカン帽をかぶったおじさんが前の席からふり返りざま陽焼けした顔をほころばせて言った。

翁長（おなが）という部落を過ぎた。カヤぶきの、いかにも南国の農家といった感じの家が目につく。バナナの茂った庭のある家もある。いい風景だ。草木は旺盛に繁茂しているし、人々は伸び伸びと暮しているようだし、空気はよく、太陽は明るいし……。

学校らしい建て物と運動場を二つ、左に見ながら、そんなキビとキビの間の道路をのんびりと走って、ついたところが次の部落呉屋（ごや）である。ここもまた、平地一面のキビ——下車してすぐ、そんなキビ畑のまん中に、カワラぶきの、といっても内地のそれとはだいぶ相違があるが、ブロック作りのへいで囲まれた住宅が目につく。ただの住宅とちがうところは、そのへいの上に白ペンキの看板が一枚、集会案内とあって、そのほかに大きくこう書いてある。

「すべて労する者、重荷を負う者われにきたれ、われ汝らを休ません。（マタイ伝一一章二八節）

西　原　教　会　　牧師　新川広子」

——これが今月号の主人公である。この教会と、この教会に生きる女主人の、血と汗にまみれた一六年の記録……。

太陽は明るく、キビはかぐわしく熟れて、大地はいま深々とみちたりているが、かつてここに流された血と涙を、いまだれが知るだろう。

この大地に立つ女主人の体は、それらいっさいの歴史をになっている。記者を迎えようとして庭先に出てきたこの人は、南国の陽を身いっぱいに浴びてゆるやかに近づく——左足を重く不安定に引きずって一歩一歩……。

鉄の暴風

「戦前のこの村は、人口が約一万三千、面積？　うん、面積は一三三五町、だから、三二四ヘクタールで、この西原平野はとてもゆたかな土地で、キビ作の中心地だった。一万五〇〇〇トンの大型製糖工場があったし、このまわりの山は、琉球松が青々と茂っていて、平和で美しい農村だった……」

文章でも読むように、淡々と語り出した新川先生は、畳の上にぎこちなく左足を投げ出して、ブロックのへい越しに広がるキビ畑に遠く目をやる。三九才というその顔には、しかし、思いがけない真剣なきびしさが刻まれている。お会いしたときから、その顔が笑いで崩れたことはない。なにかひとまわり巨大な人間を目の前にしている感じである。

「こんないい村も、今度の大戦で大激戦になったね。松はほとんど日本軍が切っちまって、防空ごうのわくに使ったし、とにかく艦砲射撃がひどいもんじゃった。家も田畑もなにもかも、見る影もなく、それこそ荒涼たる焼野原になってしまった……」

戦前の人口が一万三千人、そのほとんどがいわゆる〝鉄の暴風〟とよばれた徹底的な米軍の艦砲射撃で壊滅したというからひどいものだ。

「わたしの左足も、その艦砲ですっ飛ばされたもんだ……」

そう言って、新川先生は、スラックスというよりズボンをはいた左足をなでた。重そうに引きずるのは、義足のせいだったのだ。

——新川さん、この人の親しさからして、あえてこうよばせていただこう。この人は、まったく沖縄の人だ。この西原平野のまん中に生まれて、島を出た経験は、一六才のとき



（形を変えた山々も、今は……）

つけられていた。
なにがおこったかわからない。新川さんはただ初枝ちゃんをしっかりと抱きしめると、夢中で半身起き上がった。そしてただよう硝煙を通して見たものは血だるまの死体だった。艦砲弾がほんの一〇メートル先で炸裂したのだ。石垣は全部崩れ落ちて、伯母さんとその九才の女の子と四つの男の子が、下敷きとなって死んでいた。伯母さんの髪の毛が、石と石の間からのぞいていて、手をのばして頭にさわってみると、すでに絶命していた。泣きもしないで、その一三になる長男だけが呆然とすわっていた。くるべき時がきた。逃走の努力もこれで終りを告げた——

ふと、左足がひどく重くしびれていることに気づいた。新川さんは、自分の左足のヒザの上が、砲弾の破片でざっくりとえぐりとられて、大きく穴があいているのを見た。

崩れた石垣に寄りかかったまま、一歩も動けない夜がき、また朝となった。砲撃音におびえてはい出ようとする二才の初枝ちゃんを何度も胸に抱きなおしては、もはや生きる道が閉ざされてしまったことをひしひしと感ずる新川さんだった。食物もなかった。水もなかった。昼間になれば、熱い太陽がじりじりと照りつけた。初枝ちゃんの息も苦しそうだった。栄養失調ですっかりやせ細ったわが子を、せめて生かしてやりたいと思っても、どうにもならなかった。そうするうちに、左足がはげしく痛み出した。それは実際「死んだ人がうらやましいほど」の痛さだった。のどもかわいた。

そのままの姿勢で四日たった。新川さんのまわりの死体は大きくふくれ上がった。左足の火口のような大きな傷に、ウジがまっ白にうごめいた。どうすることもできなかった。

「そのとき、あの竹ヤブのなかで見た金バエのたかった死体、それから、月光の下で横たわって死んでいた兵隊を見たときの気持ちがよみがえってきた……だれにも知られず死んでいることのおそろしさが、いま、この石垣の下で、わが身のものとなった……わたしは、もうたったひとりで死んでいく天涯孤独の恐怖にたえられなかった……ああ、もう一刻も早くこの気持ちからのがれたい、死にたい死にたいとそればっかり……」。

新しい人生へ

けっきょく、五日め、上陸してきた米軍戦車に発見された新川さんは、収容された病院で、数日後に手術を受けた。傷はすでに治療の段階を越えていた。大タイ部中間から切断したのだ。その上、八ヵ月の入院中、奇蹟的に生きていた母親にあずけておいた初枝ちゃんが、栄養失調に余病を併発して死んだ。左足を失い、また最後まで守りぬいた最愛のわが子を失った新川さん——だが、絶望の底に朗報がもたらされた。応召していた夫のAさんが生きているというのだ。子はなくても、いまは夫があればというかすかな望みで夫の

のを見た。なんとなく人間の形をした黒い像がうずくまっているのだ。だが、人間にしてはあまりに黒すぎる……なんだろう……近づいた新川さんが見たものは、倒れもしないでうずくまった死体を、隙間なく埋めつくした金バエだった。

近くでたえ間なく炸裂する艦砲弾の恐怖も忘れて、新川さんは呆然と立ちつくした。うねうねと重なり合ってうごめく一面の金バエ——いま、まっ黒に埋められたこの死体を、まもなく数万のウジがむしばむだろう。そして、生きているときは、歴史もあり未来もあり思想もあったこのひとりの人間は、まもなく解体するだろう。だれにかえりみられることもなく、ただひとりで捨て置かれたまま……

人間のはかなさ、戦争のみじめさ、さながら生き地獄の実感が、はじめてしみじみと胸にきた。

「おばちゃん、早く逃げようよ、あぶないよ……」

新川さんの伯母の四才の男の子が、竹ヤブの奥から必死に叫んだ。またものすごい炸裂音がして、地ひびきとともに土砂が竹の葉一面に降りかかった。

竹ヤブをぬけ、谷を渡り、やみくもの逃走がそれから続いた。いっしょについてきた近所の人たち数人も、いつのまにかばらばらにはぐれてしまっていた。新川さんは、伯母とその老父と伯母の子供たち、合わせて八人の人数で、その晩かろうじて海岸寄りの福樹部落へはいった。

だが、そこはさらにひどい被害だった。部落全体が一面の火の海だった。すさまじい火炎が艦砲弾とともにぱっと中天高く舞い上がる。もはや進退きわまったという感じだった。どこへ逃げたとしても、細長い島のこと、東と西の両方の海岸は、もう米軍の大艦隊がぎっしりと占拠していて、両方から間断ない艦砲弾があびせられるのだった。完全な袋のネズミとなった。小さな部落のなかで、人々はただ悲鳴を上げて右往左往するばかりだった。それは、新川さんがこの目で見た、まさしく生きながらの地獄の様相だった。

人々は火をのがれて、部落の外へ外へと流れた。しかし、どこへ行っても砲弾は降ってくる。この先、逃げまわることはただ疲れるばかりだった。新川さんたちは、やむなくキビ畑のなかに身を隠して、ひそかに弾丸を避けた。米軍の空母から飛び立ったグラマン・ヘルキャットとかワイルドキャットとか、ヴォートシコルスキー、あるいはノースアメリカンP38などという足の早い艦載機が、すばやい機銃掃射を、女、子供の別なく浴びせてきた。キビを折っては食べ、生いもをかじり、水たまりの水を飲んで餓えとかわきをしのいだ。

そのうちに、戦局は展開し、周囲は完全に米軍に包囲されてしまった。それとともに、艦砲射撃はいよいよ激烈をきわめた。前後左右、めまぐるしいほどに土が掘り返され肉塊が飛び散った。やっとの思いで、小さな丘の中腹の、畑の隅をささえている石垣の横に避難した新川さんら八人は、もう一歩も動けなかった。動いた先で、かならず砲弾は炸裂するだろうし、といって、この石垣の横の小さな陰も、いつまで安全であるかはわからなかった。すべてが時間の問題だった。新川さんらは、血走った目で、たがいの蒼白な顔を見合った。

「せめて、戦地のとうちゃんにひと目会って死にたいねえ……」

伯母さんが新川さんに訴えるように言った。新川さんとても思いは同じだった。沖縄の空は青く晴れていて、入道雲がひとつぽっかりと浮かんでいた。一瞬、奇妙な静けさだった。

〈ああ、こんなに平和だったらなァ……〉

ふと、ある感慨が新川さんの胸をよぎったとき——ものすごい轟音とともに、赤い火と砂煙とがあたり一面をおおった。新川さんはあっというまに強い風を受けて地面にたたき



（親しい婦人（右）とともに教会の外で……）

る。》（新約聖書二八三ページ）

まさしく、そこには、キリストによって絶望を克服され、もはや過去を超えて未来に生きようとする新しい新川さんがいた。

翌年の三月、左足を引きずりながら、小さな貨物船上の客となって、那覇の港を離れていく中年の一婦人――いまや、新しい人生と新しい自分と新しい生きかたを知った新川さんが、その新しい生命、イエス・キリストのみがあたえ得る永遠の生命を、ひとりでも多くの人に伝道すべく決心し身をささげて伝道者としての勉学を積むため、生まれてはじめての東京へ行く姿だった。

この巨大な母

――神学校生活はいかがでしたか？……

「なにしろ、生まれてはじめてだし、学歴もないのを特別のはからいで入れてもらったもんだから、勉強には苦労したね。途中で、内地の空気になれないせいか病気になって休学してね……でも、わたしは、頭悪くても体が言うこときかんでも、心をこめていっしょうけんめい伝道することはできると思ってね、がんばったのだよ」

朴とつそのものの、いなかのオバサンには、思いがけない根性があった。在学中、バカのひとつ覚えと言わば言え、伝道者はそれでいいのだと慰め励ましてくれたのは、日本基督教団淀橋教会牧師の小原十三司氏だそうだが、新川さんもはっきりと言うのだ。これよりほかはないとすれば、これをただ一心にやるだけだ、と。五年間の神学校生活をささえたものも、卒業後三二年六月に沖縄に帰り、牧師のいない解散まぎわの西原教会に新任牧師として全力をかたむけて再建運動を展開したのも、どうやらこういう捨て身の根性であったようだ。いやむしろ、それは身も心もの新生を経験した新川さんのなかに燃えるキリストへのあつい感激と信仰と言ったほうが適切だろう。

もちろん、困難は数多くあった。西原教会とは名のみ、もう掘立小屋の集まりの場所も



（片足でペタルを踏み、さんびかを教える）

帰還を待った。しかし、二〇年三月に帰ったAさんは三ヵ月の滞在後、変わりはてた不具の妻に見切りをつけて去った。それっきりの離縁だった。

——これで新川さんの歩みは終る。だが、この最後は、同時に新人新川さんの出発でもあった。

二〇年八月、終戦、艦砲射撃の轟音はぴたりとやんで、おそろしいほど空虚な静けさが沖縄全土にやってきた。村も山も畑も、形もなく掘り返された焦土に変わっていた。それはまた、敗残の身を、見る影もなく形を変えた故郷西原村にはこび帰った新川さん自身の心の風景でもあった。

〈この先、どうして生きていったらいいのか……わたしはもう生きた屍ではないか、もうこの先、わたしにどんな人生が、どんな希望が待ってるというのだろう……〉

自殺をこころみては失敗し、苦悩の日々を送るそんなある朝、新川さんの目は庭先の石垣にからみつく山カヅラの葉に強くとらえられた。戦火で崩れた石垣に、なおしつこくしがみついて、せいいっぱいの葉を茂らせ、せいいっぱいの花を咲かせている一本の山カヅラの生きる姿——

新川さんの黒くやつれたほほに、いつか静かに涙が流れていた。

〈あれだ、人間だってあれでなければ生きられんのだ。わたしも、なにかにすがって生きよう、いっしょうけんめい生きよう……〉

荒廃した村には、掘立小屋の小さな教会があった。やっと一二、三人の人たちが、よその町からときどきやってくるよその教会の牧師とともに、ささやかな集会を開いていた。

そして、このささやかな集まりのなかに、ふしぎなあたたかさを見いだした新川さんは、生まれてはじめての教会がよいに、かすかに人間らしい思いを感ずるようになっていった。不自由な体を引きずって、まだ凸凹の残る半里の道を、集会といえば雨の日も風の日も通った。それは、いまや新川さんのなかに燃え上がる、ひたむきな生への渇望でもあった。

昭和二五年六月のある日、掘立小屋の西原教会では、敬けんな洗礼式が行なわれていた。そのなかに、ひざを折り頭をたれて、感激にむせびながら洗礼を受ける新川さんの姿があった。

《だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのであ

（方言のままで、熱心に福音を説く）



本を読みましょう

——入門・書簡・記録——



『聖書入門』(北森嘉蔵著、教文館刊二〇〇円)　著者はこの本を〝聖書を少しでも近づきやすい書物として紹介するために書いた〟と言っています。蜜蜂を誘う花の役目にもと思い、目次を紹介します。「聖書の出る幕」「人生における聖書の位置」「聖書的人間観の現代的意義」「聖書のまことの姿」「聖書から見た青年」「自殺」「罪」「平和」「マルクス主義」「ニヒリズム」「ヒューマニズム」「政治」「宗教批判について」「愛と愛」「未練と十字架」「キリスト教が〝わたしの国はこの世のものではない〟というかぎりにおいて、それは政治を超越するが、しかし〝神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった〟というかぎりにおいてキリスト教は政治を自己の愛の真実の内に包むのである。政治を超越しながら、しかもこれを包むキリスト教の愛こそ『神の痛み』とよばれる事態である。」(政治)。これは全内容を貫く著者の基調音です。

『反ナチ抵抗者の獄中書簡』(大岩美代訳、新教出版社刊、一八〇円)ナチスに捕えられ死刑の判決を受けた人々の証言です。彼らが人間として神の似姿を着せられるとき、そこではいつも悪の力は愚か者となり、そして彼らの企てと反対のことが起こりました。悪の力の政治的強制にもかかわらず、そこに生まれたものは犠牲者たちの自由であり、神と神のもつ救いの証言であり、隣人に対する地上と永遠の幸福に対する配慮でした。また自己自身の存在の意味、国民や人類に対する責任、それぞれ置かれている場所に立って果たすべき奉仕——そういうものに関わる発言でありました。編著者は言っています。〝抵抗は過去のことがらではない。それは現在の問題である〟と。

『放蕩息子』(シュニーヴィント著、蓮見和男訳、新教出版社刊、一五〇円)著者はドイツの新約聖書学者で、ルターやバルトの影響を受けています。第二次世界大戦中ニーメラーらとともに、ドイツ教会闘争に参加して投獄されました。この書物はルカ一五の有名なたとえのほかに「イエスは復帰(回心)ということをどのように理解されたか」「新約聖書における喜び」の二編を含んでいます。放蕩息子のたとえ話はあまりになれすぎていて、牧師も信徒もこれを大衆伝道に役立てようとするが、自分自身にあてはめてみないうらみがあると著者は言っています。「これらのたとえは正しいものに向けられている。断乎として神の道を歩んでいる者、まじめに敬虔であろうとする者に向けられている。かかる者こそイエスの罪人への愛につまづくのである。これは敬虔な者の服従が喜びのない奉仕、奴隷奉公であったことの証明である」と語るとき、そのみことばがわたしたちに向けられていることを知るでありましょう。

『愛は障害を越えて——肢体不自由児の生活記録——』(府川寿夫著、キリスト新聞社刊、二三〇円)　小児マヒの流行時に機宜に適した出版でしょう。所得倍増ブーム、享楽的な世相の裏に、宿命的な病魔にあえぐ子供たちが小さい力をふりしぼって生きようと努力している記録であります。さらにこの子供たちとともに献身の生活をつづけている教師、医師、保母、看護婦などの人間愛、それに宿命の子を持つ親たちの愛と苦悩の生活の記録とも言えましょう。「光明学校を卒業した脳性マヒ者の大部分は仕事につくこともできず、家にこもって暗い日々を送っています。彼らを無理な就職へ追いこもうとしないで趣味に生かすくふうはないものでしょうか。経済的な問題が大きな壁になっていますが、彼らが自由に自分の能力に適した仕事に従事し、相愛の相手が出てくれば結婚もできるような大きな施設が一日も早く作られるようにとはすべての脳性マヒ者の願いです」との著者の訴えをお伝えしておきます。

(中森幾之進・浅草北部教会牧師)



なかった。この広い村で、古い信徒の名がようやく五、六人数えられる程度だった。なにもかもふり出しからはじめなければならなかった。いわゆる開拓伝道という、これも捨て身の戦法だ。雨の日も風の日も、遠く離れたあっちの部落こっちの部落をひとりで歩いた。村の小学校にかけ合って教室を借り、日曜学校とおとなの集会を開いた。義足を引きずっての歩行は、かなりの疲労をともなう。が、わかってもらえるまではがんばらなければならぬ——

　昨年はじめ、思いがけずこの左足に対する補償金が米軍当局から出た。一二〇〇ドル、邦貨にして約四〇万円だった。それをそっくり払って、土地を五六〇坪買った。教会員や有志の応援で二二坪の家もついでに買うことができた。畳敷きのまま九畳と六畳の板の間が集会の場所になった。

　この事実を見て、はじめて村人が感動した。一人、二人、三人と、新川さんを訪れる人が増えて行った。なかでも、ゴロツキや飲んだくれの若者がこのオバサンを慕った。

「ダメだよあんた、そんなことしてちゃ。あんたの人生は一回きりしかないんだよ」

　ズバズバと言ってのけて、しかもなんとも言えないあたたかいものをオバサンは感じさせるのだそうだ。そう言えば、この人のまわりには、小学生や中学生、高校生の群れがたえない。そして、みんながじつに明るくよく動く。村道での紙芝居伝道や、身寄りのない老人をたずねての洗濯奉仕や……

「わたしは、牧師というよりは、この子たちの母だ、だれでもみんなわたしの子だよ」、そう新川さんはつぶやく。かつて、一児初枝ちゃんを失った母は、いまはなんという強い大きな母となったことだろう。巨大な母　—この人の前にすわると、いつのまにか、こちらが吸いこまれていくようなそんな感じになる。

　午後の熱い太陽をあびて、この陽焼けしたオバサンと外へ出てみた。ちょうどキビのとり入れがはじまっている。それがすごい。竹のようなやつが製糖工場のトラックに山と積みこまれる。それが、キビ畑の間を押しわけるようにしてユサユサと行くのだ。

「一本かじってみるかね……」

六〇〇坪の教会の畑から、一本ボッキリとへし折ると、手早く皮をむいて、したたるような白いやつを渡してくれる。待ってましたとばかりに、この人の前ではずかしさもない。

　キビは手間がかからずに金になる。だからこの村はみんなキビを栽培するのだそうだ。それでも、サツマイモ畑なども目につく。そういう目で見るからか、なんとなく内地のより葉が大きい。地中でたくましくふとっているイモを感じさせる。うまいだろうな……ものほしそうな顔をしていたのか、

「それは、ブタのエサのために作ってる」

オバサンはぶっきらぼうに言った。

　ゆうべも、床についたのは夜中の二時だったそうだ。たえまなく村人と接するオバサンは多忙だ。そのオバサンが畑のなかの道を行くと、そっちこっちの人が手を休めてにこやかにあいさつする。小さな子供たちが、「先生、先生」と、うれしそうに走り寄ってくる。

　この人の過去に、なにがあったというのだろう。この人をほろぼす、なにがあったというのだろう。

　——先生、平和のためには軍備が必要と言ってる連中が内地にはいるのですが……

と言ったら、

「そら、そういうモンもあるじゃろうが……」

一瞬、叱りつけるようなピリリとした口調だった。

だします。彼は小学校の五年生のとき、疎開先きのいなかの囲炉裏ばたで、ふとしたはずみから弟さんが投げた火箸が、右の耳と髪の毛の間に突き刺さったために、一瞬にして左半身が不髄になるという奇禍に出会った人です。その瞬間、大きないすで殴られたようなショックを受けて昏倒した彼は、驚いて傍によってきたおかあさんと兄さんに抱き起こされたときには、もう目も見えなくなって、ただ「助けて、助けて」と言うだけだったそうですが、兄さんにおんぶされて病院にかつぎこまれる途中、「オイ左手はどうした」と言われてみて、はじめて目だけでなく、左半身が全く動かなくなったことに気がつきました。幸いにも一ヵ月の入院生活の末に、やっと彼の目は見えるようになりましたが、左半身の不髄は、もう永久に癒らないことがわかりました。この時からSさんの人生は暗いものになってしまいました。それまではみんなといっしょに運動場を駆け回っていたのに、休みの時間などは肋木にもたれて、ぼんやりものを考える少年に彼はなってしまったのです。「ヤーイ、半人足!」とか「おまえはカタワだ!」とかいう口さがない惨酷な子供たちの嘲笑を、人一倍感受性の鋭いSさんはどんなに痛く思ったことでしょう。どうして自分だけが、こんなめにあわなければならないのか？　小学校の五年生にすぎない小さい少年ではありましたが、なまじっかのおとなたちの気づかないような、暗い恐ろしい運命の意識を彼は抱くようになりました。しかし、彼は自分を痛めつける運命が苛酷であればあるだけ、そのように彼を圧する暗い強大なものと激しく戦おうとする気持ちを持つような意志的・性格的な人間でした。かくして抗しがたい暗い運命とそれと戦っていこうとする激しい超越の意志とが、彼を不敵な人間にしていったと言えましょう。なぜかと言えば、そのような中でおそらくSさんは、おそろしい暗い運命も知らず、それに抗していく激しい戦いも知らぬ世の人と自分とを自覚的に区別して、そこからかえって世の人を見下げるような不敵な魂を持つにいたったに違いないからです。だが運命は抗しがたいものとして自覚されるがゆえに、運命と言われるのではありませんか。Sさんは次第にそれに気づいていきました。

たとえば昔のギリシャ人は、時間（クロノス）の神を、自分の子をつぎつぎと飲みこむ怪物として理解したと言われます。時間は、突如、なにも存在しないところから人間を生ぜしめ、その人間がいろいろな喜びや悲しみの年月を過ごす途中に、ふたたび襲いかかって、なさけ容赦なく自分の中に飲みこんでしまう。そのように生んでは飲みこみ、生んでは飲みこむという、永劫にわたる同じことの円環的な繰り返しを行なうものが時間であるとギリシャ人は理解したのです。いや、ギリシャ人だけに限りません。ゲーテの『ファウスト』の中で、メーフィストフェーレスがファウスト博士の死骸を前にして言うことばにもそれはあらわれています。いかなる刹那にも満足せずに努力向上してやまなかったファウストがついに死ぬ。すると、天上より「過ぎ去ったのだ」という声がかかります。つまりファウスト博士が苦悩しつつも生涯を過ごし来たったことには意味があったのだと、その声は言うのですが、それに対して「否定する霊」である悪魔メーフィストーは、いぶかしげに、しかも虚無的にこう言います。

過ぎ去った、と。ばかなことばだ。なぜ過ぎ去らせるのだ。過ぎ去ったのと、なにもないのとは全く同じだ。なんのために永遠にものを造るのだ。そして造られたものを「無」に追いこむのだ。いまなにやらが過ぎ去った。それになんの意味がある。もとからなかったのと同じじゃないか。そしてなにかあるようにどうどうめぐりをしている。それよりか、おれは「永遠な虚無」が好きだ。

永遠な虚無！　なにもないところから突如この世に生まれてきて、そしてなにもないところに飲みこまれていく。これが時間の中に生まれてきたものの運命であるなら、メーフ

恋愛論・第四回

続・男と女

高木幹太



1 自己分裂

人間は、自分に課せられた性、——性ということばは英語のセックスですが、これはラテン語のセカーレ、すなわち〈切断する〉という動詞から由来したもので、もと分離・区別の意味でしたが、——男としてあるか、あるいは女としてあるか、他から分離・区別されている自分に課せられたこの性、というものを深い意味で受容せねばならない、そしてそのように男女が互に自己の区別を受容している姿が神に造られたときに、アダムとエバが「ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」と聖書に記された意味である、——このようにわたしは前回に記しました。だが、いかにしてわれわれは、自己にとって絶えざる憧憬と嫉妬との対象であるはずの他者から区別せられた自己、というものを受け容れることができるでしょうか。

人間にとって最大の問題の一つは、この、自己が自己を受容・肯定し得るかどうかということなのであります。自己がありのままの裸の自己を許すことができない。自己が自己と和解・結合することができないで分裂している。こういう痛ましい姿をわたしは前回では漱石の『行人』から見たのですが、もう一度、聖書のルカによる福音書一九章に出てくる有名なあのザアカイの話にあたって調べてみましょう。ごぞんじのように彼はエリコの町の取税人のかしらでした。ザアカイという名まえは、バビロン捕囚からの第一回帰還者名簿の中にも出ているほどですから（ネヘミヤ記七・一四）、彼はおそらくイスラエルの名家の一つに所属したりっぱな家の出であったと思われます。だが、「純粋な」「罪のない」という意味のヘブル語ザッカイというりっぱな名まえを持っているものの、実は彼は貪欲な血も涙もない役人として、同胞のだれからもきらわれ、皆から罪人と呼ばれてさげすまれている、淋しい孤独な生活を送っていました。ですから〈取税人のかしら〉としての地位も、〈金持ち〉としての財産もあるのに、つまりこの世の中を通るのに十分はぶりのきく条件をそなえて少しの不自由さもないはずなのに、彼の心にはたまらないような空虚があったに違いありませんでした。人々は、たとえば酔っぱらいが「自分は少しもまだ酔ってなんかいない」と言いはるように、このような空虚さの中にありながら自己の空虚さを認めようとも、またほんとうの自己に立ち帰ろうともしないで、その場その場をなにかでまぎらわせて暮しているものですが、このザアカイは、どうしようもないにもかかわらず現実の自己を安価に許したり、あるいはありのままの裸の自己とそのまま和解して、「しかたがないさ」などと自己を慰めることができませんでした。彼は魂のいちばん深いところで、自己受容のできぬ自己の惨めさ・空虚さと戦い、それをなんとか解決したいという切なる願いを抱いて生きていたのです。

2 Sさんのこと

わたしはこのザアカイの話を読むごとに、わたしの親しい友であるSさんのことを思い

てイエスは、だれからも受け容れられなかった彼の存在を愛をもって受容・肯定する主として、現実に彼の前に立つかたとなられたのでした。

ティリッヒによれば、罪(sin)という英語は〈切れ切れに〉(asunder)ということばと語源を同じくするものであって、〈分離〉ということを意味していました。そして彼によればその〈分離〉には次の三つのものがあると言われます。すなわち、個々の生命の間の分離、自己の自己よりの分離、自己の存在の根拠よりの分離であります。I、第一にわれわれは、あのリルケが『マルテの手記』の中で嘆いたように、自分自身を入れる屋根が、この世界のどこにもないという気がしています。わたしはわたし、他人は他だ、その人間になんの連関もないという気持ちです。われわれは熱烈な恋愛のさなかにさえそれを感じます。「人間の世界におけるほとんどすべてのことがそうであるように、恋愛における結合は誤解の結果である。この誤解がすなわち快楽なのだ。実際は越えることのできない深渕がそこに横たわっていて気持ちが通じていないのだ」というボードレールの『悪の華』(七七)のことばは、まるで自己自身のそれのようにわれわれに感じとれるではありませんか。そして、この他者を他者として認めないで自己のみを貫き、かくて他者から分離している存在の仕方こそ、罪なのであります。II、第二に、そのように他者から分離しているのみならず、われわれは自己自身からも分離しています。かつてのザアカイやSさんのように、自己のありのままの姿を受容・肯定することができないままに、痛ましい自己分裂をおこしていることは、いままで見たとおりでありました。これもまた人間の罪の姿です。III、だが、分離はそれのみではありません。われわれは、自己の生きることの根拠、すなわち、神を知らず、あのエレミヤが言ったように「活ける水のみなもと」から分離している存在であります(二・一三)。たとえばわれわれは、自分がどこから来てどこへ去って行くのかを知らないままに暮しているではありませんか。そして、たいせつなことは以上の三つの分離は、よく考えるなら、互いに深い連関をなして存在していることにわれわれは気づきます。つまり、存在の根拠から分離しているがゆえに、自己が自己から分裂・分離しているのであり、さらに自己のその分裂のゆえに他者から自己が分離しているのです。これがわれわれの偽らない罪の姿なのであります。——福音とはこのような罪にまとわれたわれわれ、いかにしても肯定・受容しえぬわれわれを、それにもかかわらずイエスにおいて神が肯定・受容されているということです。そして福音を信ずるということは、その神の受容を神のあわれみによってわれわれが受容するということ、ティリッヒのことばで言えば〈受容の受容〉をなすということであります。

男が男らしくあり、女が女らしくあって、与えられた性を深く美しく生きるということは、このような人間としての根本的構造のもとにはじめて可能なのであります。男性や女性の魅力というものは、思弁的にそれを考えたり、技術的にそれを身につけたりするような問題とは異なっているものであって、主なる神による人間の救済とそこから結果する主なる神の戒めに対する服従によって、おのずから磨かれ発揮されていくことがらだと言わねばなりません。世のいわゆる〈恋愛論〉が哲学的・文学的・心理学的・技術的にさまざまなされているにもかかわらず、深い人間についての洞察と救済に裏うちされないために常にある失望をわれわれにもたらすのはそのためではないでしょうか。バルトが非常な熱意をもって述べている、あの男と女との区別、その依存関係、その秩序というような問題も、思うにここを始点としているのだということができます。

(次回は「不安と情熱」)

ィストーの言うごとく、時間とはわれわれにとって、まさに「永遠な虚無」ではありませんか。ドストエフスキーの『白痴』のイッポリットのことばを借りて言えば、時間のそのような姿は、ちょうど、「最新式の大きな機械が、無限に貫く、偉大な創造物を無意味に引っつかんでこなごなに打ちくだき、なんの感動もなしに鈍い表情で飲みこんでしまう」のに似ています。永遠の虚無に人間を飲みこむ不気味な時間、そのような時間に限定されている人間の運命を思って、われわれは思わずゾッとするのです。——

Sさんは自分に出会った運命が、やがて、このような不気味な虚無につながることを自覚していきました。疲れ切ってしまった彼は次第に萩原朔太郎の倦怠と虚無の詩の世界に魅せられるように引き入れられていったと言います。

もうなにもかもなくしてしまった
とうとう風の死んでいる野道へきて
もろこしの葉うらにからびてしまった。
なんというさびしい自分の来歴だろう。

高校一年生のころすでに涙とともにこんなわびしい世界を彼が実感していたことにわたしは驚くのですが、しかし、そうであればあるだけ、あのザアカイがそうであったように彼のうちには、なんとかしてこの人生をよきものと見たい、生きるに価するものとしたい、生まれてよかったと思いたいという願いが切になっていくのでした。それは具体的には、彼が安易に運命に貫かれている自己と和解したり、自己受容をなしたりすることができないであの『行人』の一郎のように焦燥にかられて存在していたことを意味するものです。

3　福音の光のもとに

だが、ふとしたことから教会に行くようになったSさんは、あいかわらず虚無にうちひしがれながらも聖書を読み進むうちに、ある時、次のようなイエスのことばに出会ってハッとしたのです。それはマタイによる福音書一八章の、羊飼いが迷わぬ九十九匹を野に置いて失われた一匹の羊をさがしに出かける話のところでした。そこにはこう書いてありました。

もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。

Sさんの魂に、とくにこの聖句の後半が強烈な光を投げかけたのです。「これらの小さい者のひとりが滅びることは……」。ああそうだったのか。他者からもそうであるが、自分自身でさえもどうしてもその存在を許容し得ない自分のような、だれの目にもとまらぬ＜小さい者＞を受け容れてくださるかたがあったのだ……。それがイエスにおける天の父であったのだ。「これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない！」。この瞬間、イエスは時間的に千九百何十年前の、空間的に遠いユダヤの国に存在した、歴史上の人物であることをやめて、そのときのSさんの実存に向きあって立った、復活の主となったのです。イエスは常にこのようにしてわれわれに近づいて来たまいます。「未知の人、無名の人として、ちょうどガリラヤ湖畔で彼が何人であるかを知らなかった人々にあらわれたと同じように」。そして「彼は＜汝我に従え＞と、かつてと同じことばを発し、彼が現代において解かねばならぬ問題をわれわれに示すのです」（シュバイツァー）。まさにその瞬間にSさんは、彼と聖書を隔てていた時間と空間の厚い壁が透明となって、イエスがじかに彼にむかって＜汝我に従え＞と声をかけられたことを経験したのでした。それは、あのザアカイの経験でもあります。いちじく桑の木に上がって見ていた彼の所で立ちどまったイエスは上を見あげて、突然「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」と声をかけられたのでした。そしてその瞬間からザアカイにとっ

天野　信仰の名をかりて、キリスト者でない人にも、不信な行為をすることがありますね。わたし、日本舞踊をやっていて、お師匠さんは金光教の人なんですが、自分の信仰をいいことにして、不義理をして教会へ行ってしまったり、神さまの律法をおかすようなことをします。信仰すればいいというんじゃなくて、したがっていかなければならない。だいたい、教会はルターのいう〈信仰のみ〉でやってきていますが、信仰にはいったら服従になるんじゃないでしょうか。信仰さえあれば、というのは、ただナムアミダブツといってるのとおなじことで…。



宮　それは、信仰ということがほんとにわかっていない、ということになると思いますね。ただナムアミダブツじゃない。

律　法

天野　このごろ、旧約聖書を、だんだん読んできて、そこにある神の律法は、ほんとにりっぱだと思います。信仰がなければ、まもることできませんが、信仰にはいれば、律法をまもらざるをえなくなります。信仰にはいったものを神のほうへみちびいてゆくためのサクが律法ではないか、という気がします。

石島　ところが、ぼくたち、そのサクを越えるから問題なんだ。(笑)

天野　海に赤旗が立っていて、そこから出るとあぶないということを教えているのは、恵みじゃないでしょうか。危険を知らされて引きかえすことが、恵みだと思います。

石島　そうね、そういう意味でも、律法は神の恵みのあかしと言えるかもしれない。

天野　むかしのキリスト者は、きびしかったのに、いまはナマぬるいと思うんです。自分もそうですが、いっぱんに、信仰によって救われるということに甘んじているんじゃないですか。信仰はもうわかっているから、信じてからあとのことが、たいせつなんだと思います。

石島　それはどうかな。信仰はわかった、もういい、あとは実行だ、という考えかたはおかしいな。ピンからキリまで信仰じゃないですか。

罪の意識

宮　さっきの台風の例ですが、台風がそれてほしいと思う、ところが、それれば、ほかの人たちがこまる――こういうの、厳密には、やはり罪なんだと思います。また、役員会で、牧師にも他の役員にも、自分の気持ちがみとめてもらえなくて、時がたつにつれ、みんなをさばくようになってきました。これは、自分が正しかったにしても、そこに罪がはいりこんできた。でも、こんなものでも主があがなってくださっているという、そのおかげで、もとへもどれる。わたしが罪びとであるということが、キリスト者としていいことだ、と言ってはおかしいけど、力だと思うんですよ。罪びとの自覚がなければ、キリスト者としての感謝も反省もないでしょう。



関口　教会のえらい先生と思っていたかたがとても人間的なことを言ったり、なさったりするので、失望したりすることがありましたが、牧師さんだって人間だから、聖書にそわないこともあると思います。

石島　こともある、どころじゃない…(笑)

関口　だからこそ、教会にくるんだと思います、罪を感じるからこそ……。ふつうだったら、人間だからあたりまえ、ですむのでしょうけど、罪と感じれば、さらに一歩、神へちかづく……。

《聖句をめぐる座談会(9)》

信仰によらぬことは罪

(司会) 石島三郎

【出席者】

宮　輝雄（37）鉱山技師
関口温子（36）事務員
木佐貫道夫（27）会社員
天野雅弘（23）中学教員
古屋敦子（18）事務員

【聖句】

「すべて信仰によらないことは、罪である。」
（ローマ人への手紙一四章二三節）

自分中心

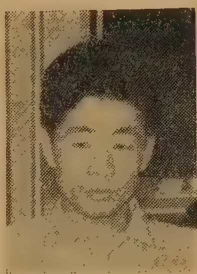
宮　人間は身勝手なもので、自分中心にしかモノを考えない。しかし、そういうふうに自分のカラにとじこもってしまうと、みたされた平安がなく、ノドがかわききったような不安定な気持ちになると思うんです。神さまのことを考えて行動するときは平安を与えられるけど、自分勝手なときは信仰によっていないので、かえって自分をくるしめることになります。

古屋　自分中心でやったつもりでなくても最終的には、自分中心になってしまう。

石島　自分中心はいけないかもしれないが、だからといって、かんたんに、他人のことを考えろ、神さま中心にやれ、といってもカタはつかない。台風が西にそれれば安心するが、西のほうはたいへんだ。火事のとき、風むきがかわると、ホッとするけど、風下になった人たちのことはあまり考えない。（笑）まったく勝手なもんですね。

関口　わたし、以前、民間会社にいたんですが、いろいろな人間関係で、わかります。みんな、終局的には、自分がかわいいんだということが……。でも、信仰をもっているからこそ、自己中心的じゃないかということを、ほんとにふかく意識するんだと思いますけど……。

木佐貫　ぼくは、小さいときから、教会へ行ってたんですが、いなかから東京へ出てきて、やっと二、三年前から教会へ出られるようになりました。百人ほどの町工場につとめていて、とても仕事がつらいんです。教会へ行くと、どんなにアセ水ながすつらい労働でも、よろこぶべきだと思うんですけど、自分の欲望がでてきます。どこまでいっても、人間の欲望は消えない。



石島　欲望をもつのは、生きてる証拠みたいなもんで、それをイキナリ悪いといっちまっちゃ、ミもフタもない。自分で何か方針たてたり、生活の道を考えたりすることまで、罪だってことになっちゃう。

信仰

宮　たとえば、仏教のシンランでも、自力でなく他力の方向に救いを見いだした。われわれキリスト者もそうで、信仰によるとき救われるんですね。自分は矛盾のなかにあるけど、主におまかせして、自分の力にまかせずにやってゆこう、と思ったとき、平安があたえられた。十年間の信仰の経験でそのことを知りました。

をまこととする、そう認めることが信仰で……守れる守れないはべつとして……。われわれにできないからと、それでいいことにしないで、預言者や主イエスを目標としてすすんで行くべきです。そして、ついには、神の似姿になるように……。

石島 それで、にっちもさっちもいかなくならない?

天野 まだそこまではいきませんが……。

宮 主よ主よ、というのが信仰じゃない。パウロもマラソンにたとえていますから、道徳的にだけ解してはいけないけど、安住して修練をおこたってはならない。神が、大きな摂理のうちで、試練をあたえる。逆にいえば、それが当人の精進になる。わたし東京へきて、ざんねんなのは、カネもちの信者がいるのに献金がすくない。なにか、アクセサリー的な信仰のような気がしますね。いなかでは、よくやってますよ。東京では、おカネをつかうチャンスの多いのが誘惑なんでしょうがね。ころびつつ、倒れつつ試練をのりこえる体制が、信仰生活じゃないでしょうか。そうでないと卒業信者になってしまう。

石島 その精進をいくらしても、ダメだ、ということを知らされつつ、いつも新らしく恵みの場に立たされることが、そこに立たされているということを知ることが、だいじじゃないかな。まちがったって、失敗したって、倒れたって、「ただひとりの服従」のなかにおかれているんだから、安心がある。あまり罪々といって、萎縮しちまっちゃいけない。もっと自由に大らかに。

宮 くだらないことを罪よばわりすると、自分もちぢこまるし、ひとにもつめたくなりますね。

古屋 わたし、クリスチャン・ホームにそだったものですから、あまり考えずに、二年前に受洗しました。それで、くるしんではげしく信仰を求めた人の喜びをきくと、ねたむような気持ちになりました。



関口 わたしも、古屋さん式で、単純に信じて……。ひとつひとつブツかりながら進むのが、つよい信仰かと思ったりして……。

石島 ひとそれぞれでしょう。強いも弱いもない。信仰は生涯をかけてのこと、主のものにされたものとして歩むだけですね。

仕事の場で

木佐貫 教会以外の交わりでは、仕事の関係では、ひとに仕えるという気持ちが、なくなることがあります。そういうとき、教会へ行ってはじめて、つらい労働にもたえていける、友情ももてる、と感じます。

石島 会社はむずかしい、職階制なんかあるし……。

宮 炭坑では、それがとくにひどい。職員の住宅と坑夫の住宅は、ぜんぜんちがっていて、住んでいるところが、もう階級的にわかれていますからね。

天野 ぼく、花柳流の名取なんですが、この世界では、キリスト教とは、ぜんぜんちがうものを感じます。ウタの内容や、フリなど……。

石島 それは、それで、いいじゃないの。ぼくも、カブキやオドリが好きだけど、べつに信仰と直接むすびつけて考えない。

天野 しかし、師弟関係なんか、とても封建的だし、いろいろ古い慣習はあるし、どうしてそういうものを克服していくか……。

宮 日本芸術には、いいものが多いですね。キリスト教的なものを、ソトからおしつけるんじゃなく、その中味や、慣習などを、キリスト教化していくことが、だいじなんでしょうね。

（次回は「**真実を語れ**」）

石島　信仰もってない人のりっぱな行ないは信仰によらないから罪だ、ということになるんでしょうかね。

宮　たしかに、キリスト者でなくても、りっぱな人はいます。もって生まれた徳のある人もいます。でも、人の目や社会の目で見ればりっぱでも、信仰というものは、そういうものじゃないですね。神は自分のようなものをも、救って、働かしてくださる。この神から離れることはできない。はなれたようになっても、はなさない神。ここに信仰というものがあると思います。

木佐貫　会社の人なんかと、やむを得ず、酒をのむことがありますが、信仰にはいる前にはなんともなかったのが、いまは、そういう席にいても、なにか苦しくなることが多いです。

石島　われわれキリスト者は、なにかというと、すぐ、いちいち、罪だ、罪だと言いすぎるんじゃないかな。そのくせ、自分がほんとにどうにもならない、ということを、どれだけ強く感じさせられているか……。

天野　これがもし罪であったら、ゆるしてください、と祈るよりほかないですね。罪であるかないかわからないときは。罪でないと思っていても、あとで罪であることもあるし……。罪と知ってて行なうのはいけません。

つまずき

関口　うちの教会で、青年の人が、牧師先生に、「先生、わかい女の人と歩けば、やはりたのしいでしょう」って言ったら「そりゃ、たのしいさ」ってこたえたんです。



それをきいてわかい女のひとが、不潔だって、おこったんですが……。

石島　こまったな、ぼくなんか、どう言われるかわかったもんじゃない。(笑)

関口　でも、わたしは、正直で人間的で、いいと思ったんです。

古屋　わたしなんか、ドライっていうのかしら、牧師さんが何したって、はじめから人間のすることだと割りきってるから、なんとも感じません。わたしのつとめているとこ、いろんな牧師さんがきて、それこそハダカになって、いろいろ話しあってますけど、それ、そばで聞いてて、いやと思ったことない。

関口　わたしは古屋さんぐらいの年のころ、そうはいかなかった。とても尊敬してる人いましたが、その人の私生活を見てガッカリして、一時、教会をはなれたこともありました。でも、いまになって、その人のこともわかるような気がします。

宮　中学のとき洗礼うけた友人があるんですが、ずっと教会に行ってない。おとなの信者の二重生活をみて、少年の心に義憤を感じたということです。

天野　かつて牧師だったが今はそうでない、という人がいますが、その人自身にも問題があるでしょうが、教会は批判するだけでなく、ひとの傷口をあばくのでなく包みあうようにしなければなりませんね。

信仰の精進(しょうじん)

宮　わたし、北海道にいたとき、十年ほど前ですが、一年わずらって、死ぬばかりになりました。そのころ、たまたま賀川先生が美唄(びばい)にきて、その伝道集会に行き、翌年クリスマスに受洗しました。その翌年は、自宅で教会学校の分校をひらきました。途中いやな気持ちになって教会へ行かなくなったこともありますが、教会学校だけはつづけ、いまになって、その成果があらわれてきています。神さまの摂理が、エゴイストであるものを召し、用いてくださる。その恵みによって、努力する思いも与えられるんですね。

天野　パウロのように、精進し、神のことば

す。その例はあまりにも多くあります。

2　信仰の出発 ——聖書

『豊太閤の手紙』という書物の中で、武者小路実篤氏は、信長の手紙七つ、家康の手紙五つ、それと秀吉の手紙一五通とを読んだあとの感想をのべています。

信長の手紙がいちばんきびきびし、実にするどく、心の律動が飛瀑のように落ちかかってくることが感じられ、なかなか名文家だと思う。家康のは思いやりはあるが、型をやぶっていない。言いまわしはさすがに品がいい。そしてわかりにくいところはない。けっきょく、おもしろ味はまるでない、ないところがおもしろいと言うべきである。

秀吉はうまい文章を書こう、手紙が後世にのこる、そんなことを気にしないで、まったく無邪気に書いている。学問がないので、かなばかりの手紙だが、真情のせまるものがある。平凡なことがらを書いた手紙にもおもしろ味がある。

だいたいこんなふうに三人の書いたものを批評してありました。人はその書いたもの、話したことによって、その人の面目躍如たるところを知ることができるのです。

『日蓮遺文集』などを読むと、その日常の心のくばりかたなどがわかります。人物を知るのにはその日記など読むのがいちばんちかみちであります。

さて、イエスの言行を知るためには、なんといっても聖書のほかに、よい書物はありません。

主イエスは、旧約聖書について「この聖書は、わたしについて、あかしをするものである」(ヨハネによる福音書五章三九節)といっています。それをもっと、くわしく言えば、旧約聖書は、わたしが救主キリストであり、神であることを証明するため、書かれたものである、と言われたのであります。イエスの誕生以前にイエス、救主の来ることを予言しているのが旧約聖書で、イエスの誕生後のできごとを書いたのが、新約聖書であります。

旧約三九巻、新約二七巻、合して六六巻を一つとして、聖書とよんでいます。聖書は全体として、イエスを証ししている書物であります。

ゆえに宗教改革者のマルチン・ルターは、「聖書はキリストの横たわっている馬槽である」と言いました。わたしたちは、聖書を開いてこの中のどのところからでもよいから、「ただいま聖書を読みますから、イエスさまどうかわたくしに、これがわかるようにしてください」と言って、祈り心で読めば、必ずその中から、イエスさまにふれることができるのであります。

もし、それがいやなら、批評する態度で読んでみてもよろしい。イエスの申されたことばを新約の中から拾いだして、考え直してみるのもよいでしょう。必ずあなたの心に抵抗を与え、ショックを与え、またどうしてもそのことばの前を素通りすることのできなくなるいくつかのことばや、事件にぶつかると思います。

むかし徳富一敬という、えらい儒学者がありました。老齢八十をすぎて、聖書を読みキリストを信ずるようになりましたが「一夫一婦と、愛敵の教とは、孔子の書に見なかったところである」と言っています。

北陸の富山市新庄で伝道している亀谷凌雲先生は、蓮如上人の一八代目の僧侶の家をつぐはずのところ、聖書をよみ牧師になられたのです。

昨年の秋、先生のお宅を尋ねたとき、

「仏教の教の深さを感謝しているが、仏典の教えるところは聖書の中にみなあります。しかし、聖書には仏教にない尊い教があります」「人類の父なる神、救主イエス・キリスト、聖霊、この三つは仏教にはありません」「わたしは、あみだ仏の尊いこと、ありがたいことを書物で読み、これを信じて涙を流したのです。そしてどうか、その阿弥陀仏に一目でもお目にかかりたいと、念願したのですがダメでした。会うことはできませんでした。聖書を読んでから、ほんとうに神は、イエス・キリストとなって現われたもうたことがわかりました。実にありがたいことです」と、先生が語られました。先生は弟さんとお寺を



＜キリスト教のいろは＞　＜第九回＞

キリストをどう知るか

島村亀鶴

1　長いうわさ

ある人がイエスがほんとうの神であることをどうして知るか、と問われたので、イエスには四人の証人がある、それは、

「天の父なる神、バプテスマのヨハネ、イエス自身のわざ、聖書」であると答えました。

これらの証人によって、イエスを知る手がかりをつけるのがよいでしょう。それにつけても、わたしはまず一般の人々が、イエスをだれであると考えているか、その点からはじめてゆきたいと思います。

マタイによる福音書一六章一三節に、弟子たちに向かって、イエスのほうから「人々は人の子を（わたしをという意味）だれと言っているのか」と質問しています。

「ある人たちはバプテスマのヨハネの再来であると言っています。またほかの人たちは預言者のエリヤだ、いやエレミヤの再来であるともうわさをしております」と弟子たちが答えました。そうするとイエスは、

「ところでおまえたちは、わたしをだれと思っているのか」と、切りこんで弟子たちに問い返しました。そのとき弟子の中でのスポークスマンと自任していたペテロがすぐに

「あなたこそ生ける神の子キリストです」

と答えました。そこでイエスはたいへん喜ばれて「それがわかったのは、おまえの知恵によるのではない、天にいますわたしの父なる神が、おまえに啓示してくれたからだ」と申されました。

これでわかるように、初代のイエスの弟子たちは、イエスを救主、生ける神の子であると、承認していました。むしろ確信していました。この確信にもとずいて服従の生活をしながら喜こんで殉教したのです。

さて人のうわさも七五日というたとえがありますが、イエスのうわさは、七五日どころではありません。百年も千年もつづいて人々の話題にのぼっています。

イエスの誕生を記念して紀元元年とし、今年は一九六一年だと数えています。これほど世界の人間に関係のある人物が、どこにあるでしょう。

麻酔剤や防腐剤の発見者、ジェームス・シンプソン博士は、クロロホルムをはじめ、たくさんの発見をした人であります。

「あなたの一生涯のうちの最大の発見はなんでしたか」と問われたとき、

「それは、わたしが罪人のかしらであるということと、キリストがわたしの救主であるということ、これを発見したことです」

と答えたそうであります。

また有名な文豪のチャールス・ラムが文学者たちと会談していたとき、彼が、

「諸君、もしこの部屋にシェークスピヤがはいって来たら、脱帽して友人としてこれを迎えたらよい。しかし、もしキリストが、この部屋にはいって来られたら、われわれはひざまずいてこれをおがまねばならない」

といったとのことであります。

むかしの人も、現代の人も、ひとしくイエスはキリストであると告白しつづけていま

が消えて、天使のようなふんいきを与える人になっている。そのとき石島さんの心の中から「セルを着て遊女なりしと誰か知る」との句が湧き上がってきたことであろうと思われます。わたしはこの句を思うたびに、キリストのめぐみを感謝し、教会の中に自分がみちびかれてよかったと思います。

4　生きているキリスト

さてみなさん、わたしは最後に、もう一つお考え願いたいことがあります。

釈迦は自分の死ぬるときに「わたしは死ぬるが、わたしの教は永遠にのこる」と申しました。しかしイエス・キリストは「わたしは十字架にかかって死ぬる、が、三日目によみがえる」と申されて、その通りに墓の中から生きかえったのでした。

そして今日まで生き通しておられます。ただその教訓がのこるとか、その事業が継続されているというばかりでなく、その本尊ともいうべきイエス・キリストそのかたが生きていられるのであります。

渋沢栄一氏が欧米旅行をしての帰朝談の中にあったのですが、

有名なチェーンストアをアメリカで創めて成功したワナメーカー氏にあったときの話、ワナメーカーは熱心な信者で、日曜日は自分の店を休業して教会に出席する。大臣になっ[illegible]しているから日曜日は休むが、それでもよければ大臣の任命を受けよう」と言ったほどの熱心家でした。それで渋沢氏が訪問したときも、教会へ誘って行って、自分の教えていた生徒に、紹介して、この有名な日本の実業家の話をきかせました。

そのとき渋沢氏は、生徒らに「諸君はキリストを信じてるが、東洋にも偉大な聖人で孔子がある。その孔子は…」という調子で話したところ、あとでワナメーカー氏は、生徒に向かって「孔子はえらい人にちがいなかろうが、孔子は死んだ。その墓があり、おまいりする人も多い。しかしイエスは死んだが、よみがえった。その墓にはいない。いまも生きてわれらの救主として、みなさんといっしょにいてくださる」という意味のことばをのべたそうです。渋沢氏は米国の思い出として深い印象を与えられたのは、このワナメーカー氏の熱心にイエスは生きていることを、子供たちに話した光景であると、述懐しています。

みなさん、イエスは生きています。それですからこそ、わたしたちが二千年前のイエスのことばを信じて、祈り、願い、うったえてゆくと、応答してくださるのです。

イエスのことばを楯にとり、その約束を土台として、イエスさまによびかけてゆくと、答えてくださる、それだからこそ、二千年の間、教会とその事業がつづけられ、聖書がよまれてきたのです。

人をよく知るには、その人の精神や主義に共鳴して、これを実行するのが近道であると思います。それですから、イエスは、「われに従わんとするものは、十字架を負うてわれに従え」と申しました。

ですから神を愛し、人を愛すること、これを本気でやりますと、そのままを、イエスが歩いていることを感じましょう。

それと反対に自分の気まま、自分の計画、自分をたのしみます路上では、イエスにお目にかかることはできません。

わたしは、このさい、あなたが一つ、イエスのことばを実行するように、おすすめします。

そうすると、なかなか実行できない自分の限界と、これを実行してすすんでいる神としてのイエスの力とが、よくわかると思います。

コリント人への第一の手紙、一二章三節に「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』ということができない」と書いてあります。

わたしはこの文を終るにあたって、自分の欲望や小さな知識によってでなく、神の霊によって、あなたが「イエスは主である」との告白をすることのできますようにと、祈ります。

（次回は「こう答える、疑問のすべて」）

ゆずって、しかもその同じ新庄で、キリスト教の牧師として四〇年も伝道をつづけていられます。なおくわしく知りたいかたは、先生著の『念仏より基督へ』と、月刊誌『十字架』を見られるようおすすめします。

聖書の目的は右のとおりですが、ご参考までに、ある人の書いた文章を口語文にして、その要点をお目にかけましょう。

「この書物の蔵するところは、神のみ心、人の有様、すくいの道、罪人の運命、および信ずる者の幸福である。

その教理は聖く、その誡は固く、その歴史は真実で、その決定は不変である。賢くならんがために読みなさい、安全ならんがために信じなさい、聖くならんがために行ないなさい。これは君を導く光、君を養う糧また君を勇敢にする慰めを貯えている。

これは旅人の地図であり、順礼者のつえである。水先案内の羅針盤であり、戦士の剣であり、さらにキリスト者の憲章である。

ここにパラダイスは回復せられている、天は開かれている、地獄は明らかにせられている。その偉大な目的はキリスト、その計画はわれらの福祉、その終局は神の栄光である。

おだやかに、しばしば、また祈り深く読みなさい。これをして記憶をみたさしめ、心を支配せしめ、足を導かしめなさい。

これは富の鉱山であり、栄の楽園であり楽しみの河である。これは今の世において君に与えられている。審判の場合には開かれるのであろう。

これは最高の責任を求める。最高の努力にはむくいる、そしてその聖なる内容を軽んずる者を、すべて罰せずにはおかない」

3　信仰の現実――教会

キリスト・イエスを知るために、今一つたいせつなのは、教会です。なぜ教会がたいせつなのかと言えば

一、教会は二千年もの間、キリストを知った人々が、これを守ってきた団体だからです。

二、教会はキリストをかしらとし、その手足になって働いている団体だからです。目には見えないが、今も生きているイエス・キリストが、教会の人々の心を動かし、そのからだを通して、現実の家庭生活や社会生活に活動をつづけている団体だからです。

三、教会は礼拝をし、神のことばを書いてある聖書の教を伝道し、洗礼や聖餐の儀式を行ないながら、みんなが心を合わせて、ますますイエスがキリスト(救主)であることを体験してゆこうと努力している団体であるからです。

教会はふつうに神教会とか、聖霊教会とか聖書教会とか言わないで、キリスト教会とよんでいます。これは教会とキリストとの関係がいちばん密接であるからです。

基督教の結婚式に参列したかたは、新郎新婦のために、司式の牧師が聖書を朗読するのを聞かれたことがありましょう。その中に、花むこと花嫁に向かって、

「教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。夫たる者よ。キリストが教会を愛して、そのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい」(エペソ人への手紙五・二四)ということばがあります。

キリストと教会とは、相思相愛の模範、相互犠牲関係の手本として考えられていることが、おわかりとぞんじます。

ですから、この関係の中にいる人々を、よくごらんになって、土の器、でくのぼう、と思われるような人間が、キリストに愛せられて、いかに変化したかを、ごらんになってください。きっと教会の中に、生きているイエスに、あなたは直面されるのでしょうから。

セルをきて遊女なりしと誰か知る

これはわたしの友人の石島雉子郎さんの句です。石島さんは救世軍中佐でしたから、むかしの吉原の遊廓の婦人を多く救い出したでしょう。

ある日どこかの集会で、品のいい婦人が、教会の奉仕をしているのを見た、まことに恵まれた顔をしている、その人をよくみると自分が若い士官のころ、淪落の渕より救ったその人であった。すぎ去った日のいまわしい姿

になるとよいと思うのです。しかし、あなたの町にはそのような手段はもとめがたいと思いますので、県庁所在地に行って、神経科に相談なさるとよいでしょう。

さて神癒のことですが、わたしはこれを全然否定はいたしません、というのはそういう手段で、ある型の神経的な障害が治ることがあるからです。医学、ことに、精神身体医学や精神医学の分野で、いわゆる神癒とよばれる現象も解明されることが多々あると思いますが、医学が完全に（もしかりにそういうことがありうるとして）あらゆる病気の治癒をなしうる時が来るまでは、神癒というような現象は、絶えず存在しつづけると思います。次に神癒は、神との関わりにおいて、病気の治癒を考え、神の実在感を活々ともたらします。けれども神癒が固定したメッセージになると（困ったことにそうなりやすいのです）、かえってその宗教、教派の生命を枯渇させ、けっきょくは独善的な小教派になりおわります。というのは、それが神との交わりを考える一つの局限されたチャンネルにされてしまい、それで治癒に至らなかった人々が、結局は信仰が足りなかったからだ、という自責感を強く発展させ、そのため罪責を深くさせ、信仰においてなお成長させるべき他の人格面が、けっきょくは阻害されるからです。神癒も無意味ではありませんが、たいせつなことは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」とあるイエスのおことばのようにあることでありますから、神癒以外の、近代医学の治療の手も感謝して受けるようになることがたいせつです。それもまた「神癒」とよばるべきことではないでしょうか。

あなたの言語障害は、精神治療で、効果のある場合ではないかと思いますから、お受けになったらよいと考えます。決してむだではありません。

あなたの障害が、神から与えられた試練であるかどうかは、ただあなたの信仰によります。ただそれが刑罰的な意味ではなく、愛に基く試練であるということがそこになくてはならないと思います。そうでないと、抑圧が強くはたらき、罪責だけ強く発展して、不健全になりましょう。したがって言語の困難とも、なにかのかたちで関係や影響があるかもしれません。

ものを書くことは、たいへんよいことですし、それを通じて自己を表現し、他者と交わりができます。あなたは文学がお好きのようですし、書く意欲がおありなのですから、適当なグループに加われるとよいと思います。そのグループについてはごいっしょに考えたいと思います。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

人生相談室

どもりと対人恐怖

（回答者）気仙三一



【問】三四才の主婦です。主人は小さないなか町で理髪店を経営しており、わたしも店に出て手伝っています。主人はある教派に属して、平信徒伝道者として認められ、日曜ごとに集会を開きます。わたしは小さい時に父に死別し、母とともに祖父母の家で過ごしました。女学校を出てしばらく働いたのち、現在の主人と教会で知り合い結婚したわけです。わたしは主人の仕事や目的に協力しようと思うのですが、性来神経質で人と会うのが苦痛です。それにわたしの最大の悩みは子供の時からのどもりで、いまでも思うことも言えずつばが口の中にたまり、そのためことにていねいな口のたつ人の前に立つと、気おくれしてしまいます。集会のときなども、申しわけないと思いつつも、早く人が帰ってくれればよいと心の中で思うのです。わたしの最大の苦痛は対人関係で、先日もイライラしてかんしゃくを起こし、ものをこわしてしまいました。主人には支障なく言えるのですが、他人にはだめなのです。わたしは主人の仕事のじゃまにしかならない存在のように思えてなりません。これも神がわたしを錬達させるためにこのような苦しみを与えられるのでしょうか。ほんとうに苦しい日々です。先日も神癒の集会が県内の某所で行なわれることを広告で見ましたから、行ってみようかとも思いますが。

わたしは書くことが好きで、短歌なども習いました。なにかそういうキリスト者の文学の集いにでもはいろうかなどとも思ったりしています。そんな考えはどうでしょう。

【答】ずいぶん苦しい経験をされておられるようですね。こういう内面的な心の苦しみはなかなか他人に言えないものですし、ことに吃音で思うように自分の考えを表現できない場合は、ことにそれがひどいと思われます。

吃音はずいぶん多いものです。数日前の新聞によれば、全国で約一五〇万ほどあると推定されているそうです。どもりの矯正所にはいって、割合い簡単に治ってしまう例もありますが、なかには非常に困難な人々も多く、ことに成人になってからだとむずかしいようです。問題はこれにともなって劣等感につきまとわれることで、必要以上に、あるいは不自然にそれを意識し、周囲の人々が自分をどういうふうに見ているだろうかと考え、それが、ますますどもりをひどくします。ですから気のおけない相手だとスラスラ言えるのです。口の中に唾液のたまるというのも一つの特徴です。

あなたのような場合は、精神治療をお受け

思い至るのである。毎年莫大な援助を受けていながら、それらが基礎産業の生産力の育成に向けられず、軍事費と消費物資の購入に当てられて、日本その他の国々のマーケットの地位を深めさせたにすぎなかった。韓国が共産陣営に対する最前線基地としての意義しかないとすれば、このことは、アメリカにとって、さして重大な問題ではないかもしれぬ。しかし韓国にとっては、それらのドルはもっと民族的な方向に使われねばならないのだ。

朝鮮動乱は、東西の谷間で韓国の国土がじゅうりんされたというだけでなく、もっと大きな副産物を残した。それは、共産軍の残虐性に対する激しい憎悪と、理くつ抜きのアカぎらいの感情である。これは日本人の想像もつかないところである。

力を持たない弱小国が自分の力で歩んでゆくためには、A・A諸国のように、強力な中立政策による力のバランスの中で自決の道を歩んでゆく以外に方法はなかろう。

ところが韓国がこの道をとるには、あまりにも共産ぎらいが徹底しているのである。アメリカをけん制するためにソ連の力を借りるという操作が韓国にはできないのである。アメリカから自立しなければ民族の運命は決せられないし、しかもアメリカなしでは生きてゆけない。このジレンマの中で、ただアメリカのごきげん伺いをするだけでなく、「われわれはあなたの援助を必要としている。しかしその援助を、国力向上の方向に使わせてほしい」と、勇気をもって発言できる政治家、指導者がはたしてどれだけいたか。またそう言えたとしても、私利私欲の誘惑を退けて、強力にそれを実行しうる力をもったものがどれだけいたか。

今回のクーデターの実質的な首謀者である朴正熙少将は、その数少ない中のひとりである。彼は貧しい農民の出身であり、かつては共産主義者だったともいわれているが、この貧しい国を救うには、社会主義的統制経済の方法でしか解決できないことをいまも信じているだろうと思われる。その鋭敏な頭脳と冷徹な性格は、軍人として、私利私欲におどる政治家どもにがまんならず、国民として、アメリカ軍に隷属していることに耐えがたかったにちがいない。

彼はクーデター成功によって、既存の暗黒政治家を一掃し、マグルーダー国連軍司令官との取引きで、韓国軍の主権をかちとったのである。アメリカもついにこの既成事実を認めないわけにはゆかず、七月二九日、ラスク国務長官は、韓国の現政権を支持し、これを援助することを発表した。

民族自決の最大の前提である「みずからの力」を養う努力、民族的な悲願の清流が、とにもかくにもほとばしり出たのである。たとえ、それが非民主的な衣をまとってはいてもだ。

現に、韓国の民衆は、その衣に目をつぶろうとしているではないか。なぜなら、四月革命後の一年間の体験で、美しい衣がなんら自分たちに力を与えてくれなかったことを思いしらされたからである。

ただ、ここで心すべきは、クーデター指導者たちが、あくまでもその衣はみにくいものであることを忘れず、いずれは美しい衣に替えることを忘れてはならない。問題は山積していよう。経済的困窮をいかに解決するか。農漁民の生活安定、営業資金の調達、基礎産業の拡充育成、国土開発の問題など、また国家予算の五〇%を占める軍隊を、単なる消費体から、どのように生産体に切りかえてゆくか。

民衆は、いまはじっとこらえてこのゆくえを見守っている。それらがまたゆがめられて実現されないときは、民族自決も水の泡に消えてゆくときである。そのときには民衆はふたたび怒り立つであろう。民族自決の祈願は彼らの執念だからである。

（大阪ＹＭＣＡレイリーダー）

韓国クーデターをどうみる

——今後の課題——

金城正雄



昨年の四月革命以来、韓国の政治、社会は大きく民主化された。それが去る五月一六日の軍部クーデターによって、ふたたび反動的な独裁政治に逆もどりしたという、こういう見方は、クーデター後の議会の解散、政党社会団体の解体、および報道禁止令、検閲の強化など、言論、結社、集会の基本的人権を無視した非民主的措置をみると、当然なことかもしれない。五月二〇日に、国家再建最高会議の手で組織された新しい内閣は、閣僚一四人のすべてが軍人（内、金弘一外相は退役軍人）で占められているのをみると、韓国の将来を日本の五・一五事件当時になぞらえて、反動的軍事独裁国家の暗さを感じる向きも多いであろう。

ところが、クーデターを迎えた韓国人自身の表情はどうか。一部の既存の権力者は別として、一般民衆のそれは、外国での思惑と相違して案外明るいのである。四月革命の立役者であった学生たち、クーデター直前、南北統一会談を推進しようとして、このクーデターによって挫折されたその学生たちでさえもが、静かな望みを託してクーデターを支持している。

その実情が外国ではほとんど理解されていない。

近世の朝鮮の歴史は、民族みずからの意思とは別の力によって動かされ、泥塗られた痛ましい姿である。李朝末期の腐敗と外国干渉が朝鮮の独立を失わしめて以来、日本帝国主義による植民地支配、第二次大戦後、他から与えられた独立とその直後の南北の分裂、そして東西対立によって惹き起こされた朝鮮動乱——彼らは、自分たちの世界が、他の手によって引きまわされることに、あるときはうんざりし、あるときは民族自決の祈願を求めて止まぬ執念となって爆発する。

昨年の四月革命、今度のクーデター、その間の南北学生会議の動きなどいずれも、「おれたちはおれたちの足で歩みたいのだ」という民族自決の祈願の清流が、どこかにほとばしっているのである。アメリカによる占領時代の経験を持つといえ、自分の手で見事に祖国を復興せしめた日本人に、この民族の悲願がほんとうに理解されるであろうか。

第二次大戦後、独立回復の喜びにわいたのもつかのま、彼らは南北に分割されて東西対立のえじきにされ、米ソ両陣営の防衛線の役割を負わされる破目に陥ってしまったのである。

その後、アメリカは韓国になにを与えたのであろうか、素朴な民衆でさえ、いまにして思えば、最大の友邦であると信じてきたアメリカが、けっきょくは自国の利害に通ずるもの以外は、なにも与えてくれなかったことに

よって秩序づけられる人間関係であり、人が、主体存在としてでなく、まったく客体化されて結び合わされる人間関係のことであります。親のいいつけには無条件で従うことを要求され、夫の命令には文句なしに服従しなければならない、そういう人間関係のことであり、おカミのすることには、いっさい批判が許されない秩序のことであります。そこにあるのはみせかけの秩序であって、少し内側に立ち入ってみれば、まったく人間性などどこにも成り立っていなかったのです。そういう封建的人間関係から、真実に、人と人とが結び合う民主的な人間関係へと秩序を変革していくこと、わたくしは、そのことのほかに、新しい人間像を求める意味はないのだと思います。いいかえるなら、それはわたくしたちの社会の民主化ということにほかならないのです。

民主的人間像　民主主義の原理によって人と人とが新しい結合関係にはいること、そのこと以外にわたくしたちの社会の民主化ということはありえないわけですが、これは、言うはやすく、行なうは難しであって、民主主義という言葉は、小学校の児童でも知らない者はないくらいゆきわたっているのに、民主的人間像はどこにもつくり出されていないというのが、正直のところ、わたくしたちの社会の実情であるといえましょう。民主主義という言葉が、肉となって、わたくしたちの社会に宿っていないのです。民主主義の受身ということが、日本の社会の民主化ということなのかもしれません。

　わたくしたちが、民主主義をあげつらう人にとどまらないで、民主主義を生きる人になるということが先決問題です。それが新しい実存ということの、わたくしたちの意味でなければなりません。そうして民主主義を生きるということの、第一の条件は、なによりもまず、自己を、かけがえのない、尊厳な人格として自覚する、そういう主体的存在者になるということでありましょう。憲法がどのように「個人の尊厳」の原則を強調していても、わたくしたちひとりひとりが、自己を真に「尊厳な個人」として自覚できないなら、まったく空文にもひとしいのです。戦後の民主主義の教育のなかで、はたして、わたくしたちの中にどれほど、そういう主体的存在者としての自覚がうちたてられてきたでしょうか。たいへん疑問だと思います。

　人は自らのうちに強れつな人格存在としての目ざめを持たないかぎり、自らを尊厳な個性として自覚することはできません。人に主体性を与えるものは、人を人たらしめる人格性だからです。この「人格」という言葉くらい、わたくしたちの社会で、空疎なひびきを持つものはないのです。まるで空手形のように空しいのです。「人間のより高き本性とより高き使命を語るものは、正に彼のうちなる人格の意識にほかならない。人格が未だ充分に発現していない場合もあろう。打ちひしがれている場合もあろう、疫病のために打ち倒されている時もあろう。ただ潜在性ないしは可能性として存在する場合もあろう。しかしいずれにせよ、人間が人格でないならば、彼は世界における他の事物と変りないものであろうし、何らとりたてて変ったものがあるわけではない」（ニコライ・ベルジャーエフ）、たとえばこういう文章を読んでも、何だか壁に画かれた餅のようで、ぴんとこないというのが実情なのかもしれません。民主主義が受肉するということは、こういう人格の意識が重みをもって共感される

生きる意味について・第九章

新しい実存

佐古純一郎



新人ということ　わたくしたちの戦後社会において、ここ十数年、あらゆる領域で「新人」の出現が待望されてまいりました。しかしいったい新人がどこに出現したでしょうか。たとえば文学の場所においても、ずいぶんとたくさんの人々が、「新人出ず」というかけごえのもとに世の中に紹介されたわけですが、それらの「新人」とは、要するに、ニュー・フェースすなわち新顔にすぎなかったのではありませんか。芸能界ではつぎからつぎに新顔がたちあらわれるわけですが、それは流行をつくっては忘れ去られていくのです。新人が待望されながら、ついに新人は生まれなかった、といっても過言ではないようです。いったい新人とはどのような人間像のことでしょうか。

　わたくしたちの社会は、たしかに、新しい人間像をもとめています。ということは、旧来の人間像が、もはや古いものとして、通用しなくなったということでもありましょう。ですけれど、その場合わたくしたちの社会が新しい人間像を求めている、ということはどういうことでありましょうか。わたくしはやはり、近代的な意味での「ニンゲンゾウ」としてそれを考えていくところからは問題の正しい把握は生まれてこないと思うのです。わたくし自身はそれを、新しいジンカンゾウ《人間像》として考えていきたいのです。

　それではもはや通用しなくなった古い人間像（ジンカンゾウ）とはなんでありますか。それは封建的人間像（ジンカンゾウ）ということができましょう。それは権力に

したちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

そうです。愛はここにあるのです。この愛のなかで、自己を見出すことが、わたくしたちが「新しい人」として生れるということであります。それが、新人ということです。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」とパウロがいうのも、まったくそのことにほかなりません。その愛に抱かれるとき、わたくしたちは、自己の存在を人格的存在として、深く自覚することができるのです。

連帯者　自己を人格存在として深く自覚するとき、またわたくしたちは、他者をも等しく人格存在として認知することができるのです。それが、人は本質的に平等であるということの意味なのです。そのような条件のうちでのみ、はじめて、人格と人格との間としての人間性(ジンカンセイ)が成り立つのであって、わたくしたちはそういう人間性(ジンカンセイ)を持って生きる人のことを連帯者とよぶのです。カール・バルトが Mit-mensch《共同人間》というのは、まったくそのことでありましょう。民主主義を生きる人は、なによりもまず、そういう連帯者でなければなりません。

本当の人は、決して孤独な人ではない。それは人が単なる被造物以上のものだからである。つまり、イエス・キリストの現実から、人は神によって契約相手として欲せられており、そしてただ、この契約関係においてのみ人として存在しているのだし、存在が可能なのだという認識を得ることができるからである。人は常に関係における存在である。人は、ただ彼のためにそこにいる他の者、すなわち神と隣人とに向かい合ってのみ存在する。隣人が存在するということは、人の決定的な本質規定である。

H・ゴルヴィツァーはこのようにバルトの思想を要約しています。（鈴木正久氏訳『K・バルト教会教義学』）人は隣人が存在することによってのみ人間(ジンカン)になるのです。いいかえるなら、他者を持たないところでの主体的存在とは、それ自体がまったく無意味なのであります。他者との人間性(ジンカンセイ)においてのみ、はじめて人は「自己」でありうるのです。

わたくしたちは、こういう観点に立つとき、キェルケゴールのいわゆる「単独者」に、きわめて大切な意味がふくまれていることを十分に認めながら、なお現代的観点から、それを批判しなければならないのです。なぜなら、キェルケゴールの単独者は、人の主体性をとりもどすという点では、近代思想史においてきわめて大切な役割を果したけれども、そこから他者との生の連帯ということが、力強く出て来なかったことを十分に批判しなければならないのである。

自己を人格的存在として主体的に自覚する人は、同時にまた他者をも主体的存在として認識するでありましょう。そこから、相互に、主体的に、という人間性(ジンカンセイ)が生れてくるでありましょう。そのように相互に主体的な人間性(ジンカンセイ)において生きようとする人のことを、連帯者

まで、わたくしたちの思想になるということです。そうでないと、「個人の尊厳」とか「両性の本質平等」というような憲法の言葉が、他人ごとのようにしかひびいてこないのです。

人格的自己　それなら、わたくしたちはどこで、ほんとうに自己を人格的存在として自覚することができるのでしょうか。それは人格主義に関する書物をできるだけ多く読むことだけで可能でしょうか。そうではありません。人はただ、自らを「人格」として観念的に知るだけでは人格存在としての自覚を持ちうるものではありません。このわたくしを、徹底的に「人格」として愛してくれる、そういう愛にふれることによってのみ、わたくしは自らを「人格」として知ることができるのです。愛の力が人に人格としての目ざめをよび起してくれるのです。もういちど、あの放蕩息子のたとえに帰ってみましょう。

> まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走りより、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った。「父よわたしは天に対しても、あなたに向っても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません。」しかし父は僕たちに言いつけた、「さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから」

放蕩三昧のはてに、豚のようにしかとりあつかってくれないみじめな存在になり下ってしまった放蕩息子が、本心に立ちかえって、父のもとに帰ろうとしたとき、彼がまだ「遠く離れていたのに」、父は彼の姿をみとめ、走り寄ってきて、その首をだいて接吻してくれたのです。わけまえを欲望充足のためにつかいはたし、もはや一文のねうちもないような人になってしまった息子を、接吻をもって迎えてくれるものは何ですか。愛、そうです、父の愛です。「まだ遠く離れていた」のに彼の姿を認めたということは何を意味しますか。息子が自ら家を去って遠くに行ってしまった日から、じつは、父はその息子をさがしていたということです。朝も夕も、父の心をいためていたのは、「息子よ、お前は、どこにいるのか」と失われた小羊をさがしもとめる羊飼いのように放蕩息子の行方を求める祈りでした。わたくしたちは、このことを深く考えなければなりません。自分の力だけでやってみせると力んで空元気を出しているかもしれないわたくしたちを、昨日も今日も、「どこにいるのか」とさがしもとめてくださっている愛があるということに、パッと気がつかねばなりません。その愛は、わたくしたちを「人格」としてつくってくれた愛であり、それゆえに、わたくしたちを徹底的に「人格」として愛してくれる愛なのです。わたくしのほうには、もう何の愛される資格もないのに、しかもなお、徹底的に「人格」としてわたくしたちを愛してくれる愛が、そこにあります。まことの愛とは、そのことであります。

> 神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによってわた

労働の喜び　その場合、わたくしが唯一のめやすとしたいことは、労働の喜びということです。自分の従事する勤労に喜びを感じているかどうかが、その人の健全さのバロメーターであるのだし、その社会に生きる人々が勤労に喜びを見出しているかどうかが、その社会の健全さの度あいなのです。ところが、たしかにいま、人々は必ずしも働くことに喜びを感じていません。生きるためにしかたなく働いているといった状況ではありませんか。これはいったいどういうことなのでしょうか。わたくしは、そのことに資本主義に対する大きな疑惑を感じるのです。資本主義の社会では、もはや、人人がほんとうに労働に喜びを見出すということが不可能なのではないか。しかし、それなら社会主義社会への変革ということにおいて、それはまったく解決しうる問題なのでしょうか。技術の時代ということがもたらす人間の非人間化というような問題は社会主義社会においてもいぜんとしてのこってゆくのではないでしょうか。そういうことはやはり真剣に考えてみなければならない問題でありましょう。ラートブルフがつぎのようにいっています。

> 昔の手工業者の理想、すなわち全作品を全人によってという理想は、分業と機械、分業と技術というものによって、もはやかえらぬ夢と消えた。分割され、したがってそのために魂を失った労働から新しいかたちのよろこびが得られるなどということが考えられるだろうか。それとも労働というものは、睡眠が生からさし引かるべきと同じように、生のただなかにおける一片の死と看做さるべきものだろうか、また文化のよろこびや文化というものは、これを得んがためにできるだけ労働を短縮することによって、その外部にこれを求める以外に残された道はないのだろうか。もしかりにそうなのだとしたら、——プロレタリアの生活には本当に生活らしい生活というものはなんと驚くほどわずかしか残らないことであろう。多くの人々は社会関係を改革すれば労働のよろこびはまた帰ってくるだろうと期待している。この考えによると労働が、もはや他人の利得のための労働でなく、共同体のための労働であることになれば、すでにそれだけで新しいよろこびがともなってくるということになる。なるほど共同経済のもとでは労働のよろこびに対する一つの障害はなくなるであろうが、しかし、労働のよろこびをふたたびたて直そうとするには共同経済というものも十分ではなかろう。労働のよろこびという問題は社会主義社会のもとでも資本主義社会におけると同じくやはりまことに難しいのである。

労働のよろこびがとりもどせる社会とは、どういう社会なのでありましょうか。新しい実存は、労働をどのように考え、どのように勤労すべきなのでありましょうか。そういう問題は連帯社会論の大きなテーマになることでありましょう。現代に生きる意味をたずねてきて、連帯社会の創造と形成という理念を自分の積極的な方向づけとしてはっきり自覚することができたことは、わたくしの大きな喜びであります。

（次回のテーマは**『二つの人生』**）

とよぶなら、民主主義を生きる人は、連帯的人間でなければなりません。民主主義を生きる人が、社会に出てゆくモメントはそこから開かれてくるでありましょう。主体的自己が他者との間に、連帯性を持ちつつ、真実なる人間性（ジンカンセイ）を形成していくということが、わたくしたちが社会をつくるということにほかならないからであります。そういう民主主義の社会のことを、わたくしは、連帯社会とよぶのであります。力強い連帯社会にまで結実しないなら、民主主義はわたくしたちの社会に受肉したといえないでありましょう。

社会の問題　わたくしたちはこのような連帯者の立場から社会の問題に真剣に取り組まなければなりません。たとえば資本主義の問題にしても、それをマルクス・レーニン主義の立場から唯物弁証法にもとずく歴史観によって批判するだけが唯一の批判ではないのです。わたくしたちが新しい人間性（ジンカンセイ）を創造していくうえに、もし資本主義という機構が致命的な障害であるのなら、やはりわたくしたちは資本主義社会に対して変革を迫っていかなければなりません。あるいはまた、資本主義の機構のもとでは、わたくしのいわゆる連帯社会の実現がどうしても困難でありますなら、やはりわたくしたちは資本主義を変革しなければなりません。そのためには、マルクス・レーニン主義の理論からではなく、やはり、資本主義に対して冷静な科学的分析と批判を試みる必要がありましょう。わたくしはマルクス・レーニン主義の理論を自分の社会観の理論とする者ではありませんが、連帯社会の実現のために、今日そこに自分がおかれている資本主義社会の分析に、いまから力を入れようと思います。もちろん、その過程で、どうしてもマルクス・レーニン主義との対決を迫られてくるでしょうし、また、ただ頭からそれを排除するのでなく、社会科学として学ぶべき点は十分に学ばなければならないと思います。この貧しい思索の遂行から、わたくしは、いまはじめて「社会」の問題に真剣にとり組んでみなければならない必然性に到達したことを感謝せずにいられません。

もちろん、その場合、連帯社会という理念がわたくしの社会観の根底をつらぬくことでしょう。そうして、たとえ社会の変革が問題になるにいたしましても、それを暴力に訴えて実践するという方式は、キリスト者としてのわたくしには許されておりません。どこまでも、民主主義の原則をいつだつしない方式が要請されなければなりません。そのことだけははっきりしていることなのです。そうしてなによりもまず、とくにわたくしたちの社会では、社会倫理が確立されなければなりません。わたくしたちの倫理を基礎づけてきたものは家の倫理であったのではないでしょうか。公衆道徳といっても、街をきれいにいたしましょう、とか、右側を歩きましょう、といった程度のことで、社会倫理が力強く打ち立てられるということはついになかったのです。もちろん、社会倫理があって連帯社会が形成されるものではなく、むしろ連帯社会の形成の中から社会倫理が生まれてくるのかもしれません。しかし、規範倫理としての社会倫理の確立ということに対しては、わたくしたちはつねにそれを探求しなければならないのではありませんか。そのことなくして、連帯社会の理念は空しいといえましょう。連帯社会論は科学的考察と同時に倫理的考察からも進められなければなりません。そういう課題をになうものとして、わたくしは、連帯社会論の探求に一歩を進めたいと願ってやみません。

すると彼女の顔に微笑がうかんだ。しかしそれはどこか不穏な感じのする微笑だった。私は、自分の迂濶さでも笑われた気がして急いでたずねた。
「ちがうんですか？」
すると彼女はやっと口を利いたのだった。
「杉並にかこってある女のところへ行っているのよ。五十にもなっていて、それくらいの察しがつかないの？　出張といわれてまともに信じているなんて、案外、抜けてるのね」
私は、少しばかり不服を感じた。まことに順子のいう通りだと思いながらも何という御挨拶だろうという気もしたのだ。で、私は、頑強に繰り返した。
「しかし子供さんを引取るなんて、やはりよくできた人であることも事実ですよ」
私は、あわてて脱げかけた右足のスリッパへ足先をふかく入れた。まるで靴でもはいているかのように床へスリッパをすりつけていたからだ。あのねずみの子を踏みつけて腸を露出させてしまったときのいやな感じが、私の足のうらによみがえって来ていたからだ。むろん私が、あの三つの幼女を思いうかべてしまったせいなのだ。その幼女のそれは全く忘れられない顔だった。泣くわよ、といいながら私をためすように見つめていたあの顔は、無邪気な残酷さをあらわしていた。それは、やさしい自然が、ほんとの顔をむき出しにして見せたときと同じような容赦のなささえ感じさせたのである。私は心に呟いた。
『あの三つの幼女が、あんなふうなら、一つ年上の幼稚園へやっているといっていた幼女は、もっと空恐しい子供なのかも知れない。何しろ電車のなかで、しゃがんで平気でおしっこしていたというからな。その二人を引取って育てるなんて、決して人間わざではないとまでいわないが、立派だとぐらいいってもいいではないか』
そのとき順子の怒りをふくんだ声が聞えて来たのだ。
「あんた、聞いてるの？　わたしのいってることを！」
私は、我にかえってあわてて答えた。
「むろんちゃんと聞いていますよ」
「ほんとにあんたは、もうおじいさんね。もうモウロクの気味があるわよ」
だが私は、彼女からおじいさんと呼ばれるたびにひどくこたえるのだ。しかもその自分の事実が、さらに私を打ちのめして来るのだ。
「だからさ、ほんとに大儀なおじいさんね」と彼女は私の心も知らないで実際大儀そうにいった。「女をかこうようなわるいことを自分の女房にしているから、女房にやさしいんだといっているのよ。女房がどんな相談をもちかけても、自分の秘密にふれられないかぎりは、ああ、いいよ、ああ、いいよ、とみんな許すんだ、あの横川という男は。よくできた人もあったもんじゃないわ」
「でも、あの二人の子供さんは、あなたは放ったらかして育てていたんですか？」
「何をいってんのよ。わたしのあの子供たちには、自分というものを持たせるようにしただけなのよ。わたしは、上べをかざるなんていうことは大きらいなんだからね」
「でも」と私はいいよどみながらもいった、「横川のおくさんは困ってるようでしたよ」

夜警番の日記(9)



椎名麟三

9 神と富と

私は、順子への話を途切らせた。だが、順子の隣りのベッドの三十女は、私たちの話には全く無関心のようだった。彼女は、仰向けに寝たまま胸の上で、毛糸の編棒を手馴れた様子でさかんに動かしつづけていた。どうやら、昨日生れた赤ん坊のための白いジャケツを編んでいるようであったが、これから夏に向うというのに冬の準備は、私にはあまり手廻しがよすぎるような気がした。一体、赤ん坊が、冬になるころにはどれぐらいの大きさに成長するのか、女にはわかるのだろうかと思われたのである。しかし女は、まるですべてが既定の事実であるように、何の疑いもなく泰然と編棒だけをしきりに動かしているのである。恐らくもう一人や二人の子供のある経産婦なのかも知れなかったが、たとえ遠いものではないにしても、赤ん坊の未来まで計り切ってしまっているようなその女の自信ありげな態度に、私は圧倒された思いだった。私は急に元気を失った感じで、横川の妻が、自分の一人息子の嫁だった順子をどんなに罵倒していたかを話しつづけた。だが、順子は、身体を横にしたまま、やはり身体はおろか表情一つ動かさないのであった。

「つまり自分は子供は返してもいいと思っているが、しかし横浜へ出張している主人と相談しないと決定的なことはいえないといっているんですよ」と私はいった。

だが、順子は、やはりだまっていた。私は、仕方なく言葉をつづけた。

「しかし横川さんの御主人は、よくできた人のようですね」

しく動かしつづけていた。私は順子へいった。
「そんなことしたって、何の役にも立たないと思うがなあ」
「それじゃ、あんた、何のために生きてるの？」
「死ぬためですよ」と私は嬉しそうに答えた。
むろんそのことが嬉しかったのではなく、彼女がはじめて私の心のなかへ踏み込んで来てくれた気がしたからだ。だが、彼女は、つまらなそうにいったのだった。
「キリストを宣伝するためにというかと思ったけど、案外正直なのね」
「むろんわたしは、正直な人間なのですよ」
すると彼女は疲れたようにいった。
「もう帰っていいわ。どうせあんたになんかわたしのいうこと、通ずるわけはないんだから」
そのまま順子は眼をとじてしまった。私は、順子から突放されでもしたように、椅子から立ち上りはしたが、しかし何となくうろうろしていたのである。たしかに順子は、かわって来ていたが、それは母性愛へではなくて、私をおびやかすものへであることを感ぜずにはいられなかったからなのだ。その私は、しばらく隣りの三十女へ見とれていた。彼女は、やはり泰然とした様子で毛糸の編棒を機械のように動かしつづけていたからだった。そして私は、その三十女に羨望に似たものを感ぜずにはいられなかったのであった。
私は、都電の釣革に揺られながら、自分には確固とした現実的な目的というものは何一つないことを考えたということをあえていわなければならない。そのときどきの現実的な目的はあるにしてもだ。だから順子が、私の生きる現実的な目的になるはずはなかったのだ。そして私は、この世のすべての現実的な目的に対してもこのような態度をとっている。私は、工場の労働組合員でもあり、いま組合は夏期手当の要求を会社側へ出そうとしている。それは、六月はじめの組合総会で正式に決議されるはずだし、去年と同じように会社側がその要求をすぐそのままのむとは考えられない。その場合は、また組合はストライキに入るだろうが、私は、その現実的な目的に対しても自分は組合員として忠実であるだろうということを知っている。しかし私にとっては、その目的といえども、私の存在の全部をのみ込むことはできないのである。私は、キリスト者であるからだ。この私にとって、現実的な目的といえば、全くときどきのそれがあるにすぎないのである。
だが、私は、順子の顔を幸福でにこにこさせてやりたかった。彼女へ深入りしているのではないかという反省は、この五十男の私には始終起っていたのだが、しかし私の信仰の全部を彼女へ賭けてしまっているという事実に別に罪も恥も感じてはいなかった。全く人一人導くことのできない信仰なんて、私には生きていないもののように思われたのである。ただ、この私にとって祈ることのできるのは、神がいつもこの私を笑っていて下さることなのだ。そして神がこの私を笑っていて下さるかぎり、順子の隣りのベッドにいた三十女のような確固とした自信を自分自身にもつことができるはずなのだ。
私が、わざわざこんなことをいわなければならないのは、自分のアパートへついたとき、全く恥しいことだが、この強固でなければならない自信が、他愛もなくくずれ落ちるのを味わなければならな

「知らなかったからなのよ」と彼女は皮肉な微笑をうかべた、「でも、いざあの子供たちを手ばなす段になると、きっとうんとはいわないでしょうよ。あの子供たちは、あのおかあさんの旦那に対する弱味になっているんじゃなくて、強味になっているんだからね」

「強味？」

「そうよ。一人は自転車屋の親戚へやるかも知れないが、一人は自分たちの養子にするにきまっているからね。きっともうその手続きをすませてしまっているかも知れないわ。子供が、おかあさんたち、もうおかあさんでもないけど、あの人たちには手のやける子供であればあるほど、女へは金をつぎ込むのは平気でも、死んだ主人には貸す金なんか一銭もなかった横川を責めることができるからなのよ。死んだ主人はとにかく、孫がこんなふうになったのは、あんたのせいだといえるじゃないの。子供を道具にしているのは、わたしでなくておかあさんの方なのよ。孫の子供を横川の罪を責め立てる道具にしているだけなのよ」

　私は、主人は神様みたいな人ですといった横川の妻のいい分を思いうかべて混乱しながらいった。

「しかしもしそうならそんなこと、横川さんにはわかっていたでしょう。とにかく夫婦なんですからね。しかし事実子供さんが引取られているのですから、どんな事情があるにしろ、横川さんが子供さんを引取ることを承諾したことはうたがいのないことでしょう」

「頭ののろい人ね」と彼女ははがゆそうにいった、「自分がわるいことしてるもんだから、女房にやさしいんだといまいったでしょ。ただ、ついやさしすぎてしまったというだけじゃないの。おかあさんが、孫をどうしたもんだろうというぐらいのことをいったとき、自分にとってはいやなことだから、逆にどうだ、いっそ引取ったらというような余計なやさしさを見せてしまったというだけなのよ。あんな横川なんて男、いい人も何もあったもんじゃないわ」

　私は、横川の妻と順子との二つの真実の証言にますます混乱はしていたが、わずかに彼女に対する疑問を口にすることはできたのである。私は、彼女にこうたずねていたのだ。

「それはそうかも知れないとしても、何故笠城さんは、一度手ばなした子供を、今になってまた引取ろうという気になったんですか」

「わからないわね。あんたという人は。あんたが余計なことをしてわたしを死なせなかったからじゃないの」

「それはわかりますが」と私は途方に暮れた気持になりながらいった、「横川のおくさんは、子供を引取ろうとするのは、自分たちに復讐するためだといっていたからですよ」

「そうよ！」と彼女は皮肉な顔になって答えた、「あのおかあさんたちだけじゃない、あんたの神さんがこしらえて下さったありがたいこの世のなかのでたらめに、これから腹を立ててやるつもりなのよ。それをわたしの生甲斐にしてやるつもりなのよ」

　私は、急いで抗弁した。

「世のなかのでたらめは、神さんのせいではなくて人間のせいなんですよ」

「お説教はたくさん。わたしは退院したら、バーなんかやめて、売春でもやるつもりなのよ。酔っぱらいの相手なんかしているよりその方がいっそさばさばしてるわ」

　私は、隣りのベッドの三十女を見た。彼女は、相変らず私たちなんかと関係がないかのように、自信ありげに毛糸の編棒を目まぐる

の知らなかった別の噂を根拠づけたものとして受取られたからだということがわかった。しかもその日の午後、その三原という婦人の家でひらかれた婦人会で、ちゃんとした女ではなく、見栄えのしない五十男の私が、問題になったようなのである。その前日の日曜に、順子からの電話を聞いた牧師夫人が、その会へ参加していたということもあったかも知れない。だが、私は、教会においては、いてもいなくてもわからないような平凡な男であり、ある日から教会へ行かなくなったとしても、誰も気にとめる人もいないような問題とならない存在なのである。むろんそれは私の性来の迂愚から来ていることはいなめない。だが、このような私が、この教会へ何年も通って来ていて、折角はじめて問題になったというのに、しかも事もあろうに婦人会でとりあげられたというのに、晴れがましく思えないどころか、笑うことさえできないのが、私にとって何としても残念であった。何故なら、そのはがきは、五十にもなっていて何ということです、と私をきめつけていたからだった。しかもそのはがきに速達のスタンプが、仰々しい赤さで、しかも郵便局員がどういうわけか、一つでいいところを、二つも三つも乱暴にはがきの上縁に押しているので、いっそうその速達の印の赤さが私の胸にしみるような仕掛けになっていたのだった。つまり文面は、さらに何のために教会へ来ているのかと私を糾弾して、こうつづけられていたからであった。

「イエス様から、明日のことを思いわずらうなとまでいわれているのに、金の亡者にでもなったように、お金にとらわれているなんてキリスト者として理解できません。しかもそのことは若い女に子供をはらませた上、その子をおろす手術までさせたという噂を、事実とされても仕方がないじゃありませんか。婦人会のある方は、今日偶然、お友達の出産のお祝いに行って、その女の方のベッドの傍に立っている斎藤さんの姿を見かけたとさえいっているんですよ。重い流産だったそうですが、しかしそれはお医者さんの話では、子供をおろそうとして得態の知れない薬をのんだからだというじゃありませんか。牧師さんもすでにこのことはご存知なのですから、一度お会いになってざんげをなさることを老婆心からおすすめいたします。神の平安があなたにありますように」

私は、水道の水を飲んだ。ショックを受けた興奮をしずめることができなかったからだった。おそらくそのときの私の顔も、七面鳥そこのけに、赤くなったり青くなったりしていたにちがいないのだ。そして私は、現実に自分の手のぶるぶるふるえているのを自分の眼で見なければならなかったのである。机の抽出しをあけようとしたときにだ。しかし私は、どうしてか、この手のふるえを愛してやらなければならないと思ったのであった。

私は、その抽出しからノートの日記帳をとり出した。むろん日記を書くためではなかった。第一、こんな興奮状態では日記なんか書けたものではなかった。その日記帳の間に郵便局の貯金通帳がはさんであったからである。私は、毎月少しずつ貯金をはじめてから、それでももう七年になるが、しかしその額は大したものではなく、やっと十万円を越えたというぐらいだった。だが、それも先月までの話で、通帳を見ると、五回にわたって八万円の金が引き出されていた。むろん五回の最後の二万円は、今朝引き出したもので、順子の手術料や諸種の手当料や十日分の入院費の先払いに当てたものなのだ。正確にいえば、病院から二万一千八百円が請求されていたか

かったからである。しかもたった一通の速達のはがきによってなのだ。それは三原という教会の婦人会の方からであったが、最近老眼気味の私には読みづらいほどの小さな字でびっしりそのはがきを埋めてあったのである。その三原という婦人も、もう五十になるはずなのだが、彼女の健康さ、少なくとも眼における健康さに驚嘆せずにはいられなかった。だが、読んで行くうちに、私は、驚嘆ばかりしていられなくなっただけでなく、まるで平手でふい打ちをくわされたような意外さに呆然としてしまったのである。たとえ私を呆然とさせるものがこの世に多すぎるとしても、しかしそのはがきは、いささか呆然とさせすぎたようだったのだ。というのは、その文面は、私に対する糾弾の文字で埋っていたからだった。順子のために金に追いつめられはじめていた私が、うっかり三原という婦人に、ついそのことを洩らしてしまったのが原因だったのである。それは順子から教会へ電話のあった昨日のことだった。その教会からの帰り道、駅まで一緒だった彼女は、マタイ伝の第六章をテキストにした牧師の説教に感激したように、たしかに神からすべては備えられているのだと興奮したように私へ話しかけていたのである。明日のことを思いわずらうということは罪だとまで彼女は断言した。だが私は、ただ生返事をしながら相槌をうっていただけなのであった。それに気付いた彼女は、不審そうに私へたずねたのだった。

「どこかおわるいんですか？」

　あるいは、その前日、入院した順子のことやら、今からたずねて行かなければならない横川の家との交渉のことを考えて、うかない顔をしていたのかも知れないが、実際、顔色もよくなかったのかも知れなかった。その私は、金さえあれば、彼女を九十九パーセントまでは救うことができるのだがと考えていたのである。たとえ残りの一パーセントが、彼女の救いについて決定的なものであるにしてもだ。だから私は、その婦人の問いにうかうかとこう答えてしまっていたのだった。

「金がほしい、金がほんとにほしいですね。日頃からもっと心がけて、もっと金でもためておけばよかったとそう思っているんですよ」

　婦人は、自分の折角の感激を侮辱されでもしたようにむっとした顔になった。それに気付いた私は、その自分を弁解しようとしてかえってつまらないことを口走っていたのであった。

「金さえあれば、大抵の人間の苦しみやなやみなんか救えますからね」

　事態は、最悪のものとなったことが、さすがの私にも理解された。その教会へは二十年も来ているといういわば私の大先輩にあたるその婦人は、私へ返事もしてくれなかったのであった。

「つまり私は、信仰がまだあさいんですな」と私は情ない声で弁解を重ねた。

　だが、事態の回収はもう不可能だった。彼女は、ちょっと用事がありますからといって私からはなれて行ってしまったからであった。それはたしかに私に気まずい思いをさせたが、しかしそれだけだった。

『こわい人だな』

　とそう思っただけだったのである。全く、私は、金がほしかったのだ。しかし私にそう思うことのできたのは、神がこのような私を笑って下さるだろうということが信じられるからなのだ。だが、その婦人からの速達を見ると、彼女が腹を立てたのは、私の言葉が私

読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

クルセード争いに失望

「クルセード反対におそろしく熱心な人人」のことを、ジャーナリズムから伝え聞くごとに暗い気持ちにされていましたが、またまた『月刊キリスト』の七月号の座談会を読んでうんざりしました。クルセードを反対するに、いろいろな理由はあるにせよ、けっきょく、安保反対の立場を絶対視する政治的立場からきていることと思います。東京には宗教よりも政治を第一とするかしこい先生がたが多すぎるようです。同じ伝道を使命とする身でありながら、自分たちと意見や立場が違う者には、とことん妨害する。近代精神の破局的な面が教界にまではいってきたことに、なにかゾッとするようなものを感じます。そういう精神から世界平和や日本の中立主義が生まれるというならば、実に奇妙だというほかはありません。東京のクルセード争いに、われわれ関西の多くのクリスチャンは失望してしまいました。けれども、またわたしたちは大阪のクルセードで赤心ささげて奉仕した多くのカウンセラーたちを実際に見ており、そういう人たちが東京にもまた、大阪以上に大ぜいあったことが容易に想像できます。教界の光は、そういうところからさしてくるのではないでしょうか。

（加古川市・芝本善夫）

まじめな考え方を

毎号楽しく拝見しております。

しかし七月号の貴誌座談会〝日本の伝道をどうする〟の記事は、全くまじめな読者を面くらわせるものではないでしょうか。

確かに、ぼくは、東京クルセードの内容を知りませんし、今はそのことについてなんとも申しあげませんけれど、教文館社長の武藤氏の発言は決して愉快ではすまされないと思います。クルセード賛成の人々が読んでもおそらくにがにがしく思うでしょう。まるで漫才ではありませんか。もっと正確な理解をもった人を登場させるべきだと思います。あんな甘い考えでクルセードをはじめ日本伝道を考えておられるなら、深く反省していただきたいと思います。また編集部のほうでも、もっと検討して印刷すべきであると思う。大学生と小学生の話し合いではないはずなのです。問題のいかんを問わず、日本のキリスト教界には、教会のみにしか通用しない、甘い考えが多すぎると思うのです。個人攻撃でなく、われわれひとりひとりが、まじめな考えを日々行なうよう反省すべきであると思う。でないと教会人は、社会の中で意見が述べられなくなる危険性があると思う。こんなことはだんじてゆるされぬことだと思います。

（布施市・松崎一・神学生・20才）

しっくりしない座談会

先月は『月刊キリスト』を見本としてわたしの友だち二人にお送りくださいましてその配慮に心より感謝しペンをとりました。

わたしは貴誌を昨年十月より愛読させていただいております。そして、その内容の充実さに満足し、さっそく二人の友を記しました。

また、この本はよき伝道用にもなりました。二人の友は主キリスト、そして神について知ろうとしていたときでありましたから、貴誌における「キリスト教のいろは」島村先生のに理解と満足が得られておるようです。その内容は先生の人となりがよく表わされており、また読むほうの心をよくとらえて書かれております。感謝します。この雑誌を通して、聖書のことばがいよいよ近くなり、主を告白できるまでになってくれるよう祈っています。

さて七月号の貴誌「日本の伝道について の座談会」なんとなくしっくりしない感じがしました。両極面に位する二人の意見の相違は、現代の日本の伝道の困難さをよく物語っていると思いました。たいせつな宣教二世紀にあって、われわれは主による一致をもって前進また前進していきたいと思います。

最後に貴誌の発展がいよいよあり、日本の伝道のためにお働きくださるよう祈りつつ。

（袋井市・鈴木千代子・24才）

『社会を見る目』から

この三カ月ばかりいくつかの炭坑の事故があり、いたましい死の表情が新聞をおおっていた。しかしこれをただみすごしてしまうほど事故はかさなりすぎた。

池田首相が天皇の〈不敬罪〉問題にかかわり、左翼だけの暴力追放に心をついやしてるうちに、世間一般では、次々に事故はかさなり、とりかえすすべもない多くの労働者を失った。クリスチャンとしての思いが激しくおこり、このままでどうなってゆくのかという、案じても解決のしようのないきもちが大きくゆれうごいてくるのだ。

クリスチャンの政治的負い目ということについては渡辺信夫氏の『新安保成立一年』にわかりやすく、はっきりあらわされていたが、負い目は新安保後のこれからが一段と責めてくるものなのであろう。クリスチャンとしての今後の政治への目が十字架のしるしのもとで育ってゆき、〈ハチマキ〉〈赤ハタ〉なしのデモ抗議で勝利したいものである。またこのための話しあいということも、このクリスチャン個人の間ではじまってゆくべきなのだ。

（山口県・都濃郡・国兼浩子・商業・24才）

らだ。順子が健康保険に入っていないということが何よりも私の痛手だった。もちろん痛手だといっても、そのために死のうなどとは私が考えるはずはなかったにしてもだ。

しかし残額を計算していた私は、さすがに心細かった。二万三千円ほどしか残っていなかったからである。入院が二十日以上にのびれば、退院後の彼女の小づかいぐらいはやるとしても、このくらいの金は吹っとんでしまうことは眼に見えていた。

『これが限度じゃないだろうか？』と私は速達のはがきの赤いスタンプを横目で眺めながらしょんぼりと考えた、『あの女を無事に退院させてやれば、それでもういいんじゃないだろうか？』

そして私は、あさはかにも、神に対してこう祈ってさえいたのであった。

『神さま、私は、人間の限度というものがどんなに大切かよく知っております。それを越えれば、人間が人間でなくなることも聖書を通じて教えられてもいます。どうか私にその限度を教え、その限度を守らせて下さい』

だが、私は机からしおしお立上った。神の笑いを感じたからだ。どんな限度も、私が自分でつくっているかぎりにおいて、神をおかすものであることにはちがいなかったからである。

私は、貯金通帳と印鑑をもってアパートを出た。そして私は郵便局で、局員の指示にしたがって百円を通帳に残したまま、残りの全額を下してしまったのだった。その金を窓口で受けとって、空同然の通帳と金とをジャンパーのポケットに突っ込んでいた私の耳には人一人救うことは人間にはできないのよといった洋子の言葉が、耳鳴りのように鳴っていたのであった。私は、その耳鳴りに耐えながら、牧師に会うためでなく、工場へ出勤するために、都電の停留所へ向って急いだ。もう五時近くなっていたからであった。（つづく）

石島三郎編著

山上の教え

最新刊
講解と座談会

聖書の中で「山上の教え」ほど人々が、しばしばこれにふれる箇所は少ない。しかし、またこれほど厳しく人間に迫ってくる、恐ろしい言葉も多くはない。今日、山上の説教は教会内外にひろく読まれているにかかわらず、その真意が十分伝えられず、ときには、はなはだしく誤解されている場合さえある。

本書は、この「山上の教え」についての神学的釈義をできるだけ平易に簡潔にまとめた〈講解〉と、月刊「キリスト」に連載された信徒による聖書研究の座談会から、山上の教えのなかの聖句によるものの再録を収めた。著者の司会によりいろいろな教会の信者のかたがたの、こだわりのない、自由な話し合いによって問題点を考えあったものである。

ふたつの部分が互いにおぎない合って理解を助け、他に例を見ない、ユニークな聖書研究の手びきである。

新書判二〇〇頁　価二〇〇円

紅松雄二訳編

デイヴィッド・スミス 信仰通信

最新刊

昔英国に、ブリティッシ・ウィークリーというキリスト教の週刊新聞がありました。同様な出版物の中で、最良のものとして広く愛読されたものです。その紙上、毎号一定の場所に「デイヴィッド・スミスの通信欄」というのがありました。これは世界各地の読者から来る、神学や信仰問題に対し、博学にして敬虔なるスミス博士が、強い説得力ある文章で、丁寧親切、また実に快刀乱麻を断つがごとき、明答を与える通信文でありました。たとえば今の朝日新聞の読者が「天声人語」欄を見落とさないと同様の人気を博したものです。紅松さんが、読み馴れたそれらの通信の中から、特に今の私どもに有益であると思考せられた文章三十を選び、翻訳編集したものが本書の内容であります。

〈三吉務氏序より〉



新書判　一〇八頁
価一〇〇円　〒二〇円

死と生をめぐって

石島三郎・浅野順一・佐古純一郎

生きとし生けるもの、必ず直面させられる死の問題を中心として、またキリストの復活について、日本人の死生観、著者おのおののそれを率直に語った本書は、小著ながら深く心にふれるものである。

女性と生活シリーズ
価 140円　〒30円

真実を追って

女教師のノート

大塚野百合著

本書は、われわれはいかにして、失っている自己を回復し、人間と「断片的」でなく、「全体的」に出会うことができるか。どうすれば人間の悲劇を全重量をもって感じとり、共に苦しみと責任を負うことができるか。この問題意識に立って、自己の歩み、又書物との出会いを述べたものである。

女性と生活シリーズ
価 160円　〒30円

☆

日本基督教団
出版部
東京中央区銀座4の2
振替　東京　188329

編集後記

◇例年より、いささかしのぎにくい夏でした。もう立秋を過ぎたとはいえ、残暑は、かなりこたえます。健康なものにも、こうなのですから、病床にあるかたがたは、どんなに大変だろうかと、ご案じしています。

◇京都で行なわれた世界宗教者平和会議には、アメリカ、カナダ、オーストラリヤなどの西側代表とともに戦後はじめて、中国、東ドイツ、ポーランド、チェコ、ソヴィエトなど、共産圏のキリスト者代表が、来日しました。今月号は、誌面がなく、残念ながら、中国代表のお話しか、のせられませんでしたが、次号では、京都会議についてのご報告をさせていただきたいと思います。現在、これらのキリスト者代表は、原水爆禁止世界大会へ出席しておられます。

◇京都の帰り、大阪まで足をのばして、台湾の生蕃伝道に一生を捧げられた井上伊之助先生をお訪ねしました。七九才という、ご高齢にもかかわらず、お元気で、三時間あまり、したしく、お話をうかがえました。先生のご生涯について、もう少しくわしくお知りになりたいかたには、『台湾山地伝道記』(新教出版社、三五〇円)があります。

◇今月号で、特筆すべきは、アルバート・シュバイツァー博士の特別寄稿をえたことです。博士が、ジャングルの中で、いかにわかりやすく、聞き手の生活に即して、聖書を語っておられるかをうかがい、日本の伝道について、多くのことを教えられました。

◇小児マヒが流行しているのは、困ったことですが、今月は、大阪にお住まいの川口芳子さんから、小児マヒのお子さんをもった母としての信仰生活の記録を、掲載させていただきました。主の力が、あらゆる困難をこえる力であることを、つくづくと感じさせられます。

◇「信仰に生きる」は、小原十三司先生の神学校にいらした新川広子先生にご登場願いました。前々から、お願いしてあったのですが、ようやく願いがかなえられて、みなさんに、ご紹介できることとなりました。死線をこえて、新しく生きる、火のような信仰のまえには、どのような障害も、克服されていくようです。まことに、イエス・キリストは、「勝利の主」です。

10月号・予告

＜信仰に生きる＞
日本舞踊に祈りをこめて
——マグダラのマリヤを踊る花柳二葉さん——

＜わが信仰の生涯＞ (ソニー株式会社社長) 井深　大

東ヨーロッパ旅行記　井上良雄

京都アピール
——世界宗教者平和会議より——　飯島宗享

＜伝道説教＞ (同志社大学教授) 竹中正夫

＜現代のカルテ＞
原水爆禁止運動、ムリバイバルブー

＜社会を見る目＞
ベルリン危機　宍戸　寛

＜童話＞
タックバウエル博士と おさな友だち　仁木悦子

＜読者の証し＞
待つということ(盛岡市)大窪　光

＜生きる意味について・最終回＞
二つの人生　佐古純一郎

＜聖句をめぐる座談会＞ (長野県上田市にて)
真実を語れ　(司会) 石島三郎

＜キリスト教のいろは＞
こう答える、疑問のすべて　島村亀鶴

＜恋愛論＞
不安と情熱　高木幹太

＜連載小説＞
夜警番の日記　椎名麟三

月刊キリスト

昭和三六年八月二五日　印刷
昭和三六年九月一日　発行

編集人　高戸　要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会 文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替 口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六
発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞社販売店
東京都中央区有楽町一ノ二
印刷所　株式会社 恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

一部　六〇円 (〒六円)
半年　三六〇円 (〒共)
一年　七〇〇円 (〒共)
三弗(海外)

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. 9 September 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日第三種郵便物認可
昭和三十六年九月一日発行(毎月一回一日発行)

月刊 キリスト

九月号

定価 六〇円

NCC文書事業部

IBM 2879

製版・印刷・恒陽社